

# 異説SF超次元伝説ラル

目次

序 3

第一部 ラルの伝説 7

ラモー・ルーの復活

キャロン

サラ

伝説の剣

ゴモロスの神殿

ラモー・ルーの城

記憶

第二部

ラモー・ルーの夜

63

ラモー・ルーの夜

第一夜

ラモー・ルーの夜

第二夜

不思議な鏡

ラモー・ルーの夜

第三夜

ラモー・ルーの夜

第四夜

マリオ

ラモー・ルーの夜

第五夜

みそぎ 禊

ちぎ 契り

ユリア王女の帰還

第三部 二人の女王

177

異変

霧

お伽噺 とぎばなし

サラの過去 I

サラの過去 II

サラの過去 III

サラの過去 IV

微行

鏡の中へ

主あるじのいない城

シヤドル

ラルの真話 しんわ

静かなる時、リバーズの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる



## 序

ラルは四つの衛星を持つ青く輝く美しい星である。緑豊かな大陸を持ち、そこに住む人々は平和で穏やかな生活を送っていた。また、ラルには太古より言い伝えがあった。この宇宙を創造した女神が力の一部をこの星に残した、と。

——突然、この平和な星に恐怖が降り立つ。

ラルに隠された女神の力を手に入れようと、邪悪な魔王、ラモー・ルーが侵略してきたのだ。ラモー・ルーはその強大な魔力で大陸を引き裂くと、その半分をけっして太陽の昇らぬ地へと変え、自らの領地とした。

ラルの王とその后を始め、多くの犠牲を払った激しい戦いの末、ラルの七衛士は王家に伝わる七振りのリバースの剣と聖なるブレイブによって魔王を封印する事に成功した。

ラモー・ルーを退しりぞけた後も、魔王の領地とされた地は元には戻らず、永遠に夜の闇に包まれたそこは夜シヤドルの地と呼ばれ、その対比としてラルの人々の住む土地は昼ミユウの地と呼ばれるようになった。

ラモー・ルーとの戦いから十二年後――。  
ラル王家を護衛する衛士達の一団が昼の地ミユウと夜の地シヤドルの境界に位置する神殿で野営をして  
いた。

「なんでこんな辺境まで出張らねばならんのだ？」

「俺達見習いの訓練も兼ねてるんだ、文句言うなマリオ」

「こんな何もない退屈な廢墟よりも俺は田舎村でもいいから女がいる所がよかったぜ、  
あー、つまらないねえ、まったたく……」

マリオと呼ばれた青年が垂れ流す愚痴に苛立った仲間の衛士が小石を投げつける。

「愚痴くうるせえ！ あっちいってろ！」

「つとと、解ったよ。その辺りを偵察してくるであります！ ……へへっ。」

小石を戯おどけるように軽く躲かわし、大袈裟に敬礼すると、マリオは神殿の中の方へと歩いて  
行く。

治まらない怒りをぶつけるように、今度は近くにあった大きな石の塊に小石を投げつけ  
る仲間の衛士。

「ふん、いちいち勘に触る奴め！」

衛士の八つ当たりで傷付けられた石の塊にはすでに無数の傷が……否、そこには文字が

刻まれていた。

「ゴモロス神殿は昼と夜が会おう場所」

今となっては読める者がいなくなった古代ラル語だった。

碑文はさらに続く。

「静かなる時、リバーズの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる」

しかし、こちらの文字は摩滅が激しく紋様として残っているだけで読み取れることは出来なかった。

ゴモロス神殿――、十二年前のラモー・ルーの侵略による混乱で放棄され、今は廃墟となり、かつての威容は見る影もなくなっていた。

「……、いやあ、神殿とは言え不気味だねえ、どうも……」

マリオは「あわよくば金目の物でも落ちてないか」と、キョロキョロしながら、奥へ奥へと入っていき、やがて広々とした大聖堂に出た。

「ヒュー、こりや立派なもんだ……おっ？」

大聖堂を見回していると、光を反射しキラキラと輝く物を見つけ、駆けよるマリオ。

「おほっ、水晶鏡か。しめしめ、これは金になるぞ……ヒエッ！」

マリオが水晶鏡の品定めをしていると、鏡に映っている自分とは別に人影のような黒い塊がいる事に気付き、恐怖に飛び退いた。しかし、好奇心からまた鏡に近づくと恐る恐る覗き込んだ。

「……なんだなんだあ？」

鏡の中の黒い塊はおいで／＼をしながらもう片方の手で宝石を差し出してくる。

「おほっ！ 俺にくれるのかあ？」

宝石に向かって出されたマリオの手は水晶鏡の中にズブリと入っていく。そして、マリオが宝石を掴んだ瞬間、黒い塊の眼が妖しく光ると宝石から黒い紋様が流れ出し、マリオの腕に流れ込んでいく。

「うわあああっ！」

第一部

ラルの伝説

## ラモー・ルーの復活

ラモー・ルーとの戦いから十四年が経っていた。ラルの人々はラル王家唯一の生き残りであるユリア王女を中心に復興をとげていた。

昼ミユクの地に再建されたラル城。その城下町、客で賑わう酒場で狩人達が噂話をしていた。

「よう兄弟、最近、森で魔物を多く見るようになったと思わないか？」

「おうよ、おまえもそう思うか。前は月にいっぺん出くわすかどうかだったのが、ここんどこ、ほとんど毎日だぜ」

「奴らを狩っても売りモンになりやしねえから、弱ったもんだぜ」

彼等の言う森とは夜の地シヤドルにあるデイメルンの森を指し、人の立ち入る事のないそこは獲物である動物が多く棲み、とりわけ命知らずの狩人は格好の猟場としていた。

狩人達の話聞いていた老人が口をはさんできた。

「おい、あんた達、魔物が増えたって言ったおったな？ ……もしや、ラモー・ルーが

よみがえ  
蘇よみがえったんじゃないのか？」

「わはは！ まさかそんなことはあるめえ。ラモーのヤロウはあの七大衛士ななだいえいし様達が倒し

てくださったと、ガキの頃散々言い聞かされたぜ？　じいさんの方こそ、それを良く知ってるんじゃないのか？」

「そうだ、そうだ！　わはははは！」

「仮に復活しても、そこにおられる衛士部隊長殿が簡単に倒してくれるさ、なあマリオ？」

マリオと呼ばれた男が苦笑いしながらジョッキを軽く掲げる。

「さあ、じいさん、辛気くさいこと言っていないで楽しく飲もうぜ！　ヒック」

顔を真っ赤にした若者が老人の背中をバンバンと叩きながら酒を勧める。

今日も城下町の平和な夜が更けていく……

深夜、ラル城の裏門に黒い甲冑を着た数人の者達が張り付いている。固く閉ざされた扉をトン、トン、トントン…と符丁のように叩くと、内側からかんぬき門を外す音が聞こえた。続いて一人が通れるだけ扉が開かれると、素早く城内へ入っていく黒い甲冑達。

王女の寝所のドアが静かに開かれ、数人の侵入者がユリア王女の眠るベッドへと忍び寄っていく。

侵入者の気配にユリア王女が目を覚ます。

「……な、何者……うっ！ ……」

叫ぼうとするユリアの口を侵入者の手が素早く塞ぐ。

「離しなさい、無礼者！」

が、ユリアはその手をすぐに振り解くと、逃れようと扉の方へ行こうとするが、侵入者に阻まれ、部屋の隅へと追いやられてしまう。

黒とは違う色の甲冑の者がユリアの前に立つ。

「ユリア様、お静かに……」

そう言つて、人差し指を口をあて、シート、というポーズを取った男はラルの衛士の甲冑を着ていた。

「お、……おまえはマリオ！」

マリオはユリア王女の鼻にハンカチを当てる。それには眠り薬が仕込まれていたのか、カクンと気を失うユリア王女。

「ははは、自分で言うのも何だが、ここは警備がザル過ぎるね、まったく」

ユリア王女を掠さらっていく黒い甲冑達を見送るマリオ。

ラモー・ルーの城……、それは夜の地シヤドルの奥深く、荒涼とした岩石砂漠の中心にあった。

ラモー・ルーの居城であり、ラモー軍団の拠点、そして星々を巡る宇宙船でもあった。

石牢に鞭の音が木霊する度、鎖で大の字に磔にされ、裸に剥かれた少女の肌に痛々しい朱の傷痕が付けられていく。

「どうだ？ そろそろ言いたくなかったのではないか？」

ドロスはユリア王女の顎に鞭の柄を添えると無理矢理顔を上げさせる。

「……知りません」

そう答えた瞬間、ドロスは鞭を持った腕を振る。

「アウツ！」

空気を切り裂く音と共にまた一つ王女の体に鞭の痕が刻まれる。

「言え！ 女神の力の在処を。ラルの王女であるお前が知らぬはずあるまい！」

ドロスは剥き出しにされているユリア王女のクレバスにグリグリと鞭の柄をねじり込む。

「アゲウウツ！」

苦痛に顔を歪めるユリア王女。

「言わぬとこの鞭がお前の初めての相手になるぞ……」

「……知らないものは、答えられません」

ユリア王女は涙を流しながらも気丈に答える。

「ならば仕方あるまい……」

鞭の柄つかに力を込めるドロス。

「何をしておるのだドロス！ 止めやめよ！」

石牢に怒号が響き、黒い大きな塊が入ってくる。

「おまえは女の扱いが分かっておらん。下がっておれ、ドロス」

「ははっ……」

すぐごとと退出するドロス。

「初めまして、ユリア王女。わしの名はラモー・ルー」

「ラ……ラモー・ルー……？」

その名を聞き、信じられないという表情でラモー・ルーを見つめるユリア王女。

「この玉のように美しい肌を傷つけるなど、言語道断。そうでしょう？ ユリア王女」

ラモー・ルーの指が王女の肌をいやらしく撫でる。その指の感触に鳥肌が立つユリア王女。

「……おまえは十四年前に倒されたはず……どうして……」

「いえいえ、倒されてはいません。魔力を奪われ、封印をされていただけです。その縛めを解くのに十二年、失われた魔力を取り戻す為にさらに二年もかかってしまいました。そして今、あなたの前に立っているのです、フッフ」

「そ、そんな……、」

「ユリア王女の傷の手当てをして差し上げろ。」

ラモー・ルーの指がユリア王女のクレバスに滑り込み愛撫する。

「くっ……うう」

屈辱に唇を噛むユリア王女。

「……そしてその後は、生贄あとの間まにお連れするのだ、フッフッフ」

ユリア王女は「生贄いけにえ」という言葉がもたらす恐怖に震える。

「いやっ、いやあああああっ！」

後に控えていた黒いローブを着た二人がユリア王女の鎖を解き、石牢から連れ出していく。

## キヤロン

昼の地の抜けるような青空を舞う翼竜。

その背にはポニーテールに纏めた長い金髪を風になびかる少女が乗っていた。服は潤み朱色に染められた麻の貫頭衣、背中には収穫物で一杯の籠を背負っていた。

彼女は一目でどこかの村娘と分かる格好だったが、よく見ると手綱を握る左腕には黄金色の腕輪、古びてはいるが拵えがしっかりした短剣を腰に下げていて、村娘にしては不釣り合いなものを身に付けていた。

キヤロンは山菜や薬草などで一杯になった背中の籠をポンポンと叩き、満面の笑みを浮かべていた。

「今日は珍しい薬草を見つけたから結構な高値で売れるはずだわ、ウヒヒツ」  
おっと、という顔で口を押さえるキヤロン。祖父に「女の子が下品な笑い方をするものじゃない」といつも注意されていたのを思い出したのだ。

「キーラ、この風に乗るわよ、それっ！」

上昇気流を掴むため、翼竜<sup>キョウラ</sup>を旋回させたキャロンの視界一杯にディメルンの森が広がった。

十四年前、魔王ラモー・ルーが大地を引き裂いて出来た大溪谷を堺に、ラルの星は昼<sup>ミユツ</sup>の地と夜<sup>シヤドル</sup>の地に分かれてしまった。ディメルンの森は夜<sup>シヤドル</sup>の地に横たわる広大な森であり、魔物達が彷徨<sup>うろつ</sup>く危険な場所であった。

「大丈夫かなライケさん……」

キャロンは一ヶ月前に会った青年の事を思い出し、心配そうに漆黒の森を見つめた。

一ヶ月前——。

ライケと名乗る青年がキャロンの祖父、ルークを訪ねてきた。

「……なんじゃと、ユリア王女が掠<sup>さら</sup>われた？」

「そうです。……城の嚴重な警備が破られて」

「で、どこのどいつじゃ、そんな無礼な事をするやつは！」

「大溪谷を越え、ディメルンの森……、ラモー・ルー城の方向へと飛び去っていく黒騎兵のフライングマシンを目撃したものがいます」

「黒騎兵じゃと……？ まさか、ラモー・ルーが！ ……いやそんな事はありません。わし

らがあいつを倒したんじゃ」

「最近、黒騎兵に襲われた者がいます。デイルンの森では魔物が増えているとの情報も。……そのまさかもありえます」

「むう……信じられん」

重苦しい空気が流れる。

「ルークさん、かつて魔王を倒した七大衛士ななだいえいしの一人として、ユリア王女救出に御助力を頂けませんか？」

「わしはもう歳じゃ……それに今のわしには守るべきキャランがいる」

そう言うルークは横に立っているキャランを優しい目で見つめていた。

ライケは老人の少女に対する慈しみいづくを目の当たりにし、仕方ないという風に小さく頭を左右に振った。

「……残念です。では私はこれで失礼します。急いで救出隊に合流せねばなりませんので」

「ライケよ、ちょっと待っておれ」

「……?」

ルークは家の奥に引っ込み、しばらくすると戦斧を持って出てくる。

「わしは行けん……じゃが、これを持っていけ」

ルークはライケにその戦斧を渡す。それはかなり年期の入った物ではあったが、刃の冷たい煌めきが、未だ抜群の切れ味を持っていることを物語っていた。

「……これは？」

「わしも、亡くなったおまえの父もよく知っている友の物じゃ。残念な事にいつも最近亡くなったの。わしが形見として預かっておった。おまえの心強い味方になってくれるだろう」

ライケは戦斧を軽く振って、使い心地を確かめる。

「ありがとうございます。ルークさん。」

風に流されたか、ふと気付くとキャロンは大峡谷の上を飛んでいた。それは魔物の支配する土地、夜の地に近づいている事を意味する。

「キーラ、なにやってんのよ！ こっちは危ないんだから、早く昼の地へ戻るのよ！」  
 昼の地の方向へと翼竜の手綱を引くキャロン。彼女の視界の端に黒い点が三つ入ってくる。

「……？」

その方向に目を凝らすと、三つの黒い点はグングンと大きくなっていき、あっという間に目の前に迫ってくる。

「危ない！」

寸での所で避けたキャロンの横を黒い物体が掠めて飛んで行く。

振り返って見ると、飛行機械に乗った黒い鎧の兵士。

（あれが、おじいちゃんが言ってた黒騎兵……ラモー・ルーの兵隊……）

背中に嫌な汗が噴き出してくるのを感じるキャロン。

急旋回した黒騎兵が剣を振りかざし、再び襲ってくるのが見えた。

「いけない！ キーラ、逃げるわよ！」

ここで竦んでる場合じゃないと、キャロン達は慌てて逃げ始めた。

「きゃああっ！」

黒騎兵の剣をかわし、ジグザグと逃げ回りながらキャロンは翼竜に鞭を入れる。翼竜も斬られてはたまらないと全速力で飛行する。

追いかけてくる黒騎兵達を徐々に振り切っていく翼竜。

「ちょっと、どこ行ってんのよお！」

しかし、昼の地へと逃げたいのに翼竜は大峡谷に沿って飛んでいた。

やがて、キャロンの行く手に大きな建物が姿を現す。

「あれは……ゴモロスの神殿……」

丁度、キャロンがゴモロスの神殿の上空にさしかかった時、黒騎兵の剣が擦かすっていたのか手綱たづながブツツという音と共に切れた。

「……えっ？」

キャロンは空中に舞い、そしてゴモロス神殿へと真つ逆さまに落ちていく。

「キャアアアアッ！」

その時……、

カッ！

ゴモロス神殿を**目映まばゆ**い光が包んだ。

強力な光の目潰しを喰らった黒騎兵達は動きを止める。

光に背を向けて飛んでいた為、目が眩まなかった翼竜キョウリョウは黒騎兵達が怯んでいる隙に**昼ヒルの地チ**へと全速で飛び去っていった。

## サラ

「ラモー・ルー城のとある部屋——、

その部屋には厚みのある黒い絨毯じゅうたんが敷かれ、その上に一糸纏まとわぬ姿の少女が座っていた。……いや、黒い絨毯じゅうたんに見えたものはドロドロと蠢くゲル状の魔物だった。魔物の上に馬乗りになった少女の秘裂には魔物の触手が差し込まれ、トロトロと溢れ出す愛液をしやぶられていた。

「ああっ……はあああん……アア……」

「お前の蜜は本当に美味だ……わしの体の中に魔力が満ち溢れてくる……」

ゲル状の魔物は体の形を变幻自在に変え、少女の体に絡みつき翳かっていた。やがて魔物の体の一部がペニスを形作り、固く強張ると少女の花卉はなびらを貫く。

「んっ……あああああっ！」

テーブルの上に置かれた燭台あかの灯りが少女と魔物の交わりを壁に投影し、淫みだらな影絵を作り出していた。

部屋の隅には大きな鏡が置かれてあり、その前には古びたローブを着た者が座っていた。

目深に被ったフードからは髑髏むくろの顔が半分覗のぞき、ピクリとも動かない様子からそれは骸むくろのように見えた。

魔物がドロドロと小山のように盛り上がると、それは人の上半身の形となっていき、そこにラモー・ルーが姿を現した。過去の戦いで潰つぶされたのだろうか、失っている左目をカリカリと指で擦こすっていた。

「鏡使のぞいよ、ゴロモスの神殿を覗のぞいてみよ……左目が疼うずく」

ラモー・ルーに「鏡使のぞい」と呼ばれた古びたローブは、カラカラと乾いた音を立てながら動き出し、鏡の前に手を翳かざすと呪文を呟つぶいた。すると、映っていた黒い塊と少女のままぐわいはが揺らめくように消えていき、ここではない、どこか別の場所が映し出されていた。その鏡は魔力であらゆる場所を見る事が出来る、物見の鏡ものみだった。

鏡の表面を撫でるように掌てのひらを動かす度、映されている場所も切り替わっていく。それを何度かくりかえしてくうち、鏡使のぞいの手が止まる。

「ラモー様……」

「なんだ……」

「大聖堂に何者かがおります……」

「やはり、また宝物漁ほうぶつあきりの狩人が迷い込んでいたか。すぐに黒騎兵に始末させておけ」

「……いえ、これをご覧下さい」  
鏡使いが物見の鏡をラモー・ルーに示す。

「祭壇の上か……」

鏡が映す祭壇の上には少女が横たわっていた。

長い金髪をポニーテールに纏めた少女は半裸とも言える奇妙な衣装を着ていた。

「ほう……美味そうな娘ではないか」

ラモー・ルーの顔が好色に歪む。

「この者の見慣れぬ格好……もしや伝説の剣士では？」

物見の鏡を操作し、少女を大写しにする鏡使い。

「フフフ、こんな小娘がゴモロスの神官どもが語っていた伝説の剣士だと？ ……おまえ

はどう思う、サラ？」

十四年前、ラモー・ルーはゴモロス神殿を襲った。それは宇宙創造の女神が、この星ラ  
ルに隠したという力の手がかりを得る為だった。

その時、神官の一人が今わの際に放った言葉がラモー・ルーの脳裏に蘇っていた。

「四つの月が並ぶとき

伝説の剣士がゴモロスの神殿に降り立ち

悪を討つだろう、

ウゾウゾと蠢くラモー・ルーの絨毯の上で「サラ」と呼ばれた少女は体を起こすと、四つん這いで物見の鏡の前まで行き、立ち上がった。目の前でフルフルと揺れる少女の二つの乳房を鏡使いが食い入るように見ていた。

鏡使いの視線を気にもせず、サラは頬にかかった栗色の髪を指でかき上げながら鏡を覗き込む。

「ここをよく見せて」

サラが鏡の中の少女の左手にある腕輪を指差すが、鏡使いは彼女の形の良い乳房に見とれたまま動かない。

「……ここ！」

少し強い調子の声にハッとした鏡使いは、慌てて鏡の操作をする。

拡大して映された腕輪には複雑な模様が刻まれていた。……が、サラの眼が紋様を流れるように追う。それは彼女が文字として認識している事を物語っていた。

「……ここに我が力の鍵を収める」と刻まれています」

「ふむ、古代ラル語でか？」

サラは頷うなずき、続ける。

「……この腕輪、伝え聞いているラル王家伝来の物のように思います」  
今度は肩にかかった髪を手でかき上げるサラ。彼女の右腕の銀色の腕輪が燭台の光を反射し、キラリと輝く。それは鏡に映った少女がしている腕輪によく似ていた。

「ううむ、何故ユリア王女ではなくこの小娘がラル王家の腕輪を……」

そう言うサラモ・ルーは触手を伸ばしサラを<sup>から</sup>掬め捕ると自分へ向かって放り投げた。

「きゃあっ！」

ラモ・ルーのゲル状の体がサラを受け止める。

「これは……しばらく得られなかった女神の力への手がかりとなるか、フッフ」

ひとり<sup>ひと</sup>言<sup>ごと</sup>ちながらラモ・ルーはうつ伏せになったサラの尻を両手で撫で回す。

サラが腰を突き出すように上げるとラモ・ルーは指で彼女のクレバスを押し広げ、ペニスを挿入する。

「はうっ、ああんっ……」

ラモ・ルーの自在に変形する体はサラをうつ伏せでM字開脚の体勢に押さえつけ、捧げられた肉壺に容赦なくペニスを叩きつける。

「はっあああっ、ああああっ！」

「鏡使いよ、黒騎兵をゴモロスの神殿に向かわせるのだ」

ピストン運動するラモー・ルーのペニスにサラの愛液が絡みキラキラと光を反射していた。

「すでに付近を哨戒している黒騎兵が向かっております」

「ああっ！ あああん！ はああああんっ！」

鏡使いのボソボソとした言葉をサラの嬌声がかき消していた。

## 伝説の剣

ゴモロス神殿……、昼ヒユの地と夜シヤドの地を分かつ大峽谷にそれはあつた。

十四年前、ラモー・ルーは侵略の手始めにラル王国首都を中心に大陸を真つ二つに引き裂き、街を粉々に破壊した。

大地に巨大な裂け目が出来るほどの厄災にあつても不思議な事にゴモロスの神殿だけは破壊まぬがを免れ、今も大峽谷を跨またぐように建つていた。しかし、魔物の棲むディメルンの森に近い事もあつて、放棄され廃墟と化していた。

四つ並んだラルの月が天頂にさしかかろうとした頃。ゴモロス神殿の大聖堂の天窓が月光を招き入れ、その中央に据えられた祭壇を神々しく照らし出していった。

石造りの祭壇の上に少女が横たわっていた

「う……んん……」

淡い月の光に頬を撫でられキャロンが目を覚ます。

「んん、……なんなの、ここ？ 私どうして……」

キャロンは黒騎兵から逃げ回っているうちに翼竜キープから振り落とされた所までしか記憶が辿れない。胡床あぐらをかき腕組みをして、うーん…と思ひ出そうとがんばるキャロンだったが、自分の格好に気付き、呆然とする。

「……やだ！ なにこれ？」

大事な母の形見の腕輪と祖父から贈られた短剣は残っていたものの、さっきまで着ていた服は消え去り、代わりに甲冑——左肩には肩当て、両足には膝当てに脛当てと鉄靴——が身に付けられていたが、一番守らなければならぬ体には胸と腰を薄い布が覆っているだけ、というなんともアンバランスな姿になっていた。

「いやあん、いったいなんなのこれえ……」

裸に近い格好に頬を赤らめるキャロン。

「あうう、すごく恥ずかしいけど……、今は服よりもここはどこなのか知るのが先ね」  
 気持ち切り替え、キャロンはきよきよと辺りを見回したものの、天窓は祭壇を照らしているだけで、周りは薄暗く、自分がいる場所がどうなっているかよく解らなかった。キャロンが祭壇から降りようとしたその時、視界の端を素早い動きの何かかすがさっと掠めた。

「やだ！ 今度はなに？」

キャロンはあわてて祭壇から降りるとその影に隠れた。

暗くて良くは見えないが、大きな柱と柱の間をスッ、スッと何か移動しているようだった。

キャロンは何か動いていく方向とは逆方向に逃げようと祭壇をぐるりと回り込もうと後を向いたその瞬間、何かと鉢合わせする。

「きゃあああああっ！」

「うわあああああ！」

二つの悲鳴が大聖堂に響く。

「……で、あなたは逃げ遅れてラモー・ルーにその姿にされてしまった、と？」

祭壇に腰掛けたキャロンの周りを子犬くらいの大きさで翼竜キョウラを寸詰まりにしたような姿の黒い魔物がパタパタと飛んでいた。

「そうだよ」

魔物の名はペルルと言い、元は人間で、ここゴモロス神殿で神官見習いとして働いていた。神殿がラモー・ルーの軍団に襲撃を受けた際に逃げ遅れ、座興ざきように魔力で今の姿に変えられてしまったという。

くるくると旋回していたペルルはキャロンの正面で止まると、その紅い眼で頭から足の先までまじまじと見つめる。

「……あっ！」

キャロンは今自分が裸同然の姿であることを思い出し、あわてて両手で体を隠す。

「なっ、なによお、いやらしい！」

キャロンの抗議を無視し、ペルルは静かに語る。

「四つの月が並ぶとき、伝説の剣士がゴモロスの神殿に降り立ち、悪を討つだろう」

「……？ 何のこと？」

「古くから言い伝えられている予言さ。あれを見てごらん」

天窓の向こうに見える夜空を指差すペルル。そこには四つのラルの月が整列していた。

「ラルの四つの月が並んでいる……。そして、ここに君がゴモロスの神殿に現れた……」

「……？ ……？」

キャロンはいまいち理解出来ないでいる。

「今、予言が本当になろうとしている。君は伝説の剣士なんだ」

ペルルは指差した方向をゆっくりと月からキャロンへと変える。

「……ええっ？ ……私が？ ……伝説の剣士い？」

「伝説の剣士である君は悪を討たねばならない……そうラモー・ルーを倒すんだ」

「私があ？ あはははは！ 冗談はよしてよ、もう！ あはははは！」

コロコロしたキャロンの笑い声が大聖堂に響く。

「じゃあ、これを見ても冗談だと笑うかい？」

「？」

ペルルは祭壇の奥にある水晶鏡の前に立つとなにやら呪文を唱える。すると、鏡にぼんやりと映像が浮かび上がってくる。

「きゃっ！……やだっ……なにこれ……」

石牢だろうか、そこには鎖に繋がれた全裸の少女が黒い塊のような魔物によって蹴られている姿が映し出されていた。キャロンはその少女の顔を知っていた。ラルの城下町に遊びに行ったときに、たまたま城のバルコニーから民衆に手を振るユリア王女の姿を見ていたのだ。

見るに堪えない映像に生娘のキャロンは目を逸らしたまま二度と鏡を見なかった。

「これがラモー・ルーさ。今もこうやって捕らえたユリア王女様を慰み者にして遊んでいるんだ。他にも掠さらわれていった女性達も同じように……」

「なんてひどい……」

「伝説の剣士として選ばれた君はラモー・ルーを伐ち、捕らえられた王女様や苦しめられていたラルの人達を救う義務があるんだ」

「……」

自分に背負わされた伝説の剣士という立場の深刻さを理解し始めたキャロンは押し黙ってしまった。

再び、廃墟に相応ふさわしい静寂が戻ろうとしたその時……、  
ガシャーン！

天窓を破ってフライングマシン三騎が大聖堂へなだれ込んでくる。キャロンを追い回していたラモー・ルーの黒騎兵達だ。

(チッ、黒騎兵め！ ……いいところを邪魔しやがって)

ペルルはキャロンに聞こえないような小さな声で呟くと、黒騎兵目掛けて猛然と突進し、体当たり攻撃をした。

「戦うんだキャロン！」

ペルルは祭壇の影に隠れているキャロンを叱咤しつたする

「そんな事言ったってえ！」

泣きそうな声で答えるキャロン。

「君の腰にある伝説の剣、リバーズの剣を使うんだ！」

「これが伝説の剣……？」

自分の腰にぶら下がってる短剣を見つめるキャロン。

「キャロン、これに乗って！」

見ると、ペルルは黒騎兵からフライングマシンを分捕ぶんどっていた。

キャロンは斬りかかってくる黒騎兵をなんとか躲かわし、フライングマシンに乗り込む事に成功する。

「レバーを引いて！」

ペルルに言われるまま、キャロンが操縦桿を引くとフライングマシンは浮き上がり、破られた天窗を抜け、空高く舞い上がる。

「これどうやって操縦するのお？」

半べそのキャロンが叫ぶ。

「もう操縦してるよ！」

「この短剣はおじいちゃんから貰ったもので、伝説の剣なんかじゃないわ」

キャロンにとっては物心ついた頃から普段使ってきた何の変哲もない短剣。いきなり

伝説の剣だと言われても冗談にしか聞こえなかった。

「剣の柄つかを見てごらん、ラル王家の紋章があるだろう。それは間違いないく伝説の剣、リバースの剣だよ。十四年前、ラモー・ルーを倒した七振りのうちのひとつさ」

ペルに言われて初めて柄つかにある巧たくみな彫刻がラルの紋章だとキャロンは知った。

「おじいちゃんはそのような大事な物をあたしに……なんで？」

祖父ルークがラモー・ルーを倒した七大衛士ななだいえいしの一人だとは知っていたが、そんな重要な物を自分に託していたことに戸惑うキャロン。

そうしているうちに、キャロンの慣れない操縦でフラフラと飛行するフライングマシンはあつと言う間に黒騎兵に追いつかれてしまった。二騎の黒騎兵のフライングマシンは連携し、狼が狩りをするように追いついてくる。昼ヒユの地ツからはどんどん離れ、夜シヤドルの地の奥深くへと入り込んで行くキャロン達。

黒騎兵との鬼ごっこで、キャロンがフライングマシンの操縦に慣れてきた頃には広大なデイメルンの森はすでに後方、瘴気シヨウキをはらんだ大きな沼も飛び越え、岩石砂漠に突入していた。

砂漠の荒涼とした景色がしばらく続いた後、キャロン達の行く手に奇妙な光景が迫って

きた。

「あれって？……まさか……」

山のように巨大な奇岩が空中に浮いており、その奇岩の周りには家ほどもある岩がいくつも漂っていた。

「……ラモー・ルーの城さ」

ペルルの言葉に今にも回れ右をしたくなるキャロンだったが、追っ手からの逃げ道はラモー・ルー城への方向しか残されていなかった。

ラモー・ルー城の衛兵達がキャロン達の接近に気付き、向かってくる。

「いやーん！　なんでこうなるのお！」

体当たりしてくる黒騎兵をかわしながら、打ち据えられてくる剣をリバースの剣で受け止めながら、ぐるぐると逃げ回るキャロン達だったが、段々と逃げ道を塞がれ、乗っているフライングマシンの翼を時折ガリガリと城壁に接触させていた。

ガキンツ、振り下ろされた黒騎兵の剣をキャロンは間一髪リバースの剣で受け止める。

「きゃっ！」

が、キャロンの手からリバースの剣は弾き飛ばされてしまう。

「あーっ、リバースの剣が！」

ペルルは落ちていくリバースの剣を追ってフライングマシンから飛び降りた。

「ペルルー！」

思わずペルルに手を伸ばしたキャロンはその隙をつかれ、黒騎兵のフライングマシンの体当たりを許してしまふ。

「きゃあっ！」

四つある翼の一つが衝撃音と共に吹き飛んでいき、キャロンを乗せたフライングマシンはきりもみ状態になりながら落下していく。

「きゃああああああああっ！」

## ゴモロスの神殿

ラモー・ルーによってユリアが掠さらわれてすぐ、衛士による救出隊が組織された。しかし、彼等はデイメルンの森に棲む魔物達に苦戦し、かれこれ一ヶ月、森の入り口付近で釘付けになっていた。

魔物の群の最後の一匹に止めを挿すライケ。父の形見の長剣を鞘に収めながら森の向こうに見えるゴモロスの神殿にふと視線を移すと、空に四つの影が見えた。

「……あれは？……、黒騎兵と翼竜？ ……！ 人が追われているのか！」

黒騎兵を振り切るつもりだろう、翼竜キウラが猛烈にスピードを上げ、神殿方向に飛んで行く。ライケは手助けできないもどかしさを感じながら翼竜キウラの動きを目で追っていた。

「違う、そっちじゃない、どうしてそっちへ行くんだ？ ……あっ、危ない！」

ゴモロスの神殿上空で、翼竜キウラから人が振り落とされた瞬間、  
「うっ！……」

ゴモロスの神殿が強烈な光を放ち、目が眩くらむライケ。

「うう、……なんだったんだ、あの光は？」  
視力を取り戻したライケの眼に、ゴモロス神殿上空で三つの影が旋回しているのが見えた。

ユリア王女救出隊は野営の準備を始めていた。

「ふーん、ゴモロスの神殿の方で人が襲われていたから助けに行きたい、……ねえ。もう死んでるでしょ」

焚き火の前に座り、隊長のマリオが吹き矢の手入れをしながらライケの話を聞いていた。

「お願いします！」

深々と頭を下げるライケ。あの高さから落ちて生きているとはライケも思っていなかった。ただ、隊長のマリオには信用の置けなさを感じていた彼は、ゴモロスの神殿が光った原因を調べに行く言い訳が欲しかったのだ。

「……まあ、この間、正式に衛士になったばかりのヒヨッコ君一人が抜けても問題ないしな、許可しよう。」

皮肉たっぷりと言うマリオ。

「ありがとうございます」

頭を下げ続けるライケを「こいつ嫌味でやってるのか？」と苦々しげに見るマリオ。

「ただし、明日の朝までに帰ってこなければ置いていく」

「分かりました」

ライケはマリオに敬礼するとゴモロス神殿の方へと走り出していった。

「一人分の手間が省けたな……」

マリオはニヤリと笑うと、ライケの背中に狙いを定め、空の吹き筒をフツと吹いた。

大峽谷の底から吹き上がってくる突風に煽られながら、ゴモロス神殿へと繋がる橋を渡るライケ。

「やはり、大峽谷を落ちていってはお助かるまい……」

ライケが峽谷を覗き込むと、大地の裂け目は永遠に続いているかのように深く、谷底は霞んで見えなかった。ライケは子供の頃に聞いたお伽噺に「ゴモロス神殿はあの世に繋がっている」とあったのを思い出していた。

「満更作り話ではないかもな……」

ライケはなんとか無事に橋を渡り終え、神殿内に入ると、辺りを警戒しながら奥へと進んでいった。埃とカビが神殿内を覆っていたが、十四年前のラモー・ルーの襲撃の痕跡は

まだ鮮明に残っていた。

カツン…ライケのつま先に何か当たったりコロコロと転がっていく。拾い上げて見るとそれは青銅製の腕輪だった。腕輪の裏には名前が刻まれていた。

「……ペルル、」

ライケがその持ち主を探すと、すぐに見つかった。柱によりかかるように倒れている白骨体のものであった。

骨の大きさからすると、その骸はまだ子供のようだった。

「ラモー・ルーめ……むごいことを……」

ライケは遺体の前に腕輪を置き、黙祷すると、奥へと慎重に進んでいく。

神殿には大小幾つもの部屋があり、襲撃後に盗賊によって荒らされた部屋もあった。探索を続けるうち、ライケは大きな広間に出た。大聖堂だった。

「なんて立派な聖堂だ……」

ライケは大聖堂の荘厳さに感心しながらも慎重に中へと歩を進める。

「……はっ！」

そこにはつい先まで争いがあったと思われる痕を見つけ、とっさに物陰に身を潜め、周りの気配を窺うライケ。……、しかし大聖堂は静けさを保ったまま。警戒を解き、立

ち上がったライケは柔らかな光をその頬に感じる。

「あそこから……」

見上げると破壊された天窓からラルの四つの月が覗のぞいていた。

「あの光は黒騎兵が火薬玉を使った光だったのだろうか……」

月光によって、大聖堂の中に浮かび上がったように見える祭壇に近づき、その周りをぐるりと一周するライケ。すると、争いで絨毯がめくれ、剥き出しになった隠し扉を見つめる。

重い隠し扉を開け、奥を覗き込むライケの顔に冷たい風がフーツと吹き付けられる。

奈落へ落ちていくような急な下り階段がそこにあった。

そこは神殿の隠し部屋だった。中の様子から、かつては宝物が納められていたのだろう。

「ん……これは？」

徴かびた書物が散乱している中に、古びた鏡台があった。それには見事な彫刻が施されていたが、肝心の鏡は粉々に砕かれていた。

「もしや、これがブレイブ……」

ライケは七大衛士ななだいゑいしの一人であったルークから、ラモー・ルーを封印したブレイブをゴモロスゴモロスの神殿の隠し部屋に安置した、と聞かされていた。

「ブレイブがこんな状態では、ラモー・ルーが復活しているのは間違いないだろう……」  
 改めて部屋を見回すと、そこには明らかに盗掘された痕があった。

「くそっ、盗賊共め！ よりにもよってブレイブを破壊したのか！」  
 ライケは拳を硬く握りしめ壁を叩いた。

暗澹あんたんとした気持ちで野営地に戻ったライケはさらに愕然がくぜんとする。仲間達の姿はそこにはなく、冷え切った焚き火跡が救出隊が出発してずいぶん時が経っている事を示していた。

「いったい、どうして？ まだ朝にはなっていないはずなのに……」

ライケが昼ミユウの地の方角の空を見ると、――夜シヤドルの地では昼と夜の区別がないので、昼ミユウの地の空を見て昼夜を確認する――昼ミユウの地もまだ夜空だった。

混乱する頭を振りきり、とにかく急いで隊に追いつこうと森の中へと走り出そうとした瞬間、反射的にライケは身構え、背中つかの剣の柄を握る。

眼前の大木の影から熊のような魔物がゆっくりと姿を表した……。

## ラモー・ルーの城

「……キャロン……キャロン……」

「うう……」

「起きてよキャロン……」

「ううーん……」

「キャロンてば！」

頭の上から自分を呼ぶ声にキャロンが目を覚まし、身を起す。

「……誰？」

「ペルルだよ！」

「ああ、ペルル……」

「もう何寝ぼけてんだよ、キャロン！ ほら、リバースの剣。ユリア王女を助けに行かないと！」

ペルルがリバースの剣を差し出す。

「えっ……うん」

キャロンは受け取った剣を腰の鞆に戻しながら辺りを見回すと、通路の天井にぽっかりと大穴が空き、夜の地シヤトルの空が見えていた。その下には大破して転がっているフライングマシン。キャロンは運良くラモー・ルー城内に不時着したようだった。

「さあ、早く、こっちだよ！」

まだ頭がぼーっとするキャロンの手をペルルが掴み、強引に引っばっていく。

ラモー・ルー城の奥へへ、しかも暗い方へへとペルルは進んでいく。気付くと真つ暗な通路を壁伝いに歩いていて、キャロンはどこをどう来たのか分からなくなっていた。

「ねえ、ほんとにこっちでいいの？」

「俺の野生の勘がこっちだと言っている」

自信満々に胸を張るペルル。

「ほんとにいい？」

それから暫く進むと薄明かりが見えた。光が見えた事が嬉しくなったキャロンが灯りに向かって早足で歩いて行くと、そこには上へと続く階段の入り口があった。

階段には壁に掲げられた松明たいまつの炎のチリチリという音だけがあり、上からのし掛かってくるような不気味な静けさに背筋が寒くなったキャロンは、踏み出すのを躊躇ためらう。

「ほら上のぼって上のぼって」

ペルルが彼女の尻をぐいぐいと押す。

「やだエッチ！ お尻触らないで」

長い階段を上った先には大きな扉があった。扉は少し開いていて、キャロンがその隙間から中を覗いてみると、鎖に吊された一糸纏わぬ少女の姿があった。

「ユリア王女だ」

ペルルがキャロンの耳元で囁く。

音を立てないように扉をゆっくりと開くと、キヨロキヨロと中の様子を窺うキャロンとペルル。ユリア王女以外、誰も居ないようだ……。

「今のうちに王女様を助けなきゃ！」

キャロンは足音を立てないように、抜き足差し足でユリア王女へと歩いて行く。途中に王女の周りを囲むように溝があり、そこには黒い液体が満たされていた。

「やだ、気持ち悪いわ……えいっ」

溝を跳び越えるキャロン。

「……つとと……きゃっ！」

ドスン！

彼女のジャンプはギリギリで向こう岸に届き、着地で盛大に尻餅をついてしまった。

「あいたた……」

尻をさすりながら、王女の元にか辿り着いたキャロンは、意識を失った彼女の体  
にいくつもの紅い痣あざが残されているのを目の当たりにする。

「酷い……今助けますからね」

キャロンがリバースの剣で王女の鎖を断ち切ろうとしたその時、溝の中の黒い液体がザ  
ワザワと波立ち襲いかかってきた。

「きゃっ！」

キャロンが咄嗟にリバースの剣で薙ぎ払うと、斬られた黒い液体はブスブスと煙を上げ  
灰になって消えていった。

「すごい、これがリバースの剣の力……」

「……ようこそ、我が城へ」

突然、背後から声を掛けられ、ハッと振り向くと、キャロンの足下あしもとの影が山のように盛  
り上がり、グニグニとうねりながら人の形に変わっていく。その気味悪さにじりじりと  
後退あひしまりするキャロン。

「……っ！」

見る／＼うちに、キャロンの身長は二倍はあるだろうか、黒いマントを着た大男が彼女

の目の前に立っていた。

「……フフフ、我が名はラモー・ルー。この夜の地の主」

キャロンを見下ろすラモー・ルーの隻眼せきがんが紅あかく輝く。

「ラモー・ルー……」

魔王を前に息を呑むキャロン。

「かわいいお嬢さんが我が城に何の御用かな？」

ラモー・ルーの丸太のような右腕がキャロンに掴みかかってくる。

「たあーっ！」

その手を短剣で切り裂くキャロン。

「グオッ！」

ラモー・ルーは斬られた右腕を押さえる。見ると傷口は酷く焼けただけ、煙を上げていた。

「これ以上痛い目を見たくなかったら王女様を放しなさい！」

リバースの剣の威力に勇気が沸いて来たキャロンはラモー・ルーに降伏を促した。

「フフフ、見てくれは勇ましい剣士様だが……」

しかし、ラモー・ルーは怯ひるむどころか、キャロンの瑞々みずみずしい体を舐めるように見ている。

「……太刀筋が素人そのもの」

ラモー・ルーがそう言うと同時にキャロンの足下あしもとの床がゴムのようになり、うねり始めた。不意を突かれたキャロンはバランスを崩し床に倒れ込む。

「きゃあつ！」

ゴムのようになった床から無数の触手が生えだし、キャロンの手足に絡みつく。彼女の体を宙に持ち上げた。

「いやあん、なにこれ！」

触手を振り解ほどこうとするキャロンだったが、動けば動くほど、それらはきつくキャロンを締め上げる。堪らず右手に握られたリバーズの剣が零れ落ち、金属音を響かせながら床に転がっていく。やがてキャロンの力ではどうすることも出来なくなり、ついには蜘蛛の巣に捕らわれた蝶のように彼女は空中にはりつけ磔はりつけになっていた。

「いやっ、放して……っ！」

「フフフ」

悠然と近付いて来るラモー・ルー。キャロンがなお諦めず藻掻き続けていると……

(あっ！)

ラモー・ルーの背後でペルルがリバーズの剣を拾い上げている！

(いいわ、ペルル！ ラモー・ルーはまだ気付いてないわ)

ペルルがリバースの剣を持って彼女の方に飛んでくる！

(そうよペルル、リバースの剣をあたしに！)

近づいて来るペルルと共に訪れつつある好機にキャロンの瞳が輝いた……

(えっ？ うそ……)

しかし、次の瞬間、想像もしなかったペルルの行動に彼女の希望は粉々に打ち砕かれていた。なんとペルルはラモー・ルーにリバースの剣を渡しているのではないか！

リバースの剣を無造作に掴むラモー・ルー。掌てのひらの刃が食い込んだ部分がジュウジュウと焼け焦げていく。

「リバースの剣……、小賢こざかしい物を使いおって」

苦々にがにがしい表情で剣を握りつぶすラモー・ルー。

「どうして……どうしてペルル……」

何が起こっているのか分からず頭が真っ白になるキャロン。

「キャロン、おいらの正体はね……」

ペロリと舌を出し意地悪そうに笑うと、ペルルはラモー・ルーの頭に掴まった。すると彼の形は見る間に崩れていき、ラモー・ルーと同化していった。そして、ペルルの姿がす

っかり消えると、魔王の潰れていた左目がゆっくりと開く。

「伝説の剣士の出現に備え、ゴモロスの神殿に伏せておいた我が分身なのだ」

「ああ、そんな……」

キャロンは声もなくぱくぱくと口を動かすだけだった。

「フフフ、伝説の剣士よ、次はおまえが正体を明かす番だ」

ラモー・ルーが手を翳すとキャロンの胸と腰を申し訳なさ程度に覆う薄い布がドロドロと溶け落ちていった。

「きゃあああ！」

体を舐められているかのようなラモー・ルーの視線にキャロンは鳥肌が立っていた。

「ふむ、一皮剥いてみれば……どこかの村娘と言ったところか」

ラモー・ルーは掌をキャロンの肌てのひらに滑らせる。成長を始めたばかりの小振りな乳房、それなりに括くびれた腰、程好く絞まった下腹、キュツと形の良い尻、しなやかな太股……まるで物を品定めするかのように。

「きゃあああっ！ いやあああっ！」

「誰かに伝説の剣士に仕立てられでもしたのか？」

「いやああああ！ やめて！ エッチ！ 変態！」

キャロンを見下ろしながら、彼女の手触りにニヤリとするラモー・ルー

「まあよい。魔力を完全に取り戻した今のわしには、もう恐れるものはないのだ……それが伝説の剣士だとしてもな、フハハハ」

泣き叫ぶキャロンに意も介さず、今度は指を彼女の秘裂にそわしながら愛撫するラモー・ルー。先とは打って変わって羽箒で触るように……。

「この野趣溢れる体……たまにはこういった娘を楽しむのもよいか、フフフ」

「触らないで！ いやーっ！」

「騒がず……、楽にするのだ……」

キャロンの瞳を覗き込むラモー・ルーの紅い眼あかが怪しく光る。

(ダメ、この眼を見ちゃダメ！)

本能で目を瞑ったキャロンだったが、一瞬遅かった。恐怖心がすうっと消えていき、意識がふわっと浮いた感じになると全身から力が抜けていった。

キャロンは虚ろな目でただラモー・ルーを見ていた。

「……そうだ、力を抜くのだ。そうすれば身も心も気持ち良くさせてやる、フフフ」

ラモー・ルーはキャロンのプルンとした唇をこじ開けるように太い舌を差し込むと彼女の舌に絡めもてあそ弄ぶ。

「んんん……っ、ぐううっ」

小さな乳房の柔らかさを掌てのひらで楽しみながら、キャロンの唇を味わった舌を今度は桜色の乳首へと這はわしていく。ラモー・ルーの愛撫にぴくぴくとキャロンの体が反応する。

「さあ、おまえの蜜壺を見せてくれ」

魔王の声に反応し引き絞られた触手がキャロンの両脚をさらに大きく開き、ラモー・ルーの眼前に少女の白磁のようなクレバスが晒された。

ラモー・ルーの太い指がキャロンのむっちりとした下の唇を押し拡げていく。

「いやあ……ああ……」

秘密の花園を露あらわにされたキャロンが弱々しく首を振る。

「ほう……これはこれは。村娘にしては美しい蜜壺を持つておるではないか」

ラモー・ルーは感嘆の声を上げると、ふるふると震えるキャロンの花卉をじっくりと観察する。

「どれ、おまえの蜜はどのような味がするか……」

そう言うと、ラモー・ルーの体はウネウネと蠢うごめき、徐々に蜘蛛のような魔物の形へと姿を変えていった。幻術に囚われたキャロンはその異様な光景をぼんやりと眺めていた。

魔獣がキャロンの秘裂に舌を伸ばし、チュバチュバと音を立て、キャロンの花卉はなびらを舐ねぶり

蜜を誘う。

「だめえ……いやああ……」

キャロンのヒクヒクと息づく蜜壺から蜜が滴り始める

「出てきたぞ、出てきたぞ蜜が……さあ、どんな味がするのだ？」

魔獣は細い舌を花弁はなびらの奥へと差し込む

「っああっ！んっ、はあっ！」

生まれて初めて胎内への異物の侵入に藻掻もがくキャロン。

窮屈ツァギナな腔うごめをラモー・ルーの舌が蠢うごめき拵ていげていきながら、肉襲にくひたを愛撫する。

「おお、すばらしい！……ううむ！なんと美味しい蜜だ、魔力が湧わき上がってくる」

魔獣はキャロンに武者振り付きたくなる衝動を抑え、入り口を傷つけぬよう差し込んだ舌を慎重に操る。

「はあん、はあああっ」

キャロンの唇から甘い吐息が漏れ始め、魔獣はトロトロと舌尖に絡みつく彼女の愛液を味わう。

「この娘、サラと同等か……すばらしい」

ヒクつく花弁はなびらから止め処なく滴る愛液を丁寧ていねいに舐め取っていく。

「次はおまえの蜜壺の具合を確かめさせてもらうぞ、フッフ」

魔獣は無数の細い舌でキャロンの体を舐めまわし愛撫すると、彼女を宙吊りにしている触手に脚をかけ、少女の体の上に覆い被さる。まさにそれは網に掛かった獲物に襲いかかる蜘蛛のようだった。

魔獣の腹部からペニスが顔を出す。それは蛇のようにウネウネと動き回り、キャロンの臍へそや乳房を亀頭で突つつきながら最後にキャロンの唇をこじ開ける。

「んんっ……ぐふっ……ううっツ……」

ペニスがキャロンの口をゆっくりとそして何度も出入りする。……一頻ひとしきり少女の口を犯したペニスは、強張りを見せつけるようにキャロンの目の前でユラユラと動く。

「あああ……」

キャロンの視線を引き連れたペニスが彼女の股間の方に動いていき、亀頭を女陰に擦りつけ始める。

「いやあ……だめえ……」

弱々しく悲鳴をあげ、ペニスを見つめながら頭をいやいやと振るキャロン。

「フッフッフ、では蜜の極みを頂こうか……」

ペニスが花弁はなびらに頭を埋め、徐々にキャロンの膣内なごに侵入していく。

「ああああっ、いやああっ……ああああっ！」

ズヌヌヌツ、体を串刺しにされるような感覚がキャロンを襲う。少女の小さなヴァギナ膣が魔獣のペニスをゆっくりと飲み込んでいき、キャロンが処女だった証が一筋滴る。

ラモー・ルーの前戯で十分に潤っていたキャロンのヴァギナ膣はペニスのリズムカルなピストン運動を生み、彼女の体がそれに合わせ上下する。

「ああっ、はあああッあああッ」

ラモー・ルーの幻術のせいだろう、破瓜の痛みは一瞬で、今は蕩けるとろような感覚がキャロンを包んでいた。

「ああっ、ああっ、ああああっ」

キャロンの瞳に映った紅く光る魔獣の眼は、思いがけず手に入れた上物を味わう歓喜に輝いていた。ペニスにもその悦びが動きになって現れ、荒ぶるピストン運動で貼り付けにされたキャロンの体が激しく跳ねる。

ズチュツ、ズチュツ、ズチュツ

「あああっ！ ああッ……っあああ！」

「フフフ、牡この味をしっかりと覚えるのだ」

キャロンの手脚を縛ひまめている触手が枝分かれし、腰に巻き付く。それは彼女の体が跳

ねるのを止めると共にコルセットのように機能した。内臓の動きを制限され、キャロンの処女子宮はペニスの打撃を一身に受け止める。

ズンッ！ ズンッ！ ズンッ！

鐘撞きのように子宮を打ち鳴らされ、快楽の海に漂っていたキャロンの意識が現実を引き戻される。

「ひいっ！ ひっあああああっ！ あああああっ！」

ペニスに女性器を刺られる鮮明な感覚がキャロンに襲いかかる。

(いやあっ！ お腹が！ お腹が裂けちゃう！)

子宮を震わせる一突き／＼ごとの衝撃が体の芯を貫いていく。

「ひぐっ！ ぐひっ！ ひぎっ！」

自分はどうしてこんな苦しい目に遭ってるのだろうか……自分はこのまま串刺しにされて殺されてしまうのだろうか……家に帰りたい……助けておじいちゃん……

キャロンの脳裏に色々な思いが浮かんでは消え／＼していく。

しかし、子宮を激しく震蕩させるバイブレーションがキャロンの思考力を奪い、一方で彼女の感覚を鋭くさせていった。

ドクッ、ドクッ、ドクッ

やがて臍へその下から響いてくる鼓動が熱い快こころよさとなって、体が包まれていくのを感じる  
キャロン。

(ああ、もうどうなってもいい……)

深い井戸の底へと引き摺り込まれるように彼女の心は夢心地へと墮ちていった。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！」

すっかり力が抜けたキャロンの体はペニスに好いように貫かれ、二つの小さな乳房がブルブルと上下していた。

「フフフ、そろそろ頃合いか」

そう呟いた魔獣の紅い眼にはキャロンの惚ほろけた顔が映っていた。

「あああつ、うつ、ああああつ、つあああああ！」

ピストン運動の動きが激しさを増していき、ズンと強く一突きするとキャロンの陰なかに魔獣の精液が放たれ始める。

ビュル、ビュツ、ビュルルル

「それ、おまえの体に一生消えぬ性ステイグマ痕を刻んでやろう」

「あああああつ、いやあああああああーっ！」

胎内に浴びせられた熱い逆ほとばしりがキャロンの体に電流が走ったような快感を与え、絹を

裂くような悲鳴を上げさせる。その爆発的なエクスタシーに耐えられずキャロンは気を失ってしまった。そんな彼女を魔獣は構うことなく、精液を少女の体に沁み込ませるように射精を続ける……

宙に磔はりつけにされたキャロンの花弁はなびらから滴り落ちた精液が床に白い斑点を作っていた。

人の形へと姿を戻したラモー・ルーが意識を失ったキャロンの膣ヴァギナに指を挿入し、キュッ、キュッと締め付けてくる彼女の息遣いを楽しむ。

「……これほど素晴らしい蜜を持った娘に出会ったのは初めてだ」

キャロンの肌を手を滑らせながら、彼女の左手にはめられた腕輪を外すラモー・ルー。

「お前達、この娘を石牢に入れておけ……丁重にな」

「御意」

部屋の隅の暗がりから黒いローブを着た二人が音も無く現れると、キャロンの縛めを解き、運んでいく。

ラモー・ルーが手にした腕輪を松明たいまつに翳かざすと、腕輪の紋様がゆらゆらと輝く。

「しかし、ラル王家に伝わる腕輪を何故あの娘が……」

## 記憶

黒い絨毯じゅうたんのうねりに跨またがったユリア王女の長い髪が踊り、ペニス状触手に貫かれた彼女の股根からは愛液が滴っていた。

「あああつ、あああああ！」

上下するユリア王女の動きが激しくなり、絶頂を迎えた体が弓形に反り、ぴくぴくと痙攣すると、ぱたりと黒い絨毯じゅうたんの上に倒れ込む。

黒い絨毯じゅうたんの一部が小山のように盛り上がると、そこにはラモー・ルーの上半身があった。

「……」

ラモー・ルーがユリア王女の目の前に金色の腕輪を無言で差し出した。それはキャロンから取り上げた腕輪だった。

「……その腕輪がなにか？」

ユリア王女は無関心にラモー・ルーの手の中で煌めく腕輪を見つめていた。

「…………ふむ」

黒い絨毯じゅうたんから生えだしてきた触手がユリア王女の手足を掴み、彼女の身動きを取れなくした。

「…………ああ」

ラモー・ルーの手によって、すっかり肉欲の虜とされてしまったユリア王女はされるがまま、魔王の前に体を捧げる。

ラモー・ルーは小指が失われた左手を出すと、薬指の第二関節辺りを摘まみ、引きちぎった。

「フフフフ…………」

薬指をユリア王女の秘所へと挿入するラモー・ルー。

「ああ……………はあああ、…………」

ユリア王女の膺ウアギナに入れられた指が芋蟲いもむしのように動きモゾモゾと奥へと入っていく。

「ああ……………いや……………」

ラモー・ルーの指がユリア王女の子宮ホルチオ口をこじ開け、中へと侵入していくと、子宮と融合していく。ユリア王女の滑らかなカーブを描く下腹部に紫色の淫紋が現れると、内臓を驚づかみにされるような強烈な快感が彼女を襲う。

「あつ、く……ああああつ！ ……ひっ、ああああつ！」  
 長くか細い悲鳴を上げ、失神するユリア王女。と同時にラモー・ルーの頭の中に王女の記憶が流れ込んでくる。

「見えてきたぞ、ユリアの記憶が……」

ラモー・ルーは体の一部を他人に寄生させ、その人間の意識を読む事ができた。

王女の意識の中を彷徨い腕輪の記憶を探るラモー・ルー。

しかし、手がかりは掴めない。たわいない記憶ばかりが見えてくる。

「ユリアは只一人残った王家の者。秘密は必ず伝えられているはずなのだ……」

ラモー・ルーはどんどんと時間を遡り、ついには彼女が生まれたばかりの頃の記憶に辿り着いてしまう。

「何故、この娘には王家の秘密に纏わる記憶がないのだ。何も知らされていない……そんな馬鹿な事があるのか？」

諦めようとしたその時、ラモー・ルーが見知った顔がぼんやりと浮かんできた。

「これは……忌々しい七大衛士……」

衛士の一人が腕に抱く金髪の赤ん坊が見え、その小さな手には金色の腕輪を握っている。

「むっ、あの腕輪は……」

ラモー・ルーがユリアの記憶に集中すると会話が聞こえてきた……  
金髪の赤ん坊を抱いた衛士が言う。

「今後もラモー・ルーの残党に狙われるかも知れん。いや、また別の者にも狙われる事も考えておかねば。女神の力を守る為にも王女様は隠さねばならん」  
頭の上から声がする。おそらくユリアを抱いている者の声だろう。

「不憫だが、この子には王女の替え玉として生きてもらおう」

「戦災孤児が王女の生活を一生送れるのだ、それで勘弁してもらおうしかない」  
意識を自分へと戻すラモー・ルー。

「フッフ、なるほど、替え玉か……考えたものだ。赤子の頃に入れ替えたのならユリアが知らぬのも道理だ」

ラモー・ルーは立ち上がり、部屋の隅に座った鏡使いに命令する。

「鏡使いよ、あの娘を映すのだ」

鏡使いが静かに掌てのひらを動かすと、物見の鏡に映ったのは粗末な寝台に横たわったキャロ  
ン。ベッドからこぼれ落ちた彼女のポニーテールが薄暗い石牢の中で黄金色こがねいろに浮かび上  
っていた。

「ククク、腕輪を持っていたあの乳飲み子がこの娘とは……。巡り合わせというものは

分からぬものよ」

キャロンの腕輪を頭上に掲げ、勝ち誇ったように笑うラモー・ルー。

「フハハハ！ 七<sup>ななだい</sup>大<sup>えいし</sup>衛士共よ！ ラルの王女は確かにわしが頂いたぞ！ グハハハハ！」

第二部

ラモー・ルーの夜

## ラモー・ルーの夜 第一夜

ラモー軍団は捕虜を捕らない。「敵兵は皆殺し」を常としているからだ。しかし、ラモー・ルー城内には多くの石牢があった。それは昼の地から掠ってきた魔王への貢ぎ物達を閉じ込めておく為に作られたものだった。

その石牢のひとつ、中に設えられた粗末な造りのベッドの上にキャロンは寝かされていた。

「……うううん……ここは……?」

キャロンが目を覚ます。

石牢内にこもったカビ臭いにおいに顔をしかめるキャロン。その嫌な臭いが気付け葉代わりになり、だんだんと意識がはつきりしてくる。

ベッドの上で身を起こしながらキャロンは鈍い重さを感じる。見ると手首足首には枷がはめられていた。そのまま視線を滑らすと体に身に付けている物はなにもなく、ラモー・ルーに強姦された時のままだった。

「……痛っ」

彼処に処女を奪われ陵辱された痛みが走り、悔しさに唇を噛むキャロン。しかし、その痛みは何故か心地よく感じられ、彼女を戸惑わせていた。

(痛いのにな……どうして……)

ギッ、ギ、ギギイ

突然、石牢の重い扉が開き、黒いローブを着た二人が入ってきた。

「あっ！」

キャロンは慌てて両手で体を隠すと二人を睨みつけた。

「ラモー・ルー様がお呼びだ」

そう言いながら、黒いローブは彼女を連れ出そうと掴みかかる。

「いやっ！ こっちにこないで！」

両腕をブンブンと振り回し抵抗するキャロン。

黒いローブは少女のささやかな抵抗をいかくぐり、指先でキャロンの額を軽く触るとそこには小さな紫の紋様が付いた。そして次の瞬間、キャロンの体から力が抜け、まるで操人形の糸が切れたかのように、その場にパタリと倒れてしまった。

(……なにこれ？ ……やだ)

キャロンは体が痺れて動かない、声も出せない。魔力によって麻痺させられたのだ。

黒いローブ達はキャロンを抱え上げ、石牢から運び出す。

大きく脚をM字に開かされた格好で輿こしに載せられたキャロンがラモー・ルー城の大回廊を運ばれていく。魔力で動いているのだろうか、輿こしは担こぎ手もなく宙に浮かび、先を歩く黒いローブの二人についていく。

大回廊を行き交うラモー軍団の魔物達はキャロン達一行いっこうに気付くと道を空け、その場にひざまず跪ひざまずき頭こうべを垂れる。キャロンが主あるじであるラモー・ルーへの貢ぎ物だと解っているのだ。

しかし、魔物達のギラついた眼はじつと少女の柔肌を見つめ、舌なめずりしていた。

体の自由を奪われたキャロンはその辱はずかしめはに為すすべもなく、ただ一筋の涙を流すしかなかった。

キャロンが運ばれて来たその部屋は、湿気を帯びた石壁で囲まれ、天井を支える石柱には大蛇の像が彫刻されていた。壁に掛けられた燭台の炎の揺らめきが彫刻の影をゆら／＼と動かし、大蛇が生きているかのように錯覚させた。

部屋の中の生暖かい籠すえた空気がべつとりと全身に絡んでくるような感触が、魔物に吐息を吹きかけられているようで、キャロンは鳥肌が立った。

「お待たせしました。ラモー・ルー様」

部屋の中央、床石の隙間から黒い液体が滲み出してくる。すぐにそれはドクドクと脈動するように湧き出し始め、やがて液体は徐々にドロドロとしたゲル状に変化すると山のよりに盛り上がり、ゆっくりと人の形を成していき、……ついにはラモー・ルーがそこに立っていた。

「……っ！ ……っ！ ……っ！」

犯された時の恐怖と悔しさと、今また再びラモー・ルーに穢される絶望がない交ぜになった感情から声にならない声を出すキャロン。

「待っておったぞ、伝説の剣士どの……いや、その麗しき姿、姫君と呼ぶ方が良いかな？ フフフ」

黒いローブの一人がキャロンを輿から降ろし、彼女の両手両足にはめられた枷を天井から何本も垂れ下がっている鎖に繋ぐ。それを確認したもう一人が壁から生えた数本の取っ手のひとつを下に押し込むと、壁の裏からギツギツと歯車が動いているような音が聞こえ始め、……ジャラリ、キャロンの両腕に繋がれた鎖がゆっくり引き上げられた。

黒いローブは空中にYの字の形に吊り下げられたキャロンに近づくと、指先で額に触れた。するとキャロンの額にあった紋様が蒸発するように消え、同時に彼女の体の感覚も元

に戻った。

「くっ……放して！ いやーっ！」

体の自由を取り戻したキャロンが縛めから逃れようと体を揺する度、ガチャガチャと鎖が鳴る。

「体力は十分に戻っておるようだな。フッフ」

ラモー・ルーがキャロンの顔を覗き込む。

「いやっ、近寄らないで！」

顔を背けるキャロンの両頬を片手で掴み、グイッと自分に向けさせるラモー・ルー。

「怖れることはない、これからじっくり可愛がってやろうというのだ」

妖しい光を湛えたラモー・ルーの眼に、はっとするキャロン。

(だめっ！)

魔王の幻術に捕らわれまいと、キャロンはきつく目を閉じる。

「おまえに幻術はもう必要ない……フッフ」

そう言うと、ラモー・ルーはその太い舌で強引にキャロンの唇をこじ開け、彼女の舌に絡ませる。

「うっ、んぐっ……あぐっ……」

ねっとりとしたラモー・ルーの舌の動きに翻弄ほんろうされるキャロンの舌。しかし苦痛はなく、その動きはキャロンにディープキスを教えるかのようにであった。

「……んっ、あああっ……はあ、はあ、はあ……」

長い口淫を終え、キャロンの唇を解放したラモー・ルーの舌はキャロンの耳から首筋へと一舐めすると、まだ成長途中の小振りな胸を次の獲物に定める。

今度は蛇の様に長く伸ばされた舌が乳房に巻き付く。

「ああああっ！」

キャロンの胸にボタボタと滴り落ちた唾液がローションとなつて、ヌルヌルと乳房を絞しぼるような動きを繰り返しながら、舌尖ではチロチロと乳首を刺激する。

淫みだらで執拗なマッサージに、キャロンは乳首を硬く尖らせてしまっていた。

「はああ……だめえ……いやああ……」

そのタイミングを待っていたかのようにラモー・ルーの細長い舌がすばやく乳首に巻き付き、きつく締め上げる。

「きやああああ……あん……！」

悲鳴を上げるキャロン。しかしその悲鳴には艶つやが混じり始めていた。

キャロンの体をその大きな両手で掴み、舐め回しながら、ラモー・ルーは部屋の隅すみに控

える黒いローブに目配せをする。

壁の取っ手を操作する黒いローブ。キャロンの足枷の鎖がギシギシと軋む金属音と共に巻き上げられていった。

キャロンは空中で大きく脚を開いた体勢にされ、丁度ラモー・ルーの顔の前にキャロンのぷっくりと合わさったクレバスが位置していた。

「い、いやああ……」

「おまえの蜜壺はどうなっておるか、見せてもらおうか？フッフ」

ラモー・ルーは指に唾液を絡めキャロンのクレバスに沿って愛撫する。程なくそこはピチャピチャと淫らかな音を立て始め、顔を覗かせたクリトリスを舌尖で撥る。

「ひっ、あああっ！」

指の腹で擦り上げながらゆっくりと花卉が開かれていくと、ヒクヒクとヒクつくキャロンの蜜壺の入り口が現れ、見た者を誘惑するかのよう愛液が滲み出していた。

「美味そうな蜜が滴っておる、フッフ」

ラモー・ルーがキャロンにむしやぶりつく。

ブチュル、ジュルル……

下品で大きな音を立てながらその可憐な花卉を舐め上げていく。

「だめえっ……ああああ」

さらに蜜を求め、ラモー・ルーの太い舌がキャロンの蜜壺の奥へと侵入していき、

「ああああっ！」

胎内でうねるように蜜を吸い取っていく。

「なんと甘美な蜜であろうか……」

「ああっ、あああああん！ いやあああっ」

激しいクンニリングスから逃れようとキャロンは体を揺らすが、ラモー・ルーは彼女の腰を両手でがっちりと掴むと、舌を細長く変形させ、膣内なを探るように動かす。

「っああ……ああああっ！ ……ああ……っあああん！」

キャロンのGスポットを探り当てたラモー・ルーはそこに攻撃を集中する。

「ああ！ ああっ！ いやああっ！ ……ああっ！ ああああっ！」

体突き抜けていく未体験の快感に、キャロンの意識が飛んでしまいそうになったその時……、

プシュッ、プシヤアアアッ！

「はっ、あ……あああああああー！」

キャロンの花弁はなびらから液体が勢いよく噴き出す。体の痙攣けいれんに同期するように潮が吹き上が

り、ラモー・ルーの顔を濡らす。それを一滴も残すまいとラモー・ルーの舌が舐めとっていく。

「すばらしい……蜜だけではなく、なんと甘美な聖水を持っておるのだ」

初めてオルガスムスを迎えたばかりか潮まで吹いてしまったキャロンは、自分の体に何が起こったのか分からず放心状態にあった。

「はあ……はあ、はあ、ああ……はあ」

ラモー・ルーはキャロンを繋いでいる鎖を解くと、彼女の体を石造りの丸い台の上で大の字に横たえた。

「まだ足らぬであろう？　すぐに次をやろう……」

ラモー・ルーはキャロンの乳房を揉みしだくと、彼女の小さな体の上に覆い被さる。

「あああ……」

ヌルヌルと何かが触っている下腹部へキャロンが目を向けるとラモー・ルーがペニスで彼女の恥丘を愛撫しているのが見えた。

（いやよ、もう二度と犯されたくない……）

そう思っても体は痺れたようになっていて、ラモー・ルーを拒むことが出来なかった。

（あの眼を見てしまったからだわ……悔しい……）

キャロンの目から涙が零れる。

グチュル……

亀頭がキャロンの蜜壺の入り口に埋まったところで挿入が止まる。

「ひっ……くっ！」

ペニスに比べて入り口が小さいこと、キャロンが挿入を拒んで息んでも相まって、ペニスの侵入は阻まれていた。しかし、キャロンが息を吐き、息みが抜ける一瞬をラモー・ルーは見逃さず、ペニスを殺到させ、子宮口に強力な一打を加える。

「あああああっ！」

ラモー・ルーはリンリンと鈴が鳴るようなキャロンの悲鳴を楽しむと、少女の膣の締めまり具合を味わうように、ゆっくりとペニスを前後させ始める。

グジュツ、グジュツと淫靡な音を立てながら、雁首が少女のまだ初々しい肉襞を搔きむしる。

「ああっああっああっ！」

ラモー・ルーはねっとりとした動きでキャロンの体に牡の味を覚え込ませていく。

「力を抜き、体を委ね、感じるのだ。お前の膣内に入ってるモノを……」

時折、外に顔を出す亀頭は愛液にまみれ、トロトロになっっていた。

「あん！ ああ！ いや、ああっ！ あん！ あん！」  
 キャロンの流す愛液が程好い潤滑油オイルとなって、ピストン運動が徐々にリズムカルなものへと変化していく。

ラモー・ルーはキャロンの膣ヴァギナがペニスに馴染んできた事を見定めると、挿入を深くし子宮口ホルチオを亀頭で叩き始めた。

「いやあつ！ あんっ、お腹が……お腹が裂け……ちやう！ やめてえ……あんっ」  
 ズツ、ズツ、ズツ！

子宮に亀頭が激しく打ち付けられる痛みで、キャロンの意識はラモー・ルーとの結合部に集中する。

(痛い……痛い……いたい……いたきもちいい……気持ち良い……)  
 キャロンが痛みに集中すればするほど、痛みが心地よさに……否、快感に変わっていった。

(どうして……痛いの気持ちいいの？ ……嫌なのに……嫌なのに……気持ち良い)

「ああああ…… ああああん……」

キャロンの唇から悦びの吐息が溢れ出す。

「良い具合になってきたようだな、フッフ」

「あん！ あん！ あん！ あん！ あん！ あん！」  
 ラモー・ルーはキャロンの腰を持ち上げ、彼女の膣ヴァギナが天井を向くようにすると、更に深く強くペニスを挿入する。

ズン！ ズン！ ズン！

子宮に杭を打ち込まれるような暴力的な挿入。しかし、それは再びキャロンを絶頂へと導いていった。

「ああっ、ああっ……きもち、いい……あっ、あっ！ あああああっ！」

激しいピストン運動が少女の純心の殻に穴を開け、そこから流れ込んだ淫欲がキャロン心を包んでいく。

「ふああああっ！ きもちいい……きもちいいの……はああああっ！」

恍惚の表情を浮かべるキャロンにラモー・ルーは暫し見とれてしまっていた。

「フフフ、少女が牝に変わる瞬間は何度見ても飽きない……」

ペニスを激しく動かしながら、彼女の頬を慈しむように撫でるラモー・ルー。

ラモー・ルーのペニスがドクドクと大きく脈動し始める。

「いっ、く……ああああああああああああっ！」

キャロンのオルガスムスに合わせラモー・ルーが彼女の膣内なかで射精する。

「あああ、あああ熱い……ああ、あ……熱、いい……はああ……」  
 熱い逆ほとぼしりに子宮口ポルチオを焼かれる快感に、キャロンは激しく体を震わせていた。

「ああ……はあ……ああ……」

石台の上で大の字になったキャロン。まだ幼い体に施された激しい性儀の余韻で彼女は放心状態にあった。

「見込んでた通り、わしとの最初のまぐわいで体はすっかり牝へと堕ちておったわ」

キャロンの花卉はなびらから溢れ落ちる精液を指で掬い取るとニチャニチャと指先で弄ぶラモー・ルー。

「しかし、心は未だ純潔を保っているようだ。……フフフ、面白い。」

そして、彼女の薔薇色に上気した唇へ精液を塗っていく。

「これからお前の心をじっくり牝にしていく楽しみが増えた、フフフ。……今宵こよひはここまですべておこう。牢に戻しておけ」

ぐったりとしたキャロンを輿こしに載せると、黒いローブ達はラモー・ルーに一礼し、部屋から出て行く。

元来もとた道を進む、黒のローブ二人とキャロンを載せた輿。

体が自分のものでなくなるような、意識が飛んでしまうような快感を初めて体験したキヤロンは、未だその熱<sup>ほとほ</sup>りから醒<sup>さ</sup>めず茫然自失していた。そのため、来た時と同じ淫<sup>みだ</sup>らな姿<sup>さ</sup>で輿<sup>こし</sup>に乗せられていても恥じらうことなく、再びその幼くも美しい体は大回廊を行き来する魔物達への見世物となっていた。

キヤロンから漂<sup>め</sup>う牝<sup>めす</sup>の臭いに誘われ、一つ目の魔物が近寄ってくる。

「その娘、俺にくれ」

「控えよ！ これはラモー・ルー様のものぞ」

「ラモー様が手を付けた後は俺たちがいただけのはずだろ？ 俺によこせ！」

魔物は輿<sup>こし</sup>の上のキヤロン目掛けて腕を伸ばす。

「やめよ！」

黒いローブのひとりがそう言った瞬間、電撃が走り、魔物の片腕が消し炭になっていた。

「ギャアアアアア！」

大回廊に響く魔物の悲鳴を後に何事もなかったようにキヤロンを載せた輿<sup>こし</sup>は進んでいく。

## ラモー・ルーの夜 第二夜

キャロンの石牢に黒いローブ達がやって来る。

「食事だ」

差し出された食べ物に、キャロンは囚とらわれてからまともに食事をしていなかった事に気が付き、急に空腹を感じ始める。しかし、ラモー・ルーに施ほどこしなど受けたくないという意地もあって、手を出さずにいた。

「……食べ終えるまで見張っている」

そう言うと、黒いローブ達は入り口の扉の前に微動だにせず立ったまま。

「……！」

ここにずっと居られるのは堪たまらない、とキャロンは慌てて与えられた食べ物を喉のどに押し込む。パンに具かなくさんのスープと果物、意外にも出された食べ物は普通で美味しかった。そして飲み物のヨーグルトのような物……これは嫌な味がしたけれども。

キャロンが食べ終えたのを見届けると、黒いローブが彼女が今まで見たこともないエキゾチックな履き物を差し出す。

「足を痛めぬよう、これを履いておくように」  
それはアッパーが爪先と踵で分かれているセパレートパンプスで、金の縁取りで装飾されていた。

(これじゃ、裸足と変わらないんじゃない?)

靴と言えば、野良仕事で使う革のブーツくらいしか知らない村娘のキャロンにとって、その履き物はあまりにも頼りなげに感じた。

「……き、着る物はないの?」

パンプスを履きながらキャロンは恐る恐る尋ねてみた。

「……」

黒いローブ達は無言で去って行く。

「なによ! 真っ黒くろすけ!」

閉じられた扉に向かって悪態をつくキャロン。

再び黒いローブ達がやって来る。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

その言葉に総毛立つキャロン。

「いやっ！」

黒いローブ達は拒むキャロンを例の如く紫の紋様の魔力でおとなしくさせると、輿こしに載せる。ただ、此の間と違っていたのは輿の椅子に座ると、椅子から細長い触手が左右から伸びてきて、キャロンの肉付きのいいクレバスを広げ、花卉はなびらを露あらわにした。

「……っ！ ……っ！」

体を麻痺させられたキャロンには、更なる辱はずかしめに悲鳴を上げることが許されていなかった。

松明の光が輿こしの上のキャロンの肢体を大回廊の薄闇の中に白く浮かび上がらせていた。さらさらと揺れ輝く金髪ポニーテールに、小振りな乳房に、下腹部に、太ももに魔物達の視線が突き刺さってくるのを肌で感じるキャロン。そして、魔物達の眼前に無防備さらに曝さらけ出された桜色の花卉はなびらがふるふると羞恥しゆうちに震える。

再びあの部屋がキャロン達を迎え入れる。

黒いローブ達は跪ひざまずき、頭こうべを垂れ、ラモー・ルーの登場を待つ。しかし、彼等の主はなかなか姿を現さない。

部屋に漂う嫌な肌触りのする空気、輿こしの上に淫みだらな格好で載せられている自分。それらが今までラモー・ルーによって施ほどこされてきた性の儀式をキャロンに思い出させ、魔王に対する嫌悪感つが募る。一方で心臓がとくとくと鼓動を早めていき、臍へその下辺りがじん、としてくるようにも感じていた。

どれほどの刻ときが経っただろう、

「今宵はもうよい……」

どこからともなくラモー・ルーの声が部屋に響く。

「……御意」

その夜は何事もなく石牢に帰されるキャロン。

次の日――。

あの部屋への道すがら、少女の輝くような肢体に惹ひき寄せられ、三匹の魔物がキャロンの輿こしの前に立ち塞がる。

「我々はラモー様の生贄いけにえの間まへ行く途中だ。そこをどけ」

「へへへ、それを俺達によこせよお」

「どうせラモー様はもう飽きたんだろお？」

「よこしてくれたら、代わりに……」

魔物達の言葉を遮るように黒いローブがさっと手を振る。と同時に三匹の魔物の姿がその場からかき消えた。

黒いローブが辺りの魔物に向かって威嚇する。

「皆の者！ 今を見たであろう！ ラモー様の物に手を出す事がどのようになるか。肝に銘じておけ」

周りの魔物達は三匹の魔物の行方を知っているらしく、大回廊はしんとする。

黒いローブと三匹の魔物との会話である部屋は「生贄の間」と呼ばれている事をキャロンは知り、陰鬱な気分がさらに酷くなった。

キャロンが生贄の間に到着する。……しかし、その日もラモー・ルーは現れなかった。

三日目――。

石牢には明かり取り用の小さい穴があったが、ここは夜の地、月の光と星明かりしか差し込まず、昼なのか夜なのか、はっきり分からなかった。しかし、黒いローブ達が定期的に食事を運んでくるので、キャロンはなんとなくではあるが、一日の時間の流れが解り始めていた。

ラモー・ルーに呼ばれる夜がやってきた。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

……だが、その夜もラモー・ルーは姿を見せなかった。

石牢に戻され、ベッドで横になるキャロン。あられもないも格好で輿こしに載せられ、魔物達への見世物にされてはいるが、その体をラモー・ルーに穢けがされる事なく無事に帰れたというのに、何故かなかなか寝付けなかった。

四日目の夜――。

今日も夜伽よとぎの役目は免れ、石牢に戻されていくキャロン。

大回廊の脇でキャロン達を見送る魔物達のひそひそとした話し声が渦うずとなって聞こえてくる。

……あんだヨ、今日モお手付きナシカ？ あんなに乳首をおっ立ててンのによオ……もう飽きたンなら、俺達に回してくれたりいいのに……まだ子供みたいな顔して、体はいっちょ前に牝おとこを誘ってやがる……あの小ちっこいおまんこが垂らしている牝汁めすじの臭い、堪たまんねえ……今すぐ俺のをブチ込みてえ……

裸体を晒し、魔物達の視線を感じることに恐怖とは違う別の感情がキャロンの中に芽生

五日目の夜――。

輿こしから降ろされ、黒いローブ達が去ったあと、ベッドに横になるキャロン。

「……今日も会えなかった」

……と、自然と口をついて出た自分の言葉にキャロンはハッとする。

(いやっ！ あたし、なんてことを！)

頭をふるふると振り、こんな異常な生活の毎日で「たまたまおかしな事を言ってしまったのよ」と自分に言い聞かせ、ぎゅっと目をつむると無理矢理に眠ろうとするキャロン。

しかし、目を閉じていると、ラモー・ルーのいやらしい指、舌、そしてあの穢けがらしいペニスペニスが自分を犯す光景が頭に浮かんでしまう。「そんなことは思い出したくない」と他のことを考えようとするキャロンだったが、あろうことか今度は激しく陵辱レイプされる自分を想像してしまっていた。

(いやっ……こんなの……)

やがて、ベッドで横になっているキャロンの体かもぞもぞと動き始める。

キャロンは両手で乳房を揉んだり、時折、指で乳首を摘つままむようにいじっていた。

「ん、……あっ……あ」

キャロンの唇から吐息が漏れ始めると、するすると彼女の右手が可愛らしい臍へそから下腹部へと滑り落ち、その先にあるクレバスを押し開くと、花卉はなびらをくりくりと回すように愛撫を始める。くちゆくちゆという湿った音とともに愛液あふが溢れてくるのに時間はそうはかからなかった。

キャロンは人差し指でクリトリスを刺激しながら中指を自分の膣なかへ差し込む。

「んっく！ ……あああん……」

ヴァギナ膣なかに入れ入る指は最初は控えめな動きだったが、だんだんと奥へ／＼と挿入いれていき、ついにはラモー・ルーが探り当てたGスポットを掻き回すように刺激していた。

「んっ……だめっ……ああん！ ……あああっ！ ……」

自分で自分をイカしてしまったキャロンの嬌声が石牢の中に響く。

「ああ……はあ……あ……」

自分の体を撫でながらオナニーの余韻ひたに浸るキャロン……

「………っ！」

突然、キャロンはぱっと身を起こすと周りをキョロキョロと見回す。誰かの視線を感じたのだ。しかし、この狭い石牢の中には自分以外誰もいるはずはなく、「気のせいよね」

と静かに眠りにつくキャロン。

物見の鏡の前で鏡使いが呪文を唱えると、鏡面に波紋が広がり、その揺らめきがおさまると、さつきまで鏡に映っていた鏡使いの姿は消え、代わりにオナニーをするキャロンの姿があった。鏡はまるでキャロンが眼の前に居るかのよう鮮明に映し出していた。彼女が蜜壺を掻き回している音が聞こえてきそうなほどに。

鏡を眺めるラモー・ルーは嬉しそうに舌舐めずりをしていた。

七日目——。

(昨夜ゆうべしたばっかりなのに……)

朝起きてしばらくすると、また体がどうしようもなく疼うずいて、キャロンは自分の体が自分のものではなくなったように感じていた。

(また今日もあの恥ずかしい乗り物に載せられて、魔物達の汚けがらわしい眼があたしを舐め回すように見て、その後、あたしはラモー・ルーに……)

またそんな考えが膨みだらんできて、じんじんと熱くなる体の求めに抗あらがえず、いけないと思っみだっていても淫みだらに指を動かしてしまいうキャロン。

「あん……はあん、……あああっ」

そして、キャロンはまた誰かの視線を感じつつも、自分を慰め続けていた。

「ラモー・ルー様のお相手の時間だ」

黒いローブ達が石牢の扉を開けると、そこには頬ほほを薔薇色ばらいろに染め、とろんとした表情のキャロンが待っていたかのように立っていた。

「……」

コクリと頷くと石牢の前に浮かんでいる輿こしの方へと自ら歩いて行くキャロン。黒いローブ達は昨日までとは打って変わって貴人に傳かたずくように輿こしへの乗り込みを手助けする。黒いローブ達の眼前を通り過ぎる桜色の乳首はピンと上を向くように尖っていた。

脚をM字に大きく開かないと座れない形になっている輿こしの椅子にキャロンは躊躇ためらうことなく体を預ける。と、同時に触手が——「ラビアクリップ」と黒いローブ達は呼んでいた——彼女のクレバスにもぐり込むと、にちっ、という湿った音と共に陰唇を左右に広げ、少女の初々しい女陰を剥むき出しにした。

「あん……」

小さくではあるが艶つややかな声を出すキャロン。回廊の燭台に照らされた彼処はもう十分

に潤んでいた。

大回廊をキャロンを載せた輿が進む。

(ラモー・ルーに会いたい……)

その思いが今のキャロンを支配していた。輿の上から大回廊を見渡し、魔物達の中に居るはずもないラモー・ルーを探しながら、「あたしはここにいるわよ」とばかりに女陰を見せつけるようにキャロンは腰を前後にゆっくりと揺らす。彼女の小陰唇は鮮やかな桜色をし、小さなクリトリスははち切れんばかりに勃起し、膣からはトロトロと愛液を溢れ出させていた。

そんなキャロンの淫靡な姿に魔物達の目は釘付けになり、道を空け跪く事さえ忘れさせていた。

しかし、今夜も生贄の間にラモー・ルーは現れず、キャロンは石牢に戻されていた。消える事のない体の火照りに気がおかしくなりそうになるキャロン。それを少しでも鎮めようとベッドの角に陰部を擦りつけようとしたその時……、

「その美しい体を粗末にすることは許さんぞ、キャロン……」

背後からの声に驚き、飛び退くキャロン。

見るとそこにはラモー・ルーが立っていた。

キャロンは石牢の扉に駆けよるが、そこはいつものように固く閉ざされていた。

「何を逃げておる。わしに会いたかったのであろう？」

「誰があんたなんか……」

ゆっくりと近づいてくるラモー・ルーから一定の距離を保ちつつ、壁伝いにじりじりと後退りするキャロンだったが、すぐに石牢の隅に追いつめられる。

それ以上逃げ場がなくなったキャロンは小さく縮こまっていき、最後にはぺたんと尻餅をつく。

「強がるでない、フッフ」

ラモー・ルーの太い腕がキャロンを強引に抱き寄せる。その口から毒蛇が這い出してきたかと錯覚するような長く赤い舌がキャロンの頬を、耳元を、首筋を、鎖骨のあたりを舐める。

「きやあつ……」

「わしが欲しくてたまらんのだろう？ 正直に言えば普通では味わう事のできぬ、あの快楽の世界を見せてやるぞ？ フッフ」

キャロンを抱きすくめている大きな手が少女の弾むような背中の筋肉の感触を味わいながら、そのまま体のラインに沿って下に滑っていき、尻たぶを掴むとその柔らかさを楽しむ様に揉みしだく。

「いやっ……離して……」

キャロンのその声は小さく、ラモー・ルーから離れようともがくその腕には、力が入っていないかった。

「まあよい、お前の体はすでにわしの虜。そちらに聞いてみるとしよう、フッフ」

ラモー・ルーの顔がキャロンの顔に近づく。いやいやをするように顔をふるキャロンの唇を追いかけるようにラモー・ルーの舌がむしゃぶりついていく。

ピチャツピチャ……、ブチュルデチュル……、

ディープキスの音が激しくなるにつれ、ラモー・ルーの腕の中のキャロンはおとなしくなっていく。

「んっ……あむ……っ……ん……くっ……」

気付けばラモー・ルーの太い舌に自分の舌を絡ませ口淫に夢中になっているキャロン。ラモー・ルーがキャロンの下腹部に右手を這わすと、キャロンはそれを待っていたかのようにもじもじと腰をくねらせ、陰部を擦りつけてくる。

不意にラモー・ルーはキャロンから体を離し床に胡座する。

「ああん……………、あつ、」

思わず不満の声を漏らしてしまった自分に動揺するキャロン。

そんな彼女に向かってラモー・ルーは愛液に濡れた右掌を差し出すと、指を波打つように動かした。

「フフフ、それ、好きなように使ってみろ」

「……………」

キャロンは躊躇いながらも突き出された腕に跨がるように立ち、魔王の肩に手を置くと、伏し目がちに腰を落としていく。

「はああん……………、ああああん……………あああ、」

掌の上でキャロンの肉厚の大陰唇がむちむちとつぶされ、開いた花卉がぐいぐいと指に擦りつけられる感触を楽しむラモー・ルー。一方、魔王の胡座の中央では固く強張った陰茎がキャロンの痴態を見上げていた。

「あああつ……………、ああああん……………」

もっと刺激が欲しいとばかりに、激しく腰を振り始めるキャロン。

それに応じるようにラモー・ルーはキャロンの充血したクリトリスを親指で潰すように

グリグリと刺激する。

「あん！ あんっ！ ……あああ……っ！」

キャロンは押し寄せてくる快感の波に、もはや自分の力では立っていられなくなり、ラモー・ルーの胸に上半身を預ける。魔王の肩をぎゅっと掴み、はあはあと呼吸を荒らげるキャロンの瞳はうっとりとしてラモー・ルーの顔を見つめていた。

「っああああああっ！」

一際大きな嬌声が石牢に響く。見るとラモー・ルーの人差し指と中指がらせん状に絡まり一本の肉棒となつてキャロンの肉壺を突き上げていた。

煽情的な光景とは裏腹に、ぱんぱんぱん、と間の抜けた音が石牢に木霊する。

「っ、はああああああっ！」

ラモー・ルーの指を使ってイッてしまったキャロンが床に座り込む。

「まだまだこんなものでは満足できぬだろう、んん？」

ラモー・ルーはキャロンの腕を引っ張り上げると、壁に両手をつかせ、尻を突き出した姿勢にさせる。さらにキャロンの太ももを掴み、脚を広げ、膣、尻穴を丸見えにした。

「あああん、……はああん……」

恥ずかしい姿勢を取らされたキャロンが甘い悲鳴を上げ、その声にシンクロするように、

小さな膣ヴァギナ口がパクパクと閉じたり開いたりしていた。

「形の良い尻に可憐な花卉はなびら、美味しい蜜を湛たえた蜜壺、尻穴も愛らしくヒクついておるではないか。実にそそられる……」

ラモー・ルーは突き出された尻を両掌りょうてで円を描くように愛撫しながら、ペニスの雁首をヴァギナ拡げられた膣ヴァギナにクチュクチュと擦りつける。

「ああ……ん、いやあ……きて……え……」

そろそろ頃合いと、ラモー・ルーは背後から一気にキャロンを貫き通す。

「ああああああっ！」

初めて経験する後からの深い突き上げにキャロンは悲鳴と嬌声が混じった叫び声を上げた。

ラモー・ルーがキャロンの下腹部を掌でグリグリと圧す。そうすることによって、彼女の内臓の動きが制限され、ペニスが子宮を撲ぶつ衝撃が倍加されていた。

まるで鐘撞きのように震わされた子宮の波動は、ぷるぷるとキャロンの体を震わせながら下腹から乳房、乳房から脳天へと突き抜け、キャロンの心に残っていた魔王とのセックスへの嫌悪感を消し去っていった。

「ああっ！ ああっ！ きもち……いいっ！ はああああんっ！」

グジュッ！ グジュッ！ グジュッ！

ラモー・ルーの力強い一突き／＼毎にキャロンの小さな体は石牢の壁に押しつけられる。同時にキャロンの乳房は壁に潰され、擦りつけられ、それがさらなる快感を生む。

「はああつ……いいの！……いいのお！」

キャロンの喘ぎ声と、ジュボジュボと魔王のペニスが膣<sup>ヴァギナ</sup>を出入りする音が二重奏<sup>デュオ</sup>を奏でていた……

石壁に凭<sup>もた</sup>れ、両手両脚を放り出すように座り込んだキャロン。美しい金色のポニーテールは汗で体に張り付き、首筋、乳房、脇腹、下腹部、背中、尻、太もも、ふくらはぎ、其処<sup>そこ</sup>此処<sup>ここ</sup>に鮮やかなキスマークが残され、だらしなく開いた股根からは精液がトロトロと溢<sup>あふ</sup>れ出していた。……そんな激しいセックスの痕<sup>あと</sup>とは対照的に彼女は満ち足りた微笑みを浮かべ、ラモー・ルーを見上げていた。

彼女の乱れたポニーテールを愛おしそうに指でかき上げながら眼を細めるラモー・ルー。

「フフフ、今宵は良い夜であった。……入るがよい」

石牢の扉が開き、事が終わるまでそこで控えていたのだろう、黒いローブ達が入ってきて

た。

一人はキャロンの手脚の枷を外し、もう一人は手に持った小さな木箱の蓋をあけ、恭しく主あるじに差し出した。中には金色こんじきの首飾チヨールカーり。ラモー・ルーが取り出すと、石牢の入り口から入ってくる灯りで首飾チヨールカーりの表面に複雑な影が浮かび、かなり凝こった造つくりの物であることが窺うかがえた。

「美しい体にはそれを引き立てるアクセサリーが必要だ、フフフフ」

ラモー・ルーはキャロンの顎あごに手を添え顔を上げさせると、首飾チヨールカーりをキャロンの首に巻く。

パチン……

留め金の鳴ったその小さな音が、快樂の海に意識を漂わすキャロンには何故か大きく聞こえていた。

## 不思議な鏡

ラモー・ルーに首飾テヨーカーりを授けられた翌朝、石牢の扉からは鍵が外され、身繕みづくろいするため  
の手鏡、ブラシ、リップ等々の道具も差し入れられた。

石牢を自由に入出入り出来るようになったキャロンは、ラモー・ルー城を探検してみることにした。先ず輿こしに載せられ運ばれていった通路を辿たどってみる。しかし、すぐに頑丈な鉄の格子戸に行く手を阻まれた。それには鍵が掛けられ、彼女の力では開きそうにはなかった。諦あきらめて引き返し、石牢を通り過ぎると、少し行った所に、水場のある部屋があった。

「あはっ、ここなら沐浴できそう」

この城に囚われてからというものの、手桶の水とスポンジで体を拭うしか出来なかったキャロンはうれしくなった。

そこを後にし、そのまま奥へ進むと、突き当たりの左側に上へと続く螺旋階段らせんがあった。

どれくらい階段を登っただろうか。グルグルと目が回りそうになった時、キャロンの髪が空気の流れてそよぎ始めた。ほどなくして階段を上りきると、ラモー・ルー城からいく

つも突き出している尖塔のひとつ、その最上階にキャロンは立っていた。

「んー、久しぶりの外……ってやだ！ あたし裸！」

優しく肌を撫でていく風が、素裸のままにいる事をキャロンに気付かせた。

「やだ……あたし、裸でいるの何とも思わなくなっちゃってる」

不意にキャロンの足下から這い上がってきた夜の地の風が彼女の太股、尻、彼処、乳房を愛撫していき、最後に金色のポニーテールをぱつと宙に広げた。

「あはっ……どうしてかしら、裸がとつても気持ちいい……」

キャロンは体を大の字に開き、大きく深呼吸すると夜の地を一望した。

紺青の空に瞬く幾千の星と一直線に並ぶ四つのラルの月。眼下には荒涼とした大地が広がり、その向こうには瘴気立ちこめる毒沼、鬱蒼としたデイメルンの森、……そして遙か遠く霞んではいるが、明るく緑に輝く昼の地が見えた。

「変態になっちゃったあたし……もう帰れないかも……」

生まれ育った昼の地、ついこの間までいた昼の地。なのに今はすぐ遠くて別の世界のようにキャロンは感じていた。

尖塔から降りてきたキャロンは螺旋階段の向かい側に扉があるのを見つける。

扉は重いうえに、ギシギシと軋きしみ動きも悪かったが、なんとか開けることができた。入ってみるとそこそこの広さはあるものの、中はがらんとしており、ただ古ぼけた大きな鏡が壁にかけられているだけだった。

キャロンが鏡の前に立って両手を真っ直ぐ上げても、鏡の上端は彼女の指先よりずっと上にあつた。

「大きいー！」

金属製の額縁には複雑な紋様が彫られていたが錆びに覆われ消えかけていた。

キャロンは爪の先で錆をカリカリと引っ搔く。その紋様は古代ラルの文字だったが、彼女に読めるはずもなく……。

全身を映せるような大鏡は王族や高官、大商人などが持つ事の出来る、身分や財力を象徴する物であり、小さな村で育ったキャロンにとって、これほど大きな鏡を見たのは生まれて初めてだった。物珍しさから鏡に自分を映して遊び始めるキャロン。

キャロンが鏡に近付くと鏡の中のキャロンもこちらに近付いてくる。後ろ歩きして、くるりと一回転、そしてまた近付く。鏡の中の自分にいろいろとポーズを取らせたりしているうち、キャロンは段々と大胆になっていき、自分の胸、背中やお尻のラインを確認し、「あたしって案外イケてるかも」と自画自賛してみたり、さらに乳房の形や、淡い陰毛、

恥丘を観察したり……。

乳房の先に張りを感じたキャロンが鏡を見ると、鏡の中のキャロンの乳首がピンと尖っていた。

「フフフ、美しい……」

不意にラモー・ルーの声が頭の中でリフレインする……。これまで、お転婆は止めなさい、もっと女の子らしくしなさい、と小言はもらっても、他人に容姿を褒められた事がほとんど無かった。キャロンはぺたんと床に座り、鏡の前でM字に脚を大きく開くと、両手でクレバスを押し広げた。

鏡の中の自分に向かって話しかけるキャロン。

「……あたしのここのって綺麗なんだって。お尻の穴もかわいいって、ふふっ」  
 やっと褒められたと思ったら、よりにもよって彼処が綺麗だなんてと、少し可笑しくなった。

「あたし、ここを何度も犯されちゃったの……。」

自分の花卉あそこをじっと見つめるうち、ラモー・ルーのペニスが何度も出入りする様が出されて、自然とキャロンの手は乳房を揉みしだき、ヴァギナに指を入れていた。

鏡の中の彼女も乳房を揉みしだき、ヴァギナに指を入れる。自分に自分が犯されているよう

な錯覚に陥るキャロン。

「はぁん……ああぁん……」

鏡に見せつけるようにくちゆくちゆと指を出し入れするキャロン。

「あたし、ラモー・ルーに、とつてもいやらしい娘こにされちゃったの……」

鏡の中のキャロンも向こうから見せつけてくる。

「ああぁんっ………ああぁんっ……」

鏡に自分の痴態を見せつけられ、さらに昂たかぶっていくキャロン。

「実はね……あたしね……こんな体にされたの嬉しいと思ってるの……」

勃起したクリトリスを指先でこね回す。

「あんっ……だつてエッチすると、とつても気持ち良くなれるんだもん……」

床に寝そべり、指を深く挿入できるように腰を浮かせるキャロン。

「特にここ……あはぁんっ！」

奥深く挿れた指先で子宮口をクツ、クツとお圧す。

「ここを……あんっ……乱暴に叩かれるのあたし大好き……あぁっ、はっあぁんっ！」

彼女の指は一番気持ち良くなれるスポットを熟知しており、巧みな動きでキャロンを絶

頂たまに導みちいでいく……。

「あああああああっ！」

軽く果てたキャロンはそのまま大の字に寝そべった。

「はあはあ……ああ……はあ……はあ……」

床の冷たさが火照った体には気持ち良かった。

「ん……？」

ここでも自分を見つめる何者かの気配があることを感じたキャロン。

「やだもう、ここが見たいの？ 誰かさん」

無邪気な笑顔でキャロンは、愛液に濡れそぼった桜色の花卉ラビアがよく見えるよう脚を大きく拡げてみせた。

「身も心も牝へと堕ちたと思ったが、まだそんな顔を見せるか……」

物見の鏡に映るキャロンを寝台の上に横たわったラモー・ルーが見ていた。

「ああっ！……はああん……んんっ！」

ラモー・ルーの腹の上ではサラが艶なまめかしく腰をくねらせていた。

それに重なるように鏡の中のキャロンが四つん這いになって腰をくねらせ始めた……が、その動きはギクシヤクとしていて、難しそうな顔で鏡で自分の動きをチェックしてい

た。

「何をしている？ ……なるほど後背位の練習か、ウハハハ！ まこと面白い娘よ」  
パンツ！ パンツ！

上機嫌でサラの尻を叩くラモー・ルー

「ひっああっ！ あああっ！」

「キャロンめ、心を保ったまま牝に堕ちた体を乗りこなしておるのか、フハハハ！」  
ラモー・ルーは燥ぐようにサラを激しく宙へと突き上げる。

「ひっああっ！ んっ、ああっ！ はあああっ！」

暴れるペニスから振り落とされないよう、ラモー・ルーの腕にしがみつくサラ。

「……しかし、油断は禁物よ。いつ己の淫欲に呑み込まれ、心を壊すとも限らん。鏡使  
いよ、今後もキャロンの観察を続け、わしに逐一報告するのだ、分かったな」

「御意……」

そう返事をした鏡使いはラモー・ルーの方を向いたまま……、その視線はサラに注ぎ続  
けられていた。

「うーん……この角度だった？ いや、やっぱりこの角度？」

鏡を前に、四つん這いになったキャロンは腰を上げたり、下げたり。昨夜、後背位で犯されて、気持ち良かった腰の角度を覚えておこうと復習していた。

「クシュン！ ……あうう、ちよつと冷えてきたかも」

そろそろ帰ろうかと、キャロンが立ち上がると鏡に不思議な事が起きていた。

「……えっ？」

キャロンの動きと鏡の中のキャロンの動きがずれているのだ。

気のせいかと思ひ、試しに鏡に向かって手を振ってみると鏡の中のキャロンはちよつと遅れて手を振る。くるりとその場でターンをすると、鏡には自分の背中が見えている。

「な、なにこれ？ ……、この鏡も魔力がかけられているの？」

気味悪さを感じたキャロンはそそくさとその部屋を後にした。

しかし、そんな事が起こった後もキャロンは大鏡のある部屋に出入りしていた。

相変わらず動きが遅れて映る気持ち悪い鏡だったが、顔だけで一杯になる手鏡を使うより、全身が映る大きな鏡の前で身繕いすることが気に入っていたからだ。

……素裸のキャロンには、髪をとかすのとリップを付けたりくらいしか、することはなかったけれども。

## ラモー・ルーの夜 第三夜

キャロンがラモー・ルーの夜伽よとぎに每晚呼ばれることはなくなっていた。代わりに彼女が性欲をどうしようもなく抑おさえきれなくなった頃合みはかいを見計らったかのよううに迎えがやってくるようになっていた。

「今日は趣向を変えてみようとのラモー様の仰せです」

「やだ……どんなエッチな事するの？」

好奇心でキャロンの顔がパツと輝く。

「それは後のお楽しみです」

「なによ、けちい……」

「趣向を変える」という言葉に淫みだらな想像を膨らませるキャロンを乗せた輿こしは、いつもの道順から外れ、細く暗い通路の入り口で止まった。

「ここからは歩いていただきます」

キャロンは輿こしから降りると、黒いローブ達の後を付いて行く。

通路を奥へと進んでいくと程無くして下り階段が現れた。そこから先には灯りがまったくなく、まるで奈落の底へと続いているかのようだった。黒いローブ達はランタンを取り出し火を灯すと階段を降りていく。キャロンもそれに続く……。

「フフフ、待っておったぞ」

ラモー・ルーがキャロンを招き入れたその部屋には、人の背丈ほどもある大きな壺がいくつも置かれていた。

黒いローブ達はどこからか大きな浴槽を運んでくると壺の前に置いた。次に壺の横にある取っ手を操作すると、壺の口が浴槽へと倒れ、中から黒いドロドロとした液体が注ぎ込まれていった。

キャロンが浴槽を覗き込むと、その中にはコイルタールのようなドロツとした物が入っていて、よく見ると、それはウゾウゾと蠢うごめいていた。

「きやつ……」

気味の悪さにキャロンは後退あとしきりする……が、すぐに背中がラモー・ルーにぶつかった。

「牝おんなの体を舐め回すためだけに生きている魔物だ」

ラモー・ルーはキャロンを後から抱きすくめると、彼女の体を撫で回かきたましながら囁く。

「それに身を委ねれば、いつもとは違った快感を与えてくれるぞ。……なに心配するでない、その力は赤ん坊ほどしかない。嫌ならすぐにやめれば良いのだ、フッフ」

「いつもと違った快感……キャロンは躊躇いながらも、コクリと頷いた。

「では失礼します」

黒いローブがキャロンのみぞおちに触れるとそこには緑の紋様が付けられる。キャロンは立ったまま動けなくなった。

「な、なにをするの？」

「お楽しみ頂く前の処置でございます」

ポニーテールを纏めてまといる髪留めが外され、ふわっとキャロンの金髪が広がる。黒いローブはキャロンの髪をブラシでとかしながら、霧吹きで丁寧にミストを吹きかけていく。それが終わると、次にキャロンの顔にも入念に吹きかけていく。一連の処置を終わらせ、キャロンの金髪を再びポニーテールに纏めると、黒いローブは彼女に印した緑の紋様を消す。硬直していたキャロンの体がスッと弛緩するのが傍目からも見て取れた。

「どうぞ」

黒いローブが促すが、浴槽の中を見つめたまま動かないキャロン。やはり得体の知れぬ魔物に体を委ねる事には尻込みしてしまう。

それを見て取ったラモー・ルーは再びキャロンの背後に立つと、後から両腕を回し、  
掌てのひらで彼女の太もも、下腹、乳房へと流れるように撫で上げる。

「あああ……」

「なにも怖れることはないのだ、さあ……」

ラモー・ルーはキャロンの乳房を掌てのひらで回すように揉みながら、最後に両の乳首をきゅ  
つと強くつまむ。

「……ああんっ！」

それがキャロンを動かす為のスイッチだったかのように、彼女の体はピクツと震えると  
浴槽へと進み、その身を浸した。

ゾゾゾゾッ！

浴槽に足を入れるや否や魔物はキャロンに吸い付き、体を這い上がってくる。

「やあああっ！」

恐怖に駆られたキャロンは悲鳴をあげながら、必死にまとわりついた魔物を体から引き  
剥がす。しかし、剥がしてもくく、魔物はまた張り付いてくる。そして何度も掴つかんでいる  
うちに、手の中でウゾウゾと蠢いている魔物にはほとんど力が無い事に気付くキャロン。

「そうよ、いざとなったらやめればいいのよ」その安心感で恐怖で萎しぼんでいた淫欲が再

び膨らみ始め、キャロンは浴槽の真ん中に立った。

許しを得た魔物はキャロンの太ももから体へと這い上がっていき、見る見るうちにキャロンの首から下を黒いゼリー状の体で覆っていった。

魔物はキャロンの全身を覆い尽くすと彼女の性感帯を同時に刺激し始める。

「んっ、ああ、はあああ……」

魔物が生み出す快感に立っていられなくなったキャロンは浴槽に身を沈める。やがて、白い二本の足が魔物の表面からにゅっと突き出されると浴槽の縁にかけられた。

「あああああああつ！ ……あああああつ」

浴槽を満たす魔物に隠され外からは見えなかったが、キャロンのM字開脚で無防備になった腔ツアギナに、魔物が殺到していた。肉襞にくひだに吸い付かれ啄ついばまれる新しい快感に打ち震えるキャロン。

「ああん！ あああん！」

浴槽の縁ふちにかけて脚に力が入り、キャロンは頭をいやいやと振る。

「だめええ、そこは、っは、……あああああつ！」

魔物は彼女の尻穴アナナルからも容赦なく侵入し、奥へと進みながら中に残っていた排泄物を舐め取っていく。

「あああああつ！ ……はああああん……」

睽ツアギナと尻穴アナルを占拠する魔物がドクドクと脈動する圧迫感と、女陰に張り付かれ尿道口をこちょこちよと愛撫される気持ち良さでキャランは失禁していた。魔物は獲物から溢あふれ出す小水を一滴も漏らさず、ジュルジュルと吸い尽くしていく。

「あああつ、ああん！ きもち、いいい……きもちいいよお、ああんっ！」

全身を包む快感に蕩とろけきつた表情を浮かべたキャラン。

だらしなく開かれた口からは涎よだれが滴したたり始めていた。

「……むっ、すぐに止めよ！」

ラモー・ルーの荒らげた声に、黒いローブは慌てて浴槽の魔物に何やら杖のような物を突き刺す。すると魔物はギュッと縮ちぢこまるように動きを止めた。

黒いローブ達がキャランを浴槽から引き上げた。魔物の性感マッサージから解放されたものの、未だキャランの体には快感が駆け巡り、足下がフラフラしていた。

ラモー・ルーはキャランの背中に手を回し、体を支えてやる。そして、彼女の体をゆっくりと撫でる。

「あああ、……ああん……はああん……」

キャランは全身が性感帯になっているかのようなだった。魔王に触ふれられる場所全てに電

流のように快感が走り、その度に体がぴくっぴくっとなんと震えてしまう。

ラモー・ルーが黒いローブに合図をすると、キャロンの前に大きな鏡が置かれた。

「おまえにこれはまだ早かったようだが……それ、体は綺麗になっておるぞ」

鏡を見ると、キャロンの肌は赤ん坊のようにつるんとして、無駄毛も綺麗になくなっていた。そして、陰毛も……

「いやあん……彼処も無くなっちゃってるう……」

「その魔物は捌め捕った獲物の毛や老廃物、排泄物を食って生きている生物の遺伝子を組み込まれたモノで、先程のミストは必要な毛髪は保護しておく為であり……」

「もうよい……」

ラモー・ルーは手をかざし、黒いローブの説明を遮る。

最近やっと生え揃ってきて大人っぽくなったと喜んでいたのに、また子供に逆戻りになり、凹んでいるキャロンは黒いローブの説明など聞いていなかった。

「今日はわしが送り届けてやろう」

キャロンを抱き上げるラモー・ルー。

空中に浮かぶラモー・ルー城には黒騎兵のフライングマシンが行き来する出入口が何か

所か設けられていた。しかし、そことは別の、城の最下層部近くにある開口部から一機のフライングマシンが滑り出してくる。

ラモー・ルーとキャロンを乗せたフライングマシンが夜の地シヤドルの空に舞い上がる。

キャロンは魔王の膝を跨またぐように座り、マシユマロのような下の唇がラモー・ルーのペニスを頬張っていた。

一直線に並ぶラルの四つの月をフライングマシンの影が横切っていく。

「もうすぐあれが一つに重なる……」

ラルの月を見上げ、眩くラモー・ルー。……ふとキャロンに目をやると、

「ああん……、はああん……気持ちいい……」

空を飛ぶ風で火照りすぎた体を冷ます気持ちよさと、ラモー・ルーのペニスが子宮を押し上げてくる気持ちよさで、キャロンはうっとりとした表情を浮かべていた。

「フツ……しばらく空の散歩を楽しむか」

ラモー・ルーは操縦桿を巧みに操作し、急上昇、急降下を繰り返す。

「落ちたくなければ、股にしっかり力を入れていろ、フフフ」

キャロンの体が一瞬浮かび上がって、落ちてくる所を待ち構えていたペニスが突き上げる。

「あああああん！ あああっ、あああああっ！」  
 止め処なく溢れ出すキャロンの愛液を月の光が銀色に煌めかしていた。

ラモー・ルーはフライングマシンを城の上空で大きく旋回させながら視線を巡らし、目標を見つけると、そこへ機首をまっすぐに向ける。二人の乗ったフライングマシンが尖塔の最上階へと着陸した。そこはキャロンの石牢へと繋がっている尖塔だった。

ラモー・ルーはフライングマシンからキャロンを降ろすと背後から彼女の太ももを掴み、M字に開脚した体勢で抱きかかえる。

落ちないようにラモー・ルーの腕に手を回すキャロン。膝下を見るとペニスが見ると、ペニスが彼女の花卉に竿を擦りつけながら遅くそそり立っていた。

キャロンがクスツと笑う。

「何が可笑しい？」

「ほらこれ。あたしに立派なおちんちんが生えたみたい、あはっ」  
 屈託のない笑顔を見せながら、キャロンは陰唇でペニスを揺らす。

「まったく……どれほど淫欲に浸しても、お前はそうやって笑う。不思議な娘だ」  
 ラモー・ルーはそう言うと、ペニスを肉吊りフックのように使いキャロンの肉壺を刺し

貫いた。

ズヌッ！

「あああっ……ああああんっ！」

ペニスに子宮と共に内臓を持ち上げられ、串刺しにされた瞬間、先まで無邪気に笑っていた少女の顔は牝の顔に変わっていた……。

ひとつの生き物になったかのような二人が階段を降りていく。魔王が一步／＼階段を降りていく度、ゆっさゆっさと上下するキャロンの腔なかでは固く強張こわばったラモー・ルーのペニスが彼女の子宮ポルチオ口に頭突きを食らわせていた。

「あっあん……ああん……ああん……」

ラモー・ルーはキャロンを抱えたまま、あの不思議な大鏡のある部屋に入っていく。

「どれ、こうすれば、おまえとわしが繋がっているのがよく見えるだろう」

大鏡の前に立ったラモー・ルーは掴んでいるキャロンの太股を大きく拵こげ、結合部分を彼女によく見えるようにした。

「ああ……、いやあ……」

キャロンの体を上下させながら自らも腰を動かし、深いピストン運動を始めるラモー・ルー。

「あああっ、いやっ！ あああああん！ あああああああっ！」  
 子宮を突き破られそうな衝撃が痛いほどの快感を与え、ラモー・ルーの腕にしがみつ  
 きながら顔を激しく左右に振るキャロン。

「ああああん！ んっあああっ！ はあああっ！」

「自分が犯されている姿はどうだ？」

とろんとした瞳で鏡の中の自分を見つめるキャロン。

(ああ……、あたしって犯されてる時、こんなエッチな顔してるの？)

鏡の中のキャロンはうっとりとした表情を浮かべていた。

(ああ……あんな太いのがあたしの胎内おなかに入ってる……)

鏡の中のキャロンの彼処あそこは愛液を垂らしながらペニスを咥くわえこんでいた。

(ああ……、あたし、すごく気持ちよさそう……)

鏡の中のキャロンはラモー・ルーに身を委ね、エクスタシーにとっぷりと浸つかっていた。  
 激しく突き上げるペニスがプルプルと乳房を弾ませ、ポニーテールを踊らせる。

(……うん？ 動きが)

キャロンは大鏡がいつもと違って、映している物の動きが遅れていない事に気付いた。  
 ……が、それも一瞬の事、下腹部から脳天に突き抜ける快感が彼女の思考を止める。

「……っ！ ああんっ！ ああんっ！ あああんっ！」  
そして、次々と押し寄せてくる強烈な快感の衝撃がキャロンの鏡への興味を消し去っていった。

抱きかかえてきたキャロンを石牢のベッドに寝かせるラモー・ルー。

夢見心地な瞳で魔王を見上げるキャロンは自然と脚を拡げた。

それに応えるようにラモー・ルーがヴァギナ陰を愛撫すると、指を伝ってトプトブと精液が溢れ出してきた。

「やん……こんなにたくさん……」

はにかむように微笑むキャロン。

「次も楽しみにしているぞキャロン、フフフ……」

キャロンの耳元で囁くと、石牢を去って行くラモー・ルー。

## ラモー・ルーの夜 第四夜

ラモー・ルー城の周りにはいくつもの岩塊が浮かんでいる。その中にただ一つ、美しい逆円錐形をした岩……否、それは明らかに人の手によって造られた構造物があった。側面には底から上に至る階段があり、それは幾何学的な紋様にも見え、鏡の様に平らな頂上には祭壇を中心にストーンサークルが配置されていた。

おどろ／＼しいラモー・ルー城とは違い、神聖な雰囲気を感じさせる光景にキャロンはキョロキョロと周りを見渡していた。

「ゴモロスの神殿にあった空中祭壇だ。この城までわしが移動させた。ここに女神の力が眠っていると伝えられていたからな……」

キャロンとラモー・ルーを囲むストーンサークルが月光を反射して、キラキラと銀色に輝いていた。

「ふうん、綺麗……きゃあっ！」

ラモー・ルーはキャロンを抱き上げ祭壇の上に押し倒すと、ダラダラと唾液を垂らしな

がら、少女のしなやかな体に舌を這わしていく。

「いやあん……外でなんて……」

その言葉とは裏腹に、キャロンはラモー・ルーにその身を捧げるように足を大きく広げ、  
花弁はなびらを晒さらしていた。

「ここではラルの月しか見ておらぬぞ。フフフフ」

キャロンの瞳に映っていたラルの月をラモー・ルーの顔が隠すと、彼女の唇をこじ開け  
魔王の舌が侵入してきた。キャロンも舌を絡ませディープキスにすかさず応じた。

「はああ……、んっむう……んっ」

ラモー・ルーの唾液がキャロンの舌を通じてトロトロと彼女の喉に流し込まれていく。

少女の舌を味わいながら、ラモー・ルーはキャロンの乳房を下から絞りあげるようにも  
みしだき、乳首を摘つままんぞりこりと虐いじめる。

「あああつ、あん、ああんっ！」

ラモー・ルーはキャロンの太ももを押し広げると、今度はぼってりした下の唇へディー  
プキス。

キャロンの開かれた脚の向こうに見えるラモー・ルーの体がムクムクと波打ち始め、巨  
大な蜘蛛の魔物へと変形していく。彼女の初めてを無理矢理奪った魔獣がそこにいた。し

かし、今のキャロンにとっては目眩めぐるめく快樂の世界に連れて行ってくれる案内人だった。

「あん……」

祭壇に捧げられた生贄を食らおうとするかのように、魔獣の蜘蛛のような脚が、キャロンの四肢を祭壇に押さえ付け動けないようにした。次に魔獣の口から何本もの細い舌が這い込めてくると、キャロンの口、耳、首筋、乳房、脇、臍、下腹部、陰部、内股、あらゆる性感帯を舐め回していった。

「あっああんっ、はああああん、もっと……ああん」

そして、一番太い舌の吸盤状になった舌先が肌に強く吸い付き、いくつものキスマークをスタンプのようにキャロンの体に残していく。

魔獣の下腹部からヌルとペニスが顔を出すと、蛇の様な動きでキャロンの花卉はなびらを亀頭でクチュクチュとくすぐる。

「あああん……」

待ちかねていたモノの登場にキャロンの瞳は淫らに輝き、艶めなまかしく腰をくねらせ、ペニスを胎内ななかへと誘った。

しかし、ペニスは花卉はなびらから離れると焦らすように下腹や内股を這い回る。

「ああんっ、いやああん」

充血したクリトリスを下から潰すように亀頭を擦りつけられ、キャロンの蜜壺がヒクヒクとその口から愛液を滴したらせる。

「はああんっ、意地悪しないでえ……ちようだい……はやくう……」

その言葉を待っていたかのように魔獣のペニスにキャロンの肉壺へと入っていく。

「あっあああああっ！」

魔獣の生殖器は人のそれとは違い、歪いびつに節ふし搏く立たっており、何段もの雁首にくひだで肉襲にくひだをひつかくようにキャロンの陰ヴァギナを犯す。

「あああんっ！ はあああああん！ っあああああん！」

新しい快感がキャロンを即座に上り詰めさせる。

「っ、あああああっ！」

キャロンが最初の絶頂を迎えると、魔獣はペニスを引き抜き、精液で彼女の下腹部、腹、胸を白く彩っていく。

「あああん、あ、あつい……はああ……」

精液がパタパタと体に降りかかる度、ピクン、ピクンと体を震わすキャロン。

「はあ、はあ……あああ」

キャロンは指で下腹部から腹、胸へと丁寧に精液を塗り広げ、最後に指に絡まった精液

を薔薇色の舌で舐め取っていく。陶醉した表情でラモー・ルーを見つめながら、キャロンはころりと体を回し、うつ伏せになると膝をつき空に向かって尻を突き出した体勢になった。

魔獣はキャロンの背中に覆い被さると、サソリが獲物に毒液を注入するかのようになす。少女を刺し貫く。

「はうっ、……ああっ、ああっ、ああっ！」

後から突かれる衝撃を子宮が快感の波動に変え、キャロンの体を突き抜けていく。ペニスにジュボジュボと出し入れされる度、結合部からはポタポタと愛液が滴り落ち、祭壇を濡らしていく。

「かけて……今度はあたしのお腹の中に……かけてえ」

甘い声で懇願するキャロン。

ビュッ、ビュルッ、ビュルッ、

「っはああっ、あああああっ」

精液が子宮口に浴びせられた事が引鉄となり、膣がペニスをギュウギュウと圧迫する。

「もつと……お腹一杯にして！ あああああんっ！」

それに応えるように子宮をリズムカルにノックしながら魔獣は精液を吐き出し続けた。

「はああああ……んっ、ああああああ」

射精を終えた魔獣はキャロンを抱きかかえノソノソと祭壇の上に登ると、彼女を腹の上に載せた。

キャロンは体を起こし、魔獣の腹部で勃起しているペニスに唇を這わせキスをすると、亀頭を頬張り、フェラチオを始める。

「んっ、ふぐっ、んんっ……」

キャロンは魔獣の顔の方に尻を向け、腰を振り、クンニリングスを要求する。

ジュルルッ、魔獣の口から這い出した無数の舌が代わる／＼キャロンのヴァギナとアナルをしゃぶっていく。

「んっ、ふううん、くっあふん……」

キャロンが「もっと強く！」と催促するように尻をグイと突き出すと、魔獣の舌の群れが彼女のGスポットに集中攻撃を浴びせる。

「んんっ！ んぐうううっ！ んああんっ！」

キャロンが激しい舌の動きに堪らず噴いた潮を顔に浴びせかけられた魔獣は、彼女の聖水を美味そうに舐め取っていく。

魔獣は返礼とばかりにキャロンの喉に精液を吐き出す。

「んあっ！ ……ぐふっ……んん……んぐ……」

キャロンは嘔き出す精液を喉の奥で受け止め、飲み干していく。

「はあはあ……ああ……」

ペニスに残っている精液も吸い尽くしたキャロンは体の向きを変えると、まだ天に向かってそそり立つ魔獣のペニスの上に跨またがった。

亀頭の位置を確かめるように花卉ラベアを擦りつけ、ペニスが自分の膣なかに入っていく様を見つめながら、ゆっくりと腰を落としていく。

「はあっ……あああっんっ！」

亀頭が天井に達するのを感じると、キャロンは体をゆっくりと上下させる。

魔ラモール獣は牀の上に乗ったキャロンの好きなようにさせ、その痴態を眺めていた。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！」

汗と精液で金髪が体に張り付き、体に付けられた無数の紅い性痕ステイグマ、一心不乱に腰を振るキャロンの裸体はラルの月の光を浴び、美しく妖艶な輝きを纏まとう。

やがて体を支えるため魔獣の足を掴んでいるキャロンの手にぐっと力が入り、彼女の腹筋がビクッビクッと収縮を始める。彼女のくくタイミングを見計らい、魔ラモール獣は射精を始めてやる。熱い噴流ポルチオが子宮口を焦がし、キャロンを四度目の絶頂に導いていく。

「あああん！ あつい……ああああああっ！」

射精の脈動にシンクロするようにキャロンはビクッビクッと体を後に反らせ、その度に金色のポニーテールが大きく波打つ。彼女は内股で魔獣の体を挟み、腹筋と尻の筋肉を使い根元まで咥えこんだペニスをキュッ、キュッと締め上げ精液を搾り取っていた。

キャロンの心地よい肉壺の感触と彼女のイキ顔に眼を細める魔獣。

「鏡の前で体位の練習をしていた甲斐があったな、フッフ」

「……えっ、なんで知ってるの？」

快感に打ち震えていたキャロンの顔が少女へと戻る。

「わしはお前の事は何でも知ってるのだ、フッフ……」

「ラモー様ったらもう……でもあたしのココ、気持ち良いでしょ？」

魔獣の顔を覗き込んだキャロンは小悪魔のような微笑みを見せた。

「そういう台詞は百万年早い……」

魔獣は伸縮自在のペニスを上下運動させ、子宮諸共キャロンの体を突き上げた。

「あひっ！ ダメえ！ おなか……お腹壊れちゃうう！ ああああんっ！」

まるで暴れ馬に乗っているかのようにキャロンの体は魔獣の腹の上で跳ねていた。

城への帰途、デイメルンの森からフライングマシンの編隊が近づいてくるのを見つけたラモー・ルーは、その一団へと機首を向ける。

段々と近づいてくる四騎編隊の先頭のフライングマシンには黒騎兵とは違う鎧を着た兵士が乗っているのが見えた。

「やはり、あの隊が帰ってきたか……」

ラモー・ルーは四騎編隊の手前でクルリと旋回し、並列飛行させる。

「おお、これはく／＼ラモー・ルー様」

先頭の兵士が兜を脱ぎ、敬礼する。昼ヒユの地ツの人々誰もが尊敬の念を抱くラル王家衛士の鎧を着たその兵士はマリオだった。

馬鹿丁寧な敬礼をするマリオの視線はラモー・ルーの腕に抱かれた虚ろな目をした少女に注がれていた。彼女の肌には無数の朱い痣、女陰からは精液を滴らせていた。

（犯された後の女の姿もたまらんねえ……）

マリオは思わず舌なめずりをしてしまう。

「へへッ、お楽しみのお帰りで？」

マリオの問いには答えず、逆にマリオに聞くラモー・ルー。

「首尾はどうだった？」

「もちろん上々、ユリア王女救出隊はダイヤモンドの森に迷い込ませて全滅でさあ  
おどけるように両掌りょうてを上に向け「みんなおじゃん」とポーズを取るマリオ。

「そうか大義であつた」

「有り難きお言葉……」

マリオはフライングマシンのシートの上に立つと深々と一礼する。

城に向け飛び去ろうとするラモー・ルーに、頭を下げたままのマリオが尋ねる。

「……で、ラモー様、今回の褒美のほうは」

「褒美なら十分に足りておろう？ 我が黒騎兵を使い女を掠さらっては楽しんでおると聞いておるぞ、ハハハ」

ラモー・ルーは振り向くことなく城へと去って行く。

「……チッ」

マリオは小さく舌打ちする。

## マリオ

ラモー・ルー城の駐機区画、黒騎兵達がフライングマシンの乗り降りで行き交う中、一人、昼<sup>ミユウ</sup>の地の鎧を着た兵士がフライングマシンに乗り込む。その兵士が乗った機体はふわりと浮き上がるとフライングマシン専用の門を抜け、空へと飛び立っていく。

「くそっ、ドロスの野郎め！ 偉そうに。ここは人使いが荒いぜ。オレ様を誰だと思つてやがる。ラモー・ルーを封印から解いてやったのはこのオレ様だぞ！」

ユリア王女救出隊をまんまと全滅へと追いやったマリオだったが、今再びラモー軍団のスパイとして昼<sup>ミユウ</sup>の地での任務を言い渡されていた。

愚痴／＼と言いつつながら、昼<sup>ミユウ</sup>の地の方向へと操縦桿を倒したマリオは尖塔の上に白くて、時々キラキラと輝いているものに気付く。

「……なんだあ？」

ラモー・ルー城、いや夜<sup>シヤドル</sup>の地でもまず見ない色彩を不思議に思ったマリオはポケットから望遠鏡を取り出し覗く。

「へえ、これはこれは……」

レンズの向こうには素裸の少女がいた。足下から舐めるように視姦を始めるマリオ。気持ち太めだが引き締まった脚。

「少しばかり太いし、へへっ短足だな。どこかの村から掠われてきた娘かあ？」  
マリオは少女の背後に回る。

「ほう、良い尻してるじゃねえか。突っ込んでやりながらパンパン！ と、しばきたくなる尻だ……おっと」

少女の死角から出ないようにフライングマシンを操縦するマリオ。再び、少女の前側へと移動すると、陰毛がなく、無防備に晒されたむちっとしたクレバスが見えた。

「へっへっへ、ツルツとしたパイパンに、形の良いまんこ、良いねえ」

股間がカチカチになってくるのを感じながら、マリオが望遠鏡を少女の胸に向けると、小振りだが桜色の乳首がツンを上を向いた乳房がレンズの中にあった。

「ここは年相応だな……いや、小せえちいか？ さて、最後にお顔を拝見っと」  
レンズが映した少女の顔にマリオは見覚えがあった。

「……ククッ、あん時のラモー・ルーのお気に入りか」

マリオは舌なめずりをすると、腰のポーチから吹き矢を取り出す。それはラモー・ルー

の命により、時には自分自身の欲望の為に、昼ヒユの地ユウで女を掠さらう時に使っている馴染みの道具だった。

気付かれないよう、慎重にフライングマシンを少女の背後に回り込ませると、マリオは吹き矢を放つ。

「……？」

少女は吹き矢が当たった背中を確認しようとするが、すぐにその場にパタリと倒れ込む。「ひやはは、素っ裸だから当て放題だ」

マリオは誰にも見られぬよう周囲を確認しながら尖塔にフライングマシンを乗り付けた。

床に広がった金髪のパニーテール、滑らかで透き通るような肌、まだ幼さが残るが均整の取れたプロポーション。それらを月明かりが神秘的に輝かせ、マリオは思わず見とれてしまっていた。

「ほう……、なるほどねえ」

人攫ひとさらいに手慣れたマリオ、少女を素早くフライングマシンに載せると、城から幾つも突き出した尖塔が作り出す死角を利用しながら人目につかぬよう、ディメルンの森へと飛んで行く。

低空飛行で森の木々の隙間をすり抜け、ラモー・ルー城と大渓谷の中間点辺りまで来ると、マリオはフライングマシンを森の中に着陸させた。そして、その辺りにある木の枝や、草を機体に被せ、入念に機体をカモフラージュする。

少女を肩に担ぎ、鬱蒼とした森の中を歩いて行くマリオ。やがて視界が開けると、そこにはぽつんと丸太小屋が建っていた。数年前までは密猟者達が休憩所としていた小屋だったが、今は放棄されたものだった。

キャロンが意識を取り戻すと、見知らぬ小屋の中でベッドの上に縛り付けられていた。

「叫んでも他には誰もいないぜ？　ここはディメルンの森の真ん中だ」

知らない男がキャロンの顔を覗き込んできた。

「はっ、放して！」

「若い娘さんがそんな格好で歩き回ってるんだ、男が欲しくてたままないだろう？」  
ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべた男のねっとりとした視線がキャロンの忘れていた羞恥心を蘇らせる。

「……い、いやあ……見ないで……」

男はキャロンに武者振り付くと彼女の首筋から耳そして唇へと舌を這わせる。

「いやっ、いやっ！」

キャロンは顔を激しく左右に振り、男の接吻を拒絶した。

「まあいい、舌を噛み切られてもかなわんからな」

男は気を取り直すと、乳房をなで回し、乳首を舐め、軽く歯で噛む。

「……ひっ、痛っ！」

男はキャロンの体のラインに沿って舌を秘裂へと這わせていくと、無遠慮にクレバスを指で押し広げ、花卉はなびらを舐め上げる。

「へへっ、ここはいい味がするな、ラモー・ルーのお気に入りだけのことはある」

ひとしきりキャロンの味を舌で堪能した男が服を脱ぎ全裸になると、すでに彼のペニスは少女を犯そうと固くいきり立っていた。

「きゃっ！」

初めて人間の男のペニスを見るキャロンが目を背ける。

「おいおい、かまとどぶるんじゃねえよ、ここはもうラモー・ルーに良い具合にされてんだろう？」

男はキャロンの顎あごを掴み顔を向けさせ、片方の手では彼女の膣ヴァギナをいじる。キャロンはぎゅっと目をつむり、また顔を背ける。

「まあいい、……初々しいのも悪くないか、へへッ」  
 下卑た笑いをしながら男はキャロンに覆い被さると指をツアギナに差し込む。今まで経験したことのない乱暴な指使いにキャロンは悲鳴をあげる。

「ううっ、……ひっ、……いやっ！」

「どうなってんだ？生娘みたいな反応しやがって」

男は両手でキャロンのひざのあたりを掴み、ぐいと脚を押し広げると、亀頭を彼女のはなびら花弁にあてがい狙いを定める。

キャロンの視界に男の体が迫ってくる。

「い、いやあああ！」

逃げようと暴れるキャロンの手首にロープが食い込み、赤い痣あざを作っていく。

「すぐによがらせてやる」

まだ受け入れの準備が出来ていないキャロンに男はペニスを無造作に突っ込む。

「くっ……い、痛っ！ 痛いっ！ あああっ！」

前戯と同じで男の竿使いも乱暴者そのものだった。見知らぬ男に犯される恐怖と体の中を乱暴に掻き回される苦痛に涙を流すキャロン。

「いやあ、ああっ、ひっ、あああっ、」

「つまんねえな、こんなのにならモー・ルーは夢中なのか？」

ただ射精の欲求を満たす為だけに男のピストン運動が激しくなっていく。

「あっ！ ……かっ……ひあっ、くあああっ！」

「へっ、そろそろイクぜ？」

男の腰がパンパンとキャロンに打ちつけられるリズムが速くなる。

「いやあっ、だめっ！ 中はいやああ！」

「つれない事言うなよ、そらっ、出すぜえ！ ……うほっ！ うほっ！」

男はキャロンの膣なごに盛大に射精する。

「いやああ……」

突然、ボタン！ と小屋の入口の扉が開け放たれる。

「！」

男は立てかけてあった剣を素早く取り、構える……が、すぐに戦闘態勢を解いた。

「……………ドロス」

ドカドカと巨大な体を揺すり、異形の鎧の騎士が小屋に入ってくる。

「マリオ、ラモー・ルー様がお呼びだ」

「へへへ……」

男は剣を床に放り投げると、観念したように両手を挙げた。

玉座に座るラモー・ルーと、その前に跪ひざまずいたマリオ。今、ラモー・ルー城の王の間にはその二人しかいなかった。

「マリオ、あのよう所で何をしておったのだ？ ドロスから昼ミユウの地チでの任務を命じられていたのではないのか？」

「昼ミユウの地チは遠いんでねえ、あそこでちよっと休憩してたんでさあ」  
馬鹿にしたような口調で答えるマリオ。

「……わしの所有物モノに手を出すとどうなるか、知らぬ訳ではあるまい」

「たまたま通りかかった俺をあんな娘が誘惑してきたんでさあ」

「……」

「欲求不満なのか素っ裸で彷徨うろつしてる娘だ、紳士としてはお相手をしない訳にはいきま  
すまい？ へへへっ」

少しおどけた風に答えるマリオ。

「フッ、マリオよ、そんな戯あそれ言ことをいつまでわしに聞かせるつもりだ？」

「……これで終わりでさあ！」

そう言うなり、突然マリオは腰のフランベルジュを抜くとラモー・ルーに斬りかかった。フランベルジュがラモー・ルーの左肩から左胸を切り裂いていく。切り裂かれた場所がジュウジュウと焼け焦げていく。

「へへっ、七振りのリバーズの剣のうちのひとつ、タダでは済まんذار？ それ、もう一丁！」

脇腹にたたき込まれたカットラスが魔王の胴の中央部で止まる。

「それ、三つ目え！」

眉間にクナイが刺さる

「ほらこれが最後だ」

モーニングスターがラモー・ルーの顔左半分を吹き飛ばす。

「流石はリバーズの剣、あつという間に魔王様も瀕死の状態だ、クハハッ！」

ラモー・ルーの傷口がグズグズと崩壊していく。

「……………」

マリオが懐から手のひら大の鏡の破片を取り出すと、ラモー・ルーの目の前でヒラヒラと振る。

「これが何か解るだろう？ ブレイブの破片だ。こんな時のために取っておいたんだぜえ

へへッ」

「……………」

「魔力がまだ完全には戻ってはいないんだろう、ラモー・ルー。俺には解ってるんだ、なんせお前を封印から解いたのは俺なんだからな」

「……………」

「完全ではないおまえには四つのリバースの剣とブレイブで充分に脅威だろう、ああ？」

「……………」

「また封印されたくなければ、俺に従え。今日から俺がこの城の主になる。あるじ夜の地シヤドルの王は俺だぜえ！」

「出会った時から愚かなヤツだったが、これほどだったとはな……」

ラモー・ルーが右手の人差し指をふると、マリオの鏡を持った左手が見る見るうちに不自然な形に歪み始めた。

「な、なんだこれ！ うっうわああああああっ！」

バッシュッ！ 左腕が弾け飛び肉片と鮮血が飛び散る。

「ぎゃあああああああ！」

左腕を押さえ、うづくまるマリオ。が、次の瞬間、モーニングスターで渾身の一撃をラ

モー・ルーに放つ。

しかし、その攻撃をラモー・ルーは素手で軽く受け止めると、そのままマリオの得物を握り潰した。

「……なん……だと？」

目の前で粉々になっていくリバースの剣と、吹き飛ばしたはずのラモー・ルーの顔が元に戻っている事に啞然とするマリオ。

「リバースの剣は力を貯めておく器にすぎん。その力も十四年前にほとんど使い切っておる……わしを封印する為にな」

見るとラモー・ルーの傷口の崩壊は止まり、急速に再生を始めていた。

「ばかな、そんなこと……七大衛士ななだいえいしのじじい達、何も言っただぞ……」

声を震わせるマリオにラモー・ルーは額に刺さったクナイを引き抜き、自分の再生力を見せつける。

「伝説の剣と云われたリバースの剣も今や只のナマクラよ」

ラモー・ルーはマリオに近づきながら、胴と肩に刺さったリバースの剣を一本ずつ引き抜き、粉々に砕いていく

「う、うわあ！ 来るな！ 来るな！」

破壊されたモーニングスターを振り回しながら、後退あとじきりするマリオ。

「……もつとも、わしは元の力をすでに取り戻している」

ラモー・ルーがマリオに向かって腕を突き出し、掌てのひらをグツと握る。

「極上の蜜壺を二つ、手に入れたおかげでな」

マリオの体は捻ねじれ、関節という関節が逆方向に折れ曲がっていき、最後に全身の骨がバキバキと音を立てた。

「ぐぎゃあああああ！」

ラモー・ルーが握った手をパッと開くと、バンツという風船が割れるような音と共にマリオの体が四散し、そこには肉塊と血だまりが残されていた。

「もう少し賢かしこければ、今しばらく生きていられたものを……」

何かを探すように床に散らばった肉片を見回すラモー・ルー。やがて血の塊の中から芋蟲いもむしのような黒い塊が這い出してくるのを見つけると、それをつまみ上げる。

「これを植え付けた時から、おまえはわしの奴隷でしかなかったのだ、フッフ」

ラモー・ルーが黒い塊を左手の欠けた小指の辺りに押しつけるとそれはグチュグチュと音を立てて小指へと形を変えていった……。



「誰か！ ここを開けて！」

マリオはキャロンを羽交い締めはがじにするとベッドへと引きずっていく。

「いやっ、放して！ いやーっ！」

キャロンを天蓋付きのベッドの上に放り投げると、彼女の上のし掛かるマリオ。シーツをビリビリと引き裂くと、それを使ってキャロンの手足を天蓋の支柱に縛り付け、口には猿轡さるくわをはめた。

「んーっ！ んーっ！」

ベッドの上に大の字で縛り付けられたキャロンをニヤニヤと見下ろすマリオ。

キャロンの肌を撫で回し始めるが、恐怖にバタバタと暴れるキャロン。

マリオはやれやれと言った風にキャロンの頭にシーツをグルグルと巻き、目隠しをした。

「んーっ、……………」

不意に視界を奪われた恐怖でキャロンが体を硬直させ、しばしの沈黙が訪れた。

キャロンの抵抗が落ち着くの見計らったマリオがキャロンの体に触れる。

「んんんっ！」

キャロンがビクッと体を強張らせ手足を縛るシーツがキリキリと音を立てる。

マリオは掌てのひらでキャロンの体をマッサージするように撫で回す。

何も見えないキャロンは何をされるのか触覚に頼るしかなく、それが彼女の体を敏感にしていた。徐々にキャロンの手足から力が抜けていく。

マリオの手が乳房を回すように揉みしだいていく。そして、乳首を舌で転がす。愛撫に感じ始めたキャロンは乳首を勃起させていた。それを待っていたかのようにマリオが乳首を軽く嘯む。

「っんー！」

マリオのゴツゴツした指が肉厚な陰唇を押し広げ、隠れていた花卉はなびらを愛撫する。やがてキャロンの彼処は湿った淫らな音を奏で始めてしまっていた。マリオの舌が、乳首から臍へそ、下腹へと這はっていき、いやらしい音を立てている女陰へ達する。

「ンッー、ンッー」

尿道口を舌先で刺激し、クリトリスを甘嘯みし、時折、キャロンに聞こえるように女陰全体をブチュブチュと下品な音を立て吸う。

昂たかぶって苦しそうな息遣いをするキャロンの猿轡さるぐつわをマリオが外してやると、

「……っ、ああっああああん！」

途端にキャロンの甘い声が部屋に広がった。

マリオは指を膣ヴァギナにするりと忍び込まずと、キャロンの胎内ななかを熟知しているかのように

自在に動かし、キャロンのGスポットを緩急を付け攻め始める。

「ああっ、あああああん、ああああああっ！」

あつという間に絶頂に達したキャロンから、ピュッピュッと勢いよく潮が噴き出してベツドに染みを作っていく。

「はああああ……」

性欲に従順なキャロンは、イカされた事ですっかり大人しくなっていた。

キャロンの目隠しを取るマリオ。

目を開けたキャロンの前に男根を見せつけるかのようにマリオが立っていた。

(あんなの入らない……いや……だめ……)

天に向かってそそり立つペニスはみぞおち辺りまでであろうかという長さで、先に襲われた時とは明らかに違っていた。

マリオの性技の虜となり「あのペニスで犯される怖さ」と一方で「あのペニスで犯される期待」で頭が一杯になっていたキャロンはマリオのペニスの異常さに気付かなかった。

マリオはキャロンの脚を縛ってるシーツを緩め、太ももを掴みM字に脚を開くと焦らすように亀頭を花弁に擦りつける。

「いやあ……だめえ……あああ……」

キャロンは嫌々と首を振るが、その瞳はマリオの巨根に釘付けになっていた。舌舐めずりするとキャロンの肉壺にペニスを埋めていくマリオ。

「ひっ、ああああっ！」

マリオの肉槍がキャロンの小さな膣ヴァギナに収まるはずがなく、すぐに奥にぶつかる。にも拘わらず、さらに奥へ／＼と子宮口ホルチオをこじ開け中へ入っていかうとするかのようにズンズンとピストン運動が始まる。

「ひいっっ！ あひいっ！ ああああっ！ くっああっ！」

子宮が受け止めている衝撃が内臓をブルブルと震わせ、ペニスが膣ヘソの辺りまで挿入されているように錯覚させた。

（いやっ、あたしのお腹、串刺しにされてる！）

思わず自分の下腹を確認したキャロンはマリオと目が合ってしまう。

「……っ！」

マリオの性技に屈し、今こうして体を重ねているものの、自分を強姦レイプした男の顔に嫌悪感を持たずに居られなかったキャロンはぷいっと顔を背けた。

マリオはキャロンのポニーテールを掴むと力尽くで自分の方に彼女の顔を向けさせる。

「わしを見ろ」

今度は目をぎゅつと瞑るキャロン。

「嫌われたものだな。あの男、よほど下手くそだったのか……」

マリオはキャロンに覆い被さると、しゃくるようにペニスを動かかし始めた。

先<sup>さつき</sup>よりもさらに挿入の深度が増して、ペニスが腹を突き破ってしまいそうに感じたキ

ャロンは悲鳴を上げる。

「いやああっ！ あああっ！ 裂けちゃう……裂けちゃう！ ひぎいっ！」

ズン！ ズン！ ズン！

此の前の粗野な挿入とは違い、マリオは子宮を的確に打ち据え、激しく震えさせた。

ズン！ ズン！ ズン！

快感の波動がキャロンを包み、やがて叫び声は牡<sup>おす</sup>を求める鳴き声へと変わっていった。

「ああんっ！ あああっ！ あああん！」

やがて男根のビクビクとした脈動に噴火の子兆を感じ取るキャロン。

「いやっ、中はダメえ！」

嫌っている男にまた中に出されるのは嫌だと、射精から逃れようとするキャロン。しか

し、彼女の両脚を掴<sup>つか</sup>んでいるマリオはそれを許さない。

「いやあ、あああああ……はああああん」

精液の噴流が子宮へ浴びせられ、キャロンはオルガスムスを迎えてしまう。

子種を胎内はらに受け入れる、セックスの本質である生殖行為に悦びを感じるよう、ラモー・ルーに躑しつけられていたから……否、そうではなかった。

(嫌いよ、こいつ嫌い……なのに……もっと中に出して欲しいってあたし思ってる……この遅いおとこ牡おとこの精液が欲しいって思ってる……)

彼女は自分の体を支配した牡おとこに種を植え付けられる昂奮でイってしまった。

マリオは最後の一滴までもキャロンの膣内なかに吐き出そうとするようにグツグツと亀頭で子宮を小突き上げる。

「ああん……ああっん……あんっ、あはあああん……」

キャロンは精液を絞る取るかのように腰をくねらせていた……。

射精を終えたマリオはペニスを引き抜くと、キャロンの両手両脚の縛めを外し、彼女を自由にした。

キャロンの胸の辺りに跨またがると、彼女の眼前にビクッビクッと脈動するペニスを誇示するマリオ。

「悔しいけど、この牡おとこに牝おんなとしての自分はすっかり支配されてしまった」とキャロン

は自覚していた。しかし、マリオに強姦された事はどうしても許せずキャロンは顔をそらす。……そんな彼女の鼻をムワツとした牡おすの臭いが刺激した。

「……！」

キャロンは一瞬、ハツとした表情を見せたかと思うと、みるみると頬が朱に染まり、吸い寄せられるようにペニスに唇を這はわしていた。精液と愛液に濡れた亀頭、雁首かりくびを丁寧に舐め上げ、口を含む。

「んっ……んっ……はあ……んっ……」

キャロンの奉仕を満足げに見下ろすマリオ。そして、奉仕の褒美とばかりにキャロンの口の中に精液が放たれる。

「んっ……んんっ！……んく、……んく」

喉に注ぎ込まれる精液をこくこくと飲み干し、口から溢こぼれ出た雫も無駄にすまいと舐め取っていくキャロン。

「……きゅっ」

キャロンが口淫の余韻に浸る間も与えず、彼女を乱暴に四つん這いにさせるマリオ。次の行為を悟ったように腰を突き出し、マリオの眼前に腔口さくらを曝さらけ出すキャロン。腔ヴァアギナの息遣いに合わせ、先に注がれた精液がトロトロと吐き出されてくる。

パン！ パアンツ！

マリオがキャロンの尻を強く張った。

「ひぎっ！ きゃあああ！……あああはああん……」

強い刺激を求めてやまないキャロンの体は、尻を叩かれた痛みで軽くイってしまふ。

「そら、惚けてるのではないぞ。今度はおまえがわしを楽しませるのだ」

「はああ……はいい……」

マリオは朱色の手形が残った丸く形の良い尻を撫でながら亀頭、竿の背中を花卉はなびらに擦りつけ、滴り出てくる愛液と精液で濡らす。充分な下拵したごしらえをされたマリオの肉槍が再びキャロンを刺し貫く。

「……はうっ！ ああんっ！」

ズンズンと子宮を押され口から内臓が飛び出しそうな感覚がキャロンを襲う。

「つく、はあああん！」

マリオが律動的な腰使いで子宮を殴打し、そこを起点とした振動が快感のヴァイブレーションとなってキャロンの全身を駆け巡る。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！」

更にマリオはキャロンの両腕を掴み、支えを失った彼女の上半身をうつ伏せでベッドに

押さえつける。それは斬首刑に処せられる罪人のような体位であった。だが今、処刑執行人の前に差し出されているのは首ではなく、キャロンの女性器。

身動き出来ない体勢にされたキャロンに肉槍の容赦ない串刺し刑が執行される。

「はんっ！ ひいんっ！ はんっ！ ひいんっ！」

拷問に近い性交……その激しさに相反するようにキャロンの体は徐々に脱力していき、マリオの肉槍に犯されるままになっていった。

肉壺を甦る事に夢中になっていったマリオはキャロンの変化に気付くのが遅れ、「しまった」という表情をすると、キャロンの顔を覗き込む。

耳まで紅潮し、呆けたような表情、悲鳴とも嬌声ともつかない叫び声を上げる口からは涎を垂らしていたキャロンは……愛しい人を見る眼差しでマリオを見つめ返してきた。

「……フツッ、おまえは本当に素晴らしい娘だ」

キャロンが牡の前にすつかり体を開いている事が解ると、マリオは遠慮無く猛り狂った肉槍を打ち付け続けた。

「はんっ！ はんっ！ はんっ！ はんっ！」

やがてキャロンのイク兆候を感じ取ったマリオはピストンを更に加速させていく。

「ああんっ！ はああああっ、ああああああーっ！」

歡喜の悲鳴を上げるキャロン。

オルガスムスと同時に滾るたぎような精液が注がれ、キャロンの体は痛いような快感を得てブルブルと痙攣けいれんしていた。

「ふーん、男の人ってこうなってるんだあ……」

ベッドに横たわったマリオの腰に抱きついたキャロンが、子供のように足を交互にパタパタと動かし、興味津々でペニスを観察していた。幾度ものセックスを経験してきたキャロンだったが、人間の男性器をじっくり見るのは初めてだった。

「うふっ、プニプニして気持ちいいー。」

キャロンは指で亀頭を弄び一頻りひとしきその弾力を楽しむと、次に陰囊をギュツと握った。

「こっちはフワフワしてて芯がコリコリしてて、ずっと触っていたくなっちゃう」

陰囊を揉みしだきながら、未だ鋼のように強張った陰茎を扱しどき始めるキャロン。

「あん、こっちはカチカチ。固かったり柔らかかったり、男の人のココって不思議……ねえラ、モトさま、ここ触られて気持ち良い？」

「ふむ、解っておったのか？」

「あはっ、この臭いと味で……」

キャロンは悪戯っぽく笑うと、ペニスの香りを楽しむように鼻の下に擦りつけ、亀頭に舌を這わした。

荒々しいセックスで乱れた後れ毛を指で整えてやるマリオ……否、それはマリオの姿をしたラモー・ルーであった。マリオに寄生させていたラモー細胞を介して彼の遺伝子を取り込んだラモー・ルーはマリオに擬態できるようになっていたのだ。

「どうだった、人間の牡おとことのセックスは？ フフフ」

「うーん……」

キャロンは顎に手を当て真剣に考えた後……

「よく分かんない……だからあ」

ひらりとマリオに馬乗りになると、自ら秘裂を広げ胎内へとペニスを導き入れた。

「あはあん……だから、もつとあたしのココを突いて分かせてラ、モー、さま！」

ニヤリと口角を上げるマリオ・ラモー・ルー。

「フフフ、おまえにも契ちぎりの儀式を行う刻ときがやってきたようだ」

そう言うのと腹の上のキャロンの子宮を突き上げるマリオ・ラモー・ルー……。

襖みそぎ

ラモー・ルー城の狭い通路を黒いローブを着た二人が並んで進んでいく。その後白いローブを着た者。通路に灯りはなく、黒いローブが手にしたカンテラが行き先を照らしていた。

暫くすると一行は重厚な扉に突き当たった。黒いローブの一人が掛けられた錠前をガチヤリと外す。

ギギギイイイ……

重苦しい音が通路に木霊し、まるで魔物が口を開けるように扉が開くと、黒いローブ達が恭うやうやしく白いローブを扉の奥の部屋へと案内した。

「ここでローブをお脱ぎください」

黒いローブに促され、白き者は頷うなずく。

すると衣擦きぬずれの音を残しながら白いローブが床にすべり落ちると、そこにキャロンが立っていた。何時ものように素裸である事には変わりは無かったが、普段身に付けている装飾具アクセサリーは全て外し、髪も下ろしており、文字通り一糸纏いつしまとわぬ姿で。

「こちらへ」

「……はら」

二人の黒いローブの後に従いしずしずと続くキャロン。彼女の歩く様子からは何時ものお転婆は想像出来なかった。それもそのはず、重要な儀式に臨むにあたって所作のレッスンを受けていたのだった。

部屋のさらに奥へと続く短い通路を抜けると、そこは何本もの石柱が天井を支え、大きな石造りの浴槽が据えられた大浴場であった。キャロンがラルの城下街で見た事のある公衆浴場に似た造りだったが、大きく違うのは浴槽には湯ではなく、何やらドロツとした白い半透明の液体が溜められ、それが放つ生臭い臭いが浴場を満たしていた。

(ああ、この臭い……私の体を気持ち良くさせてくれる臭い……)

キャロンの顔が見る見るうちに上気してくる。

「お気づきになりましたか？ここを満たしているのはラモー・ルー様の精液を培養した聖水です」

黒いローブが説明をするが、キャロンは半ばなか上の空。

「……はあ……ああ」

浴室に充満する臭い、生ぬるい湿気がねっとり肌張り付いてくる感触にキャロンは

これから始まる儀式への淫らな期待を膨らませていた。

(ラモー様の舌を思い出しちゃう……)

臍へその下あたりに中心に体が徐々に火照ってくるのをキャロンは感じていた。

「契ちぎりの儀式の前に、キャロン様にはここで御身おんみを清めて頂きます」

黒いローブが手を浴槽の方に広げ、キャロンに入浴を促した。

「さあキャロン様、浴場の中央までお進みください」

「……はら」

液体の発する臭いが媚香びせうのように働き、キャロンは引き寄せられるように浴槽に向かい脚を浸ける……

「あふ……ん……」

生暖かい白濁液がまるで意志を持つてるかのようにねっとり絡みついてくる感触に、キャロンは小さな吐息を漏らした。

キャロンが静かに浴場の中央に立つと、水面がユラユラと揺らめき始め、いくつもの波紋が描かれた。

「うふっ、おもしろい」

自分の周りに出来る波紋を、あちらに一つ、こちらに一つ、後に一つ……と指差してい

るうちに、何時しかキャロンは幾何学模様とダンスをするようにクルクルと回っていた。そこへ突然、液体の中から無数の触手が現れると、彼女の太ももを這い上がった。

「あはっ……」

キャロンは待つていたかのように微笑むと、触手達に体を預け為すがままにさせた。

触手は浴槽の液体をキャロンの肌に塗り込むようにヌルヌルと這いずり回ると同時に舌で嘗め回すような動作で彼女の敏感な部分を責め立てる。

「あ……あああん……はあ……はあ……」

キャロンの体に淫欲の火が着くにはさほどの時間はかからなかった。薄く開いた唇から甘い吐息が漏れ始める。

「つく、ああああん……だめ……え……」

触手の淫みだらなマッサージに身を任せ、聖水を塗りたくられたキャロンの体は浴場の仄暗ほのぐらい灯りで、ぬらぬらと輝いていた。

不意に獲物を黽こつていた触手がぜんまいが切れるように動きを止めた。

「……ああん……もうお終よみい？」

キャロンの悦よろこびに蕩けていた表情が不満のものへと変わる……が、すぐに触手は大きく波打つように動き始め、キャロンの手首足首を掴むようにきつく絡みつくると彼女の体を

宙に持ち上げる。

「ああんっ！」

大の字にキャロンを磔はりつけ状態にすると触手は再び動きを止めた。

愛撫を中断され、生殺し状態のキャロンは刺激を求めもぞもぞと体を動かす。

「次は……な……に……い……？ ……ああん……」

キャロンの催促するような声に反応するかのように、磔はりつけ台となった触手の根元から枝

分かれするように別の触手が生えてくる。それはペニスの形をしていた。

「……ああああん」

快楽を与えてくれる新たな来訪者を期待の目で見つめるキャロン。

触手ペニスはツンツンとキャロンの体をつつきながら彼女の口元まで這い上がるとゆっくりと唇をこじ開け、口腔を犯し始めた。

「んんっ！ ……あふっ、んんん、っはっんん……」

キャロンはそれに応えるように触手ペニスに舌を絡みつかせ愛撫を始める。それが愛おしい者の一物いちものつであるかのように入念に……。

「……ふぐ……んんっ……んんっ、……ああん……」

恍惚の表情を浮かべ口淫に耽るキャロンは、大きく脚を開かれた彼女の股下から新たな

触手ペニスが生え出してきた事に気付いていなかった。

無防備なキャロンの秘裂に二本目の触手ペニスがその鎌首を擦りつける。

「んんっ……あああああん！」

不意の攻撃にキャロンの嬌声が鈴の音のように響く。

二つ目がその亀頭でキャロンの秘裂をクチュクチュと嫌らしい音を立てながら何度か撫で上げると、精液で濡れ、淫靡な輝きを放つ花卉が開き、露わになった膣がヒクつきながら愛液を滴らせていた。

「いやああ、……あああああん……きてえ……ああ……」

キャロンは亀頭を追うように腰を動かすが、触手ペニスは焦らすように逃げ回る。そんな鬼ごっこをしているうちに、ふっとキャロンの視界から触手ペニスが消える。

「えっ？ どこへいつちやったの？」

キョロキョロと視線を彷徨わせるキャロンの死角から忍び寄った触手ペニスが彼女の肉壺を一気に貫くとそのまま子宮口へと突進した。

「ひっ、あっ！ ……あああああっ！ ああああああん！！」

子宮を貫かんばかりの衝撃にキャロンは悲鳴とも悦びともつかない声をあげる。

少女の膣を占拠した触手ペニスは居心地を確かめるように最初はゆっくりと、そして

徐々に動きを速めていく。

「はああん……あつあつ！ ……ああああん！」

力強いピストン運動でキャロンの体は跳ね上げられ、そして落下してくる所を触手ペニスが再び突き上げる。

「ああっ！ ……あああつああああん！」

手足を縛められ、体の自由を奪われたキャロンはこの魔物の拷問から逃げることは出来ない。

「ああっ……もっ、と……ああっ、くっんん、ああああつ！」

……否、キャロンはこの人外とのセックスを愉しんでいた。より深く貫かれるよう、触手ペニスの動きに合わせて腰をくねらす。子宮口ポルチオをコンコンとノックされる衝撃が子宮を振るわせ、その波動が下腹部から脳天まで貫く蕩けるとろような快楽に陶醉していた。

「あん……うああつ、ああああん！ あああん！ あああああ！」

子宮に打ち付けられる淫欲の波動に意識が集中してフェラチオが疎おろそかになってるキャロンを戒めるように口を犯していた触手ペニスはキャロンの喉深くをその亀頭で打ち据える。

「つぐ！ ごほっ……ごほっ……むうんんん……んんっ」

触手ペニスへの奉仕を再開するキャロン。

「うん……はあ……ううむう、ふっ、……ああああっ」

激しく往復する触手ペニスに絡みついたキャロンの花卉はなびらからは潤滑油ローションのようにとろとろと愛液が溢れ出し、辺りに牝めすの臭いを漂わせる。その臭いに誘われるように、また1本、また1本と顔を出してくる触手ペニス。それらはキャロンの小振りな乳房に巻き付いたり、乳首を締め上げたり、クリトリスを擦りあげたり、首筋を這いずり回ったり、……ラモー・ルーによって開拓された彼女の性感帯をくまなく蹂躪する。

にちゃり／＼と淫蛇いんじやの群れがキャロンの体にまとわりつき、蠢うごめく音とキャロンの喘ぎ声のシンフォニーにもフィナーレの時が訪れようとしていた。

「もう……ダメっ……ああああん、あああああん！ ああああっイっちゃううう！」  
キャロンが絶頂を迎えようとするその時、触手ペニス達もビクッ、ビクッと大きく脈動を始め……、

「んんっ！ あああああああああっ！」  
キャロンがイったのと同調シンクロするように一斉に射精を始めた。  
ビュッ、ビュルルル、ビュルルルッ！

激流となって喉に流し込まれる白濁液を一滴も漏らさず飲み込もうとするが、ついに耐えきれず息継ぎをするキャロン。

「んんんっ、くっ、ふぐっ……うううう、ああああああっ！」

吐き出された触手ペニスは構わず彼女の顔に精液を放出し続ける。

「はああああああっ……ん……ん……」

キャロンの小さなヴァギナ膣は噴水のような射精を受け止められず、逆流した精液が結合部から溢れ出し、ぱたぱたと雨のように滴り落ち、

「……はあ……ああああ……はあ……ん……ん……」

オルガスムスにぴくんぴくんと痙攣けいれんするキャロンの体に、無数の触手ペニス達がシャワーのように精液を浴びせていた。

「……はあ……はあ……あ……あ……」

受浸したキャロンの体は白い薄衣を纏まとっているように見えた。

浴槽から上がったキャロンの前に黒いローブ達ひざまずが跪ひざまずく。

「キャロン様の御体が聖水で清められました。これより臨まれる契りの儀式にてラモー・ルー様をつつがなく受け入れることが出来る事でしょう」

黒いローブの一人が杯を彼女に捧げる。

「最後にこれを……ラモー・ルー様から賜った精液でございます」

「……」

杯を受け取ったキャロンは、こくこくと喉を鳴らし……ラモー・ルーの種を飲み干す。そして、唇からこぼれ、あごへと滴った精液を指先で拭い、舐め取った。

「……はああ、ん……」

ついさっきイッたばかりだというのに、乳首が再び尖り、子宮の辺りがきゅんきゅんと疼き始め、思わず甘い声を出してしまうキャロンだった。

「これで禊は終了です、キャロン様」

「では魔王の間へと参りましょう、ラモー・ルー様がお待ちかねです」

「……はら」

契りちぎ

王の間——、そこはラモー・ルー城で一番広い空間が与えられた場所。中央には血の色をした絨毯じゅうたんが敷かれ、それは真つ直ぐに奥の玉座へと伸びていた。人の背丈二倍ほどの高さの壇に置かれてゐる玉座はそれに座る者に相応しく禍禍まがまがしい形をしていた。

玉座へと続く絨毯じゅうたんの上を黒いローブ二人に先導され、腰まである白いベールを裸身に纏まとったキャロンが歩いて行く。絨毯じゅうたんの両脇には黒騎兵がずらりと整列し、キャロン達を静かに見守っていた。

玉座の前に到着すると、黒いローブ達は跪ひざまずき、深々と頭こゝろを垂れる。彼等の頭上で岩が動いたかと思わせるほどの、大きな黒い塊が立ち上がった。

「待っておつたぞ、キャロン」

ラモー・ルーが大仰おおげように両手を広げながら壇上から降りてくる。

天窗で調整されているのか、壇の右隣には月光が作り出した淡い光の柱があり、その中に卵を半分まに割つたような形をした椅子があつた。それはキャロンを生贄いけにえの間に運んでい

た輿こしと同じく、魔力で空中に浮き、その形は淫みだらな体勢で座る事を強こしいる拵しらえになっているの是一目瞭然うなだった。

黒いローブに促うながされ、キャロンがその椅子に座る。

椅子に体をおさめたキャロンはその白い太ももを大きく開き、椅子の両脇に張り出した肘掛け状のフックに脚を掛けた。それを合図とするように背もたれが後ろに倒れ、フックがキャロンの脚を更に大きく開かせた。

これまでの数々の性の手ほどきでキャロンはその体位の意味を自然と理解していた。

(ああ……あたしのココをラモー様に捧げる格好……)

キャロンの胸が高鳴っていく。

「キャロンよ、準備はできておるか？」

ラモー・ルーはキャロンの頬をなで、彼女の体に沿って指を這わしていき、柔らかな乳房を揉む。

「はい……ああっ」

ラモー・ルーはキャロンの尖とがった乳首をつねるように摘まみ、キャロンの反応を楽しむと、キャロンから一歩後うしろに下がる。

ラモー・ルーが見下ろすキャロンの裸体が光の柱の中で淡く白い光を放っていた。

しばしの静寂が訪れ、それをかき消すように黒いローブの言葉が王の間に響く。

「……キャロン様、ラモー・ルー様へ契りの言霊を」

キャロンはこくりと頷くと、

「ラモー様に子宮を……」

キャロンは潤んだ瞳でラモー・ルーをじっと見据え、内股を掌で愛撫するように恥骨へと寄せていき、秘裂へと添える。彼女の指がすでに半開きになっていた大陰唇をゆっくりと左右に広げていき、次に小陰唇を開いていく。

「……捧げます」

自ら子宮へと通じる隘口を露わにし、身も心もラモー・ルーへの恭順を示すキャロン。

「良からう、お前に契りの聖液を授けよう……」

ラモー・ルーの体が溶けていくように崩れていき、漆黒の液体が床に広がった。暫くすると、液体はポコポコと泡立ちながら小山のように盛り上がっていき、蜘蛛の足のような物が何本も突き出して来るや否や、次の瞬間には魔獣が姿を現していた。

魔獣はキャロンが座った椅子にのしかかり、キャロンの顔を覗き込んだ。

紅い眼のギラつきが、ラモー・ルーとの出会いをキャロンに思い出させた。

(あの時もこうやって、あたしの初めてを……)

処女を奪われた悔しい記憶……だったはずなのに、今は目眩めくるめく初体験に感じてしまっている自分に気付くキャロン。

(これからあたしの全部をラモー様にあげるんだわ……)

そう思うとキャロンは体がどんどん昂揚していくのを感じていた。

魔獣の腹からゴツゴツとした雁首が何段もあるペニスが蛇の様に這い出してきた。

キャロンは両の掌で愛おしそうにペニスを包むと彼女の膣口はいぐちへと案内し、脚を魔獣の胴に絡ませ、胎内奥深くへと導く。

「んっ、あああん、」

魔獣が椅子をゆさゆさと上下に揺らす。

「あああっん！ ああん！ あああああん！」

宙に浮いた椅子が元の位置に戻ろうとする反動を利用し、手鞆を突く要領でキャロンの膣ヴァキナを深く挟えぐり、子宮を強打する魔獣。

「ああんっ、あああんっ！ はああああん！」

艶つややかな声を唇から漏らしながら、キャロンの視線はペニスの動きに注がれていた。

やがて魔獣の射精が始まり、自分の膣なかにドブドブと精液が注がれていくのをうっとりとして見つめるキャロン。

精を出し終えた魔獣がキャロンから離れると、黒いローブ達が恭うやうやしい所作でキャロンの手足にはめられた枷を椅子に固定する。

黒いローブが作業を終え、横に退くと待ちかねたように魔獣は再びキャロンに覆い被さる。

「ああ、……ラモー様……きてえ……」

キャロンの期待の視線を浴びながら、魔獣のペニスでキャロンの花卉はなびらに頭を埋めると、細かな振動を始める。クリトリスや花卉ラビアが振るわされ、悶もたえるキャロン。

「ひっ……、ああああああああっ！」

ペニスのヴァイブレーションがもたらす快感にやがてキャロンの女陰から潮が吹き出す。それを合図としたかのように虫の羽音のような音を立てながらペニスが膣内なへと侵入していき、最深部へと達するとキャロンの子宮をその振動で震わしはじめる。

「ああっ、いやああああああああん！ ああああああんっ！」

キャロンは新しい昂揚感こうようかんに打ち震え、縛しましめられた手足は強張りこわばり、痙攣けいれんする体はだらしなく潮を吹いてしまっていた。

キャロンの胎内なかでは激しく振動する亀頭からスルスルと細い精管が生え出すと、子宮口ポルチオをこじ開け子宮へと挿入した。

「ひっ……いやあああっ！」

何か体が奥へ／＼と入り込んでくる気持ち悪さに悲鳴を上げるキャロン。

プツ……ジュルジュルジュル

「はひっ、うっ、あああああああああっ！」

子宮に直接射精される初めての感覚に悲鳴と嬌声の混ざった声が王の間に響く。

「あああ……」

魔獣が椅子から降りると、キャロンから引き抜かれたペニスからは黒い精液が滴<sup>した</sup>っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い息がおさまり、「もう終わったの？」という表情をキャロンが見せた瞬間……、

「ひぐっ、ひっ……あああああああっ！」

子宮を中心に強烈な快感がキャロンに襲いかかる。

「ああっ！ ああああんっ！ ああああっ！」

月明かりで白く輝くキャロンの裸体、その下腹部にはどす黒い紋様が浮かび上がっていた。

短い間隔で何度／＼もオルガスムスを迎えビクビクッと体を反らすキャロン。

「はああああんっ！ ああああああっ！ いやあああああっ！」  
 キャロンのクレバスからは間欠泉のように潮がほとほと逆り、ピチャピチャと床を濡らして  
 いく。

「あああん！…いやあああああっ！ ああああああっ！」

光の柱の中で絶頂の嬌声を上げ続けるキャロンを黒騎兵達が微動だにせず見つめてい  
 た。

「ああああっ！ ……もう……だめ、っ……いやああああっ！ ……あああっん！」

キャロンはいつたい何度絶頂を迎えただろうか……いや、それは常時オルガスマスの状  
 態に置かれていたのかも知れない。

「はあ、はあ……はあ……」

津波のように押し寄せるオルガスマスから解放され、ぐったりとするキャロンであった  
 が、新しい快樂の世界を垣間見て多幸福感に包まれていた。

枷かせが外され、キャロンは椅子から降ろされる。強烈な快感に痺れ、足下あしもとが覚束おぼつかない彼女  
 を黒いローブ達が手助けし、ラモー・ルーの前にひざまず跪かせる。

いつの間にか魔獣から人の形へと戻ったラモー・ルーがキャロンのベールを取り、代わ  
 りに彼女の頭に漆黒の冠を載せ、続いて漆黒のケープをかける。

「さあ、こちらへ来るのだ」

キャロンの手を取り、玉座の壇に招き上げるラモー・ルー。

壇上にラモー・ルーと並び立ったキャロンは、自分が場違いな所にいる気がしてモジモジとしていた。

「見よ、今ここには我が軍団の全黒騎兵が集<sup>つど</sup>っておる……」

ラモー・ルーが玉座の前に整列した黒騎兵達を指し示す。

「今日よりこれらは我が妃キャロン……お前の手勢でもある」

黒いローブが声を張り上げ、宣言する。

「皆の者、今宵ここにキャロン王妃が誕生なされた！」

ガシャン！ ガシャン！ ガシャン！

整列した黒騎兵達が剣で盾を銅鑼<sup>どら</sup>のように打ち鳴らし、その音が塊<sup>かたまり</sup>となって夜<sup>シヤドル</sup>の地に轟いていた。

契りの儀式から三日後……、

自室のバルコニーから夜<sup>シヤドル</sup>の地を眺めるキャロン。

「キャロン様、お部屋にお戻りください。病み上がりの体に外の風はまだ早すぎますぞ」

キャロン付きの従者となった黒いローブが部屋へ戻るよう促す。儀式の激しさからか、キャロンは二日間微熱を出し、寝込んでいたのだ。

「だって、この方が気持ちいいんだもの」

そう言うや否や、キャロンはバルコニーの手すりの上に飛び乗ると両手を広げバランスを取りながら綱渡りよろしく歩きはじめる。従者の前を張りの良い尻がプリプリと揺れていく。

キャロンはバルコニーの角まで来ると立ち止まり、胸を反らして深呼吸。夜の地シヤドルの風が彼女の体を撫でていく。

「……うーん気持ちいい」

「キャロン様！」

従者の語気が強まる。

「分かったわよ……うん？ あれに乗っているのは……女の人……？」

城から飛び立っていくフライングマシンの編隊に目を凝らすキャロン。

「あれはユリア王女を連れていく部隊です」

「ユリア王女様をどうするの？」

キャロンが表情を曇らせる。

「ラモー様の命で、ユリア王女を昼ヒユウの地チに帰すのです」

「そう……よかった」

キャロンはほっと胸を撫で下ろすと、軽やかに手すりから飛び降りた。

従者の眼前で彼女の二つの乳房がプルプルと弾んだ。

「ところでキャロン様、ラモー様から頂いた御召物はどうしました？」

儀式の後、キャロンには妃の服が与えられていた……とはいえ、それは体が透けて見えるような薄衣で、裸でいるのと殆ど変わらなかつた。

「ラモー様はこちらの方が好みだと思つて……うふっ」

素裸のキャロンはバルコニーの手すりに色っぽくもたれかかると、指で太ももから乳房へと自分の体のラインをなぞつた。

「そうですか。では早くお部屋にお戻りください」

従者は無機質に答えると再び部屋へと促す。

「……なによ、もう！」

渾身のイケてるポーズを全否定された気がして、ふくれっ面になるキャロンだつた。

## ユリア王女の帰還

太陽が昇らない夜の地では最早日数を数える事がライケには出来なくなっていた。

「あれから幾日経ったんだろう……、ユリア王女様は無事なのだろうか……」

ユリア王女救出隊からはぐれたライケは隊への合流は諦め、単独でラモー・ルー城へ向かっていた。

闇雲に隊を探して森の中を彷徨うよりも、隊と自分の目的地は同じ、いずれ合流できるだろうとの判断だったが、血気盛んな若者の考え、たった一人で多くの魔物が彷徨くデイルンの森を踏破するのは自殺行為に等しかった。

しかし、ライケは三つの幸運に恵まれていた。ひとつはリバースの剣を二振り、父親の形見の長剣とルークから託された戦斧を携えていたこと。遭遇する魔物を倒すことには苦勞しなかった。二つ目は森の中で偶然にもフライングマシンを見つけたこと。何故か分からなかったが、フライングマシンは隠すように置かれていた。これによって、広大なデイルンの森と瘴気が沸く毒沼を突破することができた。三つ目はここ数日、何故か黒騎兵に遭遇しなかったこと。今居る荒涼とした岩石砂漠ではフライングマシン共々身を隠す

場所が少なく、魔物と違い練度の高い黒騎兵達相手にいかな伝説の剣を持っていようと、戦いを挑むのは分が悪かった。

そして今、四つ目の幸運がライケに訪れていた。

剣のようにそそり立つ巨石の陰に身を隠し、小休止していた時だった。向こうからフライングマシンの編隊が近づいてきていた。望遠鏡で様子を探ったライケは思わず「あっ！」と声が出てしまった。なんとそのフライングマシンの一騎にユリアが載せられていたのだ。黒騎兵は四騎、一人で向かっていくには死に行くようなものだったが、ライケは千載一遇のチャンスに掛けた。頭上を編隊が通り過ぎた瞬間、ライケはフライングマシンを急上昇させ、彼等の背後に躍り出ると、瞬く間に三騎の黒騎兵を切り伏せ、ユリアを載せた最後の一騎に斬り込む。……がしかし、背後の異変に気付いた先頭の騎士はライケの奇襲を寸前で受け止めた。

ガキーン！ ギギンッ！

二つの刃が何度も切り結ぶ大きな音が夜の空を震わし、二騎のフライングマシンはクルクルと踊るように降下していく。不時着同然に地上に着陸すると、二人の戦士が飛び降り、激突する。

「ユリア王女を返してもらおう！」

「昼の地の者か？ 何故このような場所に……まあよい、切り捨てるだけよ」  
黒騎兵に比べ一回り大きい騎士。その体に似合わず冷静で冷たい声に総毛立つライケ。  
「トオーッ！」

ライケはその恐怖を振り払うかのように気合いを込めて剣を打ち込む。

二人が何度も何度も撃ち合ううち、体格的に劣勢のライケは大きな岩へと追い込まれ、岩を背に防戦一方となっていた。

騎士が放った重い一撃が、受け損ねたライケの肩にめり込む。

「ウゲッ！」

「死ね！」

騎士が体勢の崩れたライケに止めを入れようとしたその時、ライケの剣の柄に彫られたラル王家の紋章が月の光を反射し、騎士の目を眩ませ剣筋に迷いを生じさせた。

「クッ！……」

ライケはその一瞬の間を見逃さず、腰に下げた戦斧を騎士の脇腹へと叩き込んだ。

「ゲオッ！」

鮮やかな紅い鮮血が吹き上がり、よろける騎士の頭をライケは兜ごと剣で貫く。

「カハッ！……」

それまでの激しい戦いが嘘のようにゆっくりと騎士が倒れていき、……ドウツ、という地響きを残し、騎士の巨軀きよくが大の字に地面に横たわる。

フライングマシン影から二人の戦いを見ていたユリアが近づいてくる。

「私を昼ひるの地ちへ帰かえそうとしていたのに、哀れなドロス。でも、彼と帰る方が誰も怪しまないでしょう……」

小さく呟くユリア。騎士の骸むくろを見下ろす彼女の瞳が紅く輝いていた。

ライケが王女の前に恭うやうやしく跪ひざまずく。

「姫様、お助けに参りました。」

ドロスに向けていた冷淡な顔がすっと消え、安堵の表情を浮かべるユリア。

「ああ、ライケ！ ああ、助けに来てくれたのですね」

ユリア王女が掠さらわれてから三ヶ月以上が経っていた。

送り出した救出隊も音信不通となり、王家唯一の生き残りを失ってしまったという絶望にラルの国は包まれていた。

しかし、ユリア王女の帰還でそれまでの雰囲気は一転、人々は大いに沸き立った。そして、その熱狂は「ラモー・ルー討つべし」という民意へと暴走していった。それに圧おされ

る形で重臣達の会議でも「ラモー・ルー討伐」の決定が成されようとしていた。

「今度の一件で私の為に何人の衛士達を失ったのですか？ 先の戦いでも多くの犠牲を出しました。私はこれ以上、民の命を失いたくはありません」

ユリアのその言葉で冷静さを取り戻した重臣達は無謀な戦いは取りやめとした。さらに王女の提案で国境警備を厳重にし、ゴモロス神殿を含め、大峡谷から夜の地側<sup>シヤドル</sup>への立ち入りを禁止する決定がされた。

ユリア王女救出で一躍英雄となり、行方不明となったマリオ隊長の後任として、衛士部隊長に大抜擢されたライケ。彼は今、王女救出の報告と預かった戦斧を返しにキャロンの村を訪れていた。

「この戦斧のおかげで、王女様をお助けして還ってこられました。」

「そうか、役に立ててなによりじゃ。」

王女の帰還に国中が喜びに包まれているというのにルークは悲しそうな顔をしていた。

「そういうえば、キャロンは元気になっていますか？」

「……キャロン……キャロン……おとお、」

嗚咽<sup>おえつ</sup>が込み上げ、涙を流しはじめるルーク。

「彼女がどうかしたんですか？」

ルークの話によれば、キャロンは日課の山菜採りに行ったきり帰って来ない。ずっと探してはいるが、手掛かりすら見つからず、もう二ヶ月になろうとしているという。

「……そうですか、キャロンが。しかし、諦めるのは早いです。まだどこかで」

「山菜は国境の向こうで採っておったんじゃ！ ……国境は封鎖されてしまった。これからどうやって探せばいいんじゃ！」

弱々しくライケに掴みかかるルーク。

「それに帰ってきたキャロンの翼キークラには刀かたなき疵があつた。黒騎兵に襲われたんじゃ、もう生きてはおるまい、おうおうおうおお、」

感極まり、その場に泣き崩れるルーク。ライケはそっと寄り添い、号泣する老人をなだめる。

「おう、おう……キャロンは……唯一の、唯一の……ううっ、おおおお！」

「？ キャロンは唯一の……なんですか？」

ライケはルークの言いい様がまう気になり、思わず問うてしまっていた。

「……あ、いや……キャロンは、……キャロンはたった一人の孫娘なんじゃ……たっ、た一人の……な」

今までの感情の昂<sup>たか</sup>ぶりが嘘のように鎮まったルークが涙を拭いながら立ち上がった。

「……ライケよ、その戦斧はお前が持っておけ、その方が持ち<sup>あ</sup>主<sup>い</sup>も喜ぶ」

肩を落としたルークが家の中に入っていき、パタンと静かに扉が閉められる。

「……ルークさん」

ライケは閉ざされた扉の前で立ち尽くすしかなかった……

第三部

二人の女王

## 異変

ラモー・ルー城から一騎のフライイングマシンが飛び立っていく。城の周りを飛び交う魔物達は従者が乗ったフライイングマシンなど気にも留めない。

城から十分に離れた頃、従者はキョロキョロと回りを見渡す。すると黒騎兵を乗せた二騎のフライイングマシンがグングンとこちらに迫ってきたかと思うと、退<sup>ど</sup>けとばかりに乱暴に従者の横をすり抜け、城の方向へ猛スピードで飛び去っていく。黒騎兵達が点になるまで見送った従者は少し高度を上げ、再び辺りを確認する。

「このあたりならいいよね……」

フードを上げると黄金色に輝くポニーテールが溢<sup>あふ</sup>れ出した。フライイングマシンに乗っていたのは従者のローブに身を包んだキャロンだった。

「ふう、良い風」

二、三度首を振ると気流のヘアブラシがポニーテールの流麗な流れを作り、それはフライイングマシンが金色の軌跡を描いて飛んでいるように見えた。

キャロンが前身頃の留め具を外すと、忽<sup>たちま</sup>ち風がローブの下に隠されていた彼女の裸身

を露わにした。

キャロンにとつて裸でいる事はすっかり当たり前になつていた。しかしマリオの一件で  
 今後もよこしま邪な考えを起こす者が現れるとも限らない、と考えたラモー・ルーは、彼女が城  
 の外に出る時にはローブを着て肌を人目に触れさせないよう命じていた。

「ラモー様の言いつけだけど……これ気持ちいいのよね、あはっ」

フライングマシンの上に立つと両手を広げ、全身に風をまと纏うキャロン。

野外セックスでラモー・ルーに何度か城外に連れ出された際、空を飛んでる時の少しひ  
 んやりとした風に素肌を晒す気持ちよさを知ったキャロンは、時折一人で空の散歩を楽し  
 んでいたのだ。

「ああ、ほんと気持ちいい、ラモー様とのエッチの次くらいだけど……あつやだ、あた  
 しまったら！」

無意識に口を衝いて出た自分の言葉に頬を赤らめるキャロン。

その気恥ずかしさを紛らわすかのようにキャロンは機体を大きく宙返りさせ、その時、  
 操縦桿を握った左腕の腕輪が優しく煌きらめいた。

「……」

水平飛行に戻ると、キャロンは腕輪を月光にかざ翳し、じっと見つめる。

母の形見の腕輪。ラモー・ルーに取り上げられていたが、魔王の妃となったキャロンへ還かえされていた。

「あたしがラルの王女だったなんて」

ラルの王族である証あかしの腕輪。

「ユリア様は王女として昼ミユウの地ツに帰された。それで良かったのよ。今更王女様になるなんてあたし出来ないわ」

ラルの王女が実は自分であったこと、そしてユリアは替え玉だったことをキャロンは知らされていた。

「それに、あたしがここに居ることでもラモー様は昼ミユウの地ツを攻めることはしなくなった。これでいいのよ、みんなが平和に暮らしていければ……ごめんね、おじいちゃん……」

遙か遠くに見える昼ミユウの地ツをしばらく眺めた後、フライングマシンの機首をラモー・ルー城へ向けるキャロン……すると突然、夜シヤドルの地特有の湿気と熱気を持ったねっとりとした空気の塊がキャロンの体を足先から上半身に向かって撫でるように吹き抜けていった。それは身も心も夜シヤドルの地の住人になったキャロンを歓迎するかのようであった。

「ああんっ……」

不意打ちの愛撫に反応したキャロンの指が彼女のクレバス目指し滑り落ちていく。彼女

の下腹にはラモー・ルーの妃である淫紋しるしが浮かび上がっていた。

ラモー・ルーの居室――

鏡使いが操る物見の鏡には、ゴモロス神殿が映し出されていた。

「先程の黒騎兵の報告のとおり、神殿とその周辺は濃い霧に包まれています」

「ふむ……」

巨大な寝台の上で胡座するラモー・ルー。膝の上には魔王の肉棒に貫かれた栗色の髪の少女。

「……サラよ、何か聞いておらぬか？」

ラモー・ルーがサラの乳房を弄まさぐり、時折乳首をきゅつとつねる。

「ああ……んっ……過去このような現象があったとは……聞いた事がありません……」

「神殿中を調べ尽くし、巫女であるお前をも手に入れたと言うに、まだ何か秘密がある  
 というのかゴモロス神殿は……」

ラモー・ルーはそのいきり立つペニスでサラを背後から突き上げる。

「ああっ、ううん……はああん……」

魔王の膝の上で悶もたえるサラの臍へその下には黒い淫紋が浮かんでいた。それはキャロンが契

りの儀式で刻まれた淫紋と同じ物。彼女が昂たかぶっていくにつれ、紋様が濃くなっていく。緩急のついたピストン運動で少女の体を弄もてあそびながら、考えを巡らす事にラモー・ルーは心地よさを感じていた。

「ラモー様」

「……なんだ？」

悦楽の時を邪魔をされ、不機嫌そうに応こたえるラモー・ルー。その苛いら立ちがサラにも向けられ、不意に乱暴に胎内を抉えぐられたサラは悲鳴に似た嬌声を上げる。

「キャロン様がお越しです」

「ふむ、キャロンが？ ……入れ」

扉が開くと弾むステップでキャロンが入ってくる。

「ラモーさま……あっ……」

「おお、キャロン、どうしたのだ？」

キャロンの前でも構わずサラを犯し続けるラモー・ルー。

「……っ」

同じ女性として辱はずかしめを受けている姿を見てはいけなと思ったキャロンは顔を背けた。

「フフフ、まだ紹介していなかったな。この娘はサラ」

ラモー・ルーが激しく腰を突き上げサラの体を跳ね上げる。

「あああっ、あああっ！」

牝<sup>めす</sup>の悦びの声に性的好奇心がくすぐられ、サラに視線を戻すキャロン。

「ゴモロスの巫女だった娘だ。おまえと同じく、わしと契りを交わした我が妃だ」

自分以外に向けられた「我が妃」という言葉にキャロンは心がキュツとするのを感じていた。

「……」

キャロンの動揺を見透かしているかのようにサラは脚を広げ、魔王との結合部分を見せてつけていた。

やがて、キャロンの中にサラに対する小さな嫉妬心が生まれ、性的興味だった視線はライバルを見るものへと変わっていった。

（エッチの最中でもあの娘の顔は端正<sup>たんせい</sup>でどこか神秘的で……、あの娘の胸はわたしより大きくて、形もよくて……、ラモー様の大きな両手が挿<sup>こ</sup>んでいるあの娘のウエストはあたしよりきゅっとしまっていて……、あの娘の脚<sup>こ</sup>はあたしより長くほっそりしていて……）  
しかし、サラを観察すればするほどキャロンのジェラシーは萎<sup>しぼ</sup>んでいき、それはいつの

間にか劣等感になっていった。

おす  
ほとほし  
牡の逆りが胎内に放たれると共に絶頂を迎えるサラ。

「ああっ、はああああん、」

ラモー・ルーは自分のものだと言わんばかりにペニスから精液を搾り取るようにサラは腰をくねらせていた。

初めて見た他人のセックス。ラモー・ルーとサラの激しいセックス。とてもいやらしくて、でも凄く綺麗なサラのセックス……キャロンは見とれてしまっていた。

ラモー・ルーは腕の中で果てたサラを寝台に横たえると、ぼーっと突っ立っているキャロンに近づき抱きすくめた。

「どうした？体が少し冷えているようだが……」

ラモー・ルーの掌てのひらがキャロンの背中を滑り落ち、尻をぐっと掴む。その刺激はサラに魅了されているキャロンの心をラモー・ルーへと引き寄せた。

「あんっ！」

「ふむ……また言いつけを守らずフライングマシンで出掛けたのか？」

「……だって、夜の地シヤドルの風は気持ちがいいから……きゅっ！」

「おまえにはまだまだ眠しつけが足りぬようだ」

ラモー・ルーはキャロンを放り投げるように寝台に押し倒すと彼女の白い太ももを左右に押し開く。無防備となったキャロンの秘裂に魔王のペニスが迫る。

「いやあ……いきなり……」

「何を言う、おまえの体はわしを待ちかねておるではないか、フッフ」

キャロンの下腹部にはすでに淫紋が浮かび上がっていた。

ラモー・ルーが亀頭でキャロンの陰唇を割るように撫でるとニチャリと潤うるんだ音を立て愛液が溢れだしてくる。

「ん、はああ……」

「そうれ、いくぞ」

前戯なしに挿入されたペニスはすんなりと最奥まで達する。

「あああっ！」

ラモー・ルーは鷲掴みにしたキャロンの腰へ激しくペニスを打ちつけ、その衝撃波がキャロンを淫欲の中に引きずり込んでいく。

「あん、あっん！ ああん！」

キャロンの淫紋はサラとは逆に彼女が昂たかぶれば昂たかぶるほどに薄くなっていた。

「これはどうしたことだ、キャロンに刻みつけた印しるしが……」

やがて頂点に達するキャロン。彼女の膣ヴァギナが射精を要求するようにギュウギュウとペニスを締め付けた。それに応えるようにラモー・ルーはキャロンの子宮に大量の精液を浴びせ掛ける。

「はあんっ……あああああんっ！」

「はあ……はあ……」

ベッドに横たわるキャロン、彼女に施された淫紋は完全に消えてしまっていた。

「我が印しるしが消えてしまうとは……」

「ラル王家の女子には代々ミュウの力が受け継がれていると聞いております」

サラがキャロンの膣口から流れ出す精液を指ですくい取り舐める。

「それがラモー様の力を退けてしまうのでしょうか」

「ぬう、わしの魔力に匹敵するほどの力とは……ならば、キャロンは伝説の剣士として

あの場に降臨していたというのか」

「ミュウの力を持つ者が伝説の剣士として選ばれても不思議ではないでしょう」

うっとりした瞳でラモー・ルーを見つめながらキャロンが花卉を開く。

「ああ……ラモー……さまあ……はああ……」

「まだ欲しいのか？　しようのないやつよフッフ」

ラモー・ルーの太い指がキャロンのザアギナ睦に差し込まれる。

「あっんんっ、はああん」

ラモー・ルーがくちゆくちゆと肉壺を搔かき混まぜる度、注ぎ込まれた精液が溢あふれ出してくる。

「印しるしがあるうとなかろうとおまえはわしの物、そうであろうキャロン？　フッフ」

「ああんっあっ、そうです、あたしは……あああんっ、あっあっ……ラモー様のものです……ああああんっ」

「フッフ、今や、伝説の剣士がわしの指で善よがっておる、愉快愉快……」  
ラモー・ルーは不意に指の動きを止める。

「ああんダメえ、やめないでえ……」

「……ふむ、ゴモロス神殿がミュウの力に反応し、伝説の剣士としてキャロンを選んだとするなら、今一度ゴモロスの神殿に連れて行けば、何かが起こるかも知れぬな」

ボディチェーンが鳴らす軽やかな音を纏まとって回廊を歩いて行くキャロン。彼女の行く手から従者を従えたサラが歩いてくる。

「あっ、サラ様」

サラは巫女の衣装に似た服を着ていた。それは薄く透き通った生地で仕立てられており、その下には何も着けておらず、サラの豊かな乳房とその頂上にある桜色の乳首、淡い陰毛が透けて見えていた。

(ラモー様に頂いたものかしら……)

キャロンは思わずサラの装いを見入ってしまった。

「ウフフ、サラでいいわよ。それにしても……」

サラもキャロンを見つめ返す。

サラに対してキャロンの方はといえば、素肌チヨーカーに首飾り、腕輪チヨーカーにアンクレット、ボディチェーンチヨーカーを身に付けただけ……。

「かわいくてエッチな体をしているわね。妬ヤげちゃうわ、ウフフ」

「あうら……」

グラマラスなサラに比べ貧相な自分が恥ずかしくなり、両手で体を隠すキャロン。

「あら、女の子同士恥ずかしがることないのに、ウフフ」

「うら……」

「今からラモー様のお供？」

「そうです、では……」

サラから逃げるようにその場から立ち去るキャロン。

(ウッフ、忙しい子ね。私と違って囚とらわれてここにいるのに、朗らかさを失わないのはミユウの力を持つてるからかしら……)

キャロンを見送りながらサラはふと眩つぶやく。

「ゴモロス神殿は昼ミユウと夜シヤドルが出会あう場所……」

次の瞬間、サラはハツとした表情に変わり、元来もとた道を足早に戻っていく。

ラルの星に深く刻まれた大地の裂け目を埋めるかのように濃い霧が満ちていた。

「これ程まで霧が広がっているとは……」

眼下に広がる大渓谷の異変を望むラモー・ルー。フライングマシンを操る魔王の膝の上にはキャロンが座っていた。彼女もまた謎の霧をじっと見つめていた。

やがて二人の行く手にゴモロスの神殿が見えてくる。神殿の周辺はさらに濃厚な霧で包まれていた。まるで神殿が霧が吐き出しているかのように……。

大聖堂の破壊された天窓を抜け、フライングマシンが着陸する。エンジン音が静まると同時に、キャロンがひらりと降り立ち、その後にラモー・ルーが続いた。

「わしは神殿内を見て回ってくる、お前はここにおれ」

「はう」

頭からすっぽり被っていたフードを上げ一礼するキャロン。

ラモー・ルーを見送ったキャロンは手持ち無沙汰に大聖堂内を当てもなくウロウロと歩き始める。

やがて祭壇へ近づくキャロン。

「……」

祭壇を掌<sup>てのひら</sup>で撫でながらゆっくりと周りを一周するキャロンの脳裏にゴモロス神殿に墜落したあの日の記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>る……と同時に、ずいぶん昔の事のように感じていた。

次にキャロンは大聖堂の片隅に安置されている水晶鏡に歩み寄り、覗き込む。「鏡」とは言うものの、水晶鏡は六角柱状の結晶の塊で、そこにいくつものキャロンの顔が映り込み、それはどれも歪んでいた。

「あはっ、変な顔……」

顔の角度を変え、自分の変顔をあれこれ楽しんでみると、突然鏡に映る複数のキャロンの顔が一つにまとまり、前髪を掻き上げるとニコッと笑った。

「えっ……?」

鏡の前で呆気<sup>あっけ</sup>にとられたキャロンをじっと見つめる鏡の中のもう一人のキャロン。

鏡の中の少女の瞳が妖しく輝き、その鋭い眼光にキャロンは身動き出来なくなった。

……トクン……トクン……

そしてキャロンの体が強く疼<sup>うず</sup>き始める。

「あんっ、あ、あああ……、」

神殿内を見回り終えたラモー・ルーが大聖堂に戻ってくる。

「ふむ……神殿内では何も変化はないようだ。キャロンよ、城に帰るぞ」

フライングマシンの操縦席へ乗り込みながらキャロンを呼ぶラモー・ルー。

「……ラモー様」

キャロンの声に振り向くラモー・ルー。

彼女のローブがすると衣擦れの音を残し彼女の足下に落ちると、そこには天窓から差し込む淡い光のカーテンで目映く輝く少女の裸体があった。

キャロンはその体を祭壇に横たえると脚を上げ、ラモー・ルーを誘う。

「フフフ、どうした、欲しくなったか？ 城へ帰るまで我慢できぬのか？」

こくりと頷くキャロン。

「しよりのない妃だ、フフフ」

目を細め、ラモー・ルーは魔獣の姿へと変化すると祭壇の上のキャロンに覆い被さる。とろんとした虚ろな瞳でラモー・ルーを見つめるキャロン。

魔獣の下腹部から生えだしたペニスが祭壇の上の生贄を容赦なく餌食にする。

「はあっ！……ああっああん……っ」

キャロンの蜜壺ははすでに潤っており、前戯もなく侵入してくる魔獣のペニスを難なく

受け入れると、淫靡いんぴな音を立て始める。

「ああっ、ああん……っはああんっ」

キャロンはペニスを呑み込むように艶めなまかしく腰をくねらせ始めた。

ラモー・ルーの舌が少女の肌に唾液をすり込むかのような動きでキャロンの体を舐なめまわす。

「はああ……んんっ……んっつ」

キャロンが魔獣の首に腕を回すと、ラモー・ルーは舌をキャロンの舌へと絡からみつかせ、唾液を彼女の喉のどへと流し込んでいく。

「んんっ……むっ……ああむ……んん」

蕩とろけるような表情でラモー・ルーの唾液を飲み干しながらキャロンは両脚を魔獣の胴に絡める。

「んんっ……あたしの奥を激しく、んむっ、叩いて……ください……」

魔獣のペニスは彼女の肉襞をヌルヌルと愛撫するかのようなピストン運動を止め、ゆっくりと力強く少女の子宮口を叩き始める。子宮に杭を打ち込まれるような衝撃がキャロンに襲いかかる。

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ、あんっ、あんっ！」

(フッフ、なんと美しく淫みだらな姿を見せるのだ、我が妃は……)

ラモー・ルーは幼さの残る少女が淫欲を求め表情に魅了みりやうされていた。と同時に性欲を掻かき立てられた魔獣のペニスの動きが荒々しくなっていく。

突き破られそうなほど激しくポルチオを殴打される衝撃が子宮を震わせキャロンに快感を与える。その快感を逃すまいとラモー・ルーの胴に回した脚に力を込めるキャロン。

「ああっああっんっああああん！」

やがて少女の体がふるふると震え始め、いく気配を感じ取ったラモー・ルーはタイミン  
グを合わせて射精してやる。キャロンは膣な内に精液を浴びせられると、また違う悦楽の表情を見せる事をラモー・ルーは知っていた。

「っ、あっ……いつ、あっ……い、いつ、くうううっ！」

ラモー・ルーの熱い逆ほとほりがポルチオに激しく浴びせかけられ、膣な内が満たされていく  
感覚がキャロンをさらなるオルガスムスに誘いざなう。

「あっ、ああっ！ ああああーっ！」

「はあ……はあ……ん、はあ……」

祭壇の上に横たわったキャロンは目を閉じ、魔獣とのセックスの余韻に浸っていた。大

きく脚を開き、ラモー・ルーに見せつけるように晒された蜜壺からは彼女の乱れた息遣いに合わせてトロトロと精液が溢れ出していた。

そんなキャロンの蠱惑的な姿をしばらく鑑賞していたラモー・ルーだったが、ふと気付くと大聖堂の中には濃い霧が立ちこめていた。

「うぬう、なんだこれは？」

ラモー・ルーは周りを見回し、キャロンの方に再び目を向けると、霧が彼女を飲み込もうとしていた。とっさにキャロンの体を抱き上げるラモー・ルー、

「なに？」

が、魔王の手は空しく霧を掴んでいるだけだった。

「ばかな！」

両手で霧を掻き分けるが祭壇の上にキャロンの姿はなかった……

……祭壇の上で身を起こしたキャロンはそこにラモー・ルーが居ないことに気付く。

「ラモー様？ …… ラモー様あ！」

キャロンの呼びかけに答えるのは大聖堂の静寂だけ。

ラモー・ルーの姿を求め視線を巡らすキャロン。一緒に乗ってきたフライングマシンは

着陸した時のまま、そこにあった。

(ラモー様は神殿内にいるってことよね)

とりあえず神殿内を虱潰しらみつぶしに探そうと、キャロンは祭壇から降り、いくつかある大聖堂の出入り口の一つへと駆け出す……しかし、すぐに入入り口の前で彼女は立ち止まる。壁に掛けられた古ぼけた大鏡。それはラモー・ルー城内で見つけたあの不思議な鏡にそっくりだった。

「あの鏡、元々ここにあった物なのね……」

大鏡に映った自分の姿。そこに残されたラモー・ルーの紅い痕キスマークを指でなぞるキャロン。

「うふっ、刺青タトゥーみたい。……いやあん、こんな所までラモー様ったら」

獣姦あどとも言えるセックスの痕を辿っていくうち、体を這いずり回った魔獣の舌の感触が蘇よみがえってくるキャロン。

(ラモー様の事を考えると体が熱くなっちゃう……)

キャロンは再び尖り始めた乳首を指の腹で転がす。

「ああ、はふう………あんっ、今はダメ！ ラモー様を探さなきゃ」

湧わき出してくる淫欲に負けそうになる自分を戒いましめ、キャロンは神殿内の探索に歩き出した。

この大鏡にもラモー・ルー城にある鏡と同じく不思議な事が起きていた。キャロンが立ち去った後も鏡の中のキャロンはその場に座り込んでオナニーに耽っていた。やがて自らの指で軽い絶頂を迎えると満足げな表情で立ち上がり……するりと鏡の中から出てきたではないか。

神殿内でラモー・ルーを見つけれられず、再び大聖堂に戻ってくるキャロン。

「ふう、いったいどこへ行ったのかしら……」

額にうっすら浮かんだ汗を手の甲で拭いながら、何となく視線を向けた方向に床にぽっかりと口を開けている場所があることに気付くキャロン。

「……あんなの今まであったかしら？」

近づいてみると、そこには下へと降りる階段の入り口があった。

「ここを降りて行ったのかな」

階段の壁には等間隔に螢火ほたるびのような光の点が並んでおり、それは道標みちしるべのようにも見えた。誘われるように階段を降りていくキャロン。

「ラモー様……ラモー様、どこですか？」

魔王の名を呼ぶキャロンの声が空しく通路むなに木霊こだまする。

階段をしばらく降りるとキャロンは大きな広間に出た。そこは先<sup>さき</sup>までいた大聖堂そっくり同じ造りだった。しかし、そこは昨日建てられたばかりのように、大広間の中は磨かれており、美しく光り輝いていた。

莊<sup>そうごん</sup>嚴な雰囲気に息を呑むキャロン。

「なんなの、ここ？ ……なにもかも同じ？」

キャロンは大聖堂の中央、祭壇へと歩いて行く。その祭壇はキャロンの知っている物とは違い、側面に無数の穴と、上面には一つの穴が空いていた。

「……ううん、違うわ」

キャロンが無意識に出した手が祭壇に触れた瞬間、突然穴から触手が生えだし、彼女の体に絡みついた。

「きゃあっ！」

無数の触手は少女の体を軽々と持ち上げると、祭壇の上にキャロンの体を縛り付けた。

「きゃああっ、いやっ！」

触手の群れは逃げようと抵抗するキャロンを押さえつけながら、同時に彼女の性感帯を這いずりまわる。

「いやあ……だめえ……」

ラモー・ルーとの情事の残り火が燻<sup>くすぶ</sup>るキャロンの体は触手の愛撫に反応してしまい、たちまち彼女の抵抗が弱々しくなっていく。

脚に巻き付いた触手がキャロンの脚をM字に開脚し、別の触手が彼女のクレバスを<sup>ひろ</sup>拡げ、<sup>はんびら</sup>花卉が開かれる。<sup>ヴァギナ</sup>膣からは<sup>せんこく</sup>先刻注がれたばかりのラモー・ルーの精液が溢れ出し、祭壇に染みを作った。

「あああ……いやよ、やめてえ……」

無防備にされたキャロンの女陰を無数の触手が代わる代わるくすぐるように撫でていく。

「んんっ……はあん……はあ、ああ……」

程無くキャロンの唇からは甘い吐息が漏れ始め、その声に誘われるように祭壇の上面に空いた穴から一回り太い触手が……ペニス状の触手が生えてくる。ペニスの形とはいつても雁首はびっしりと小さなイポイポで覆われ、胴体部には幾本ものポリープ状の突起があった。

「あああ……」

目を背<sup>そむ</sup>けたくなるような醜<sup>しゆうあく</sup>悪な形をした触手をキャロンはじっと見つめていた。今からされる事への期待が彼女の中で膨らんでいたのだ。

ペニス状触手がゆっくりとキャロンに侵入していく。

「あああん……」

肉壺に残っていたラモー・ルーの精液が潤滑剤代わりとなってペニス状触手が易々とキャロンの膣内へと収まっていく。

「あああんっ！」

最深部へと達したペニス状触手が往復運動を始める。触手のイボイボと突起が肉襞に擦りつけられ、それがキャロンに新たな快楽を与えていた。

「ああん！ あああっん！ あああんっ！」

触手の動きに身を委ねたキャロンの喘ぎ声が淫らかな賛美歌となって大聖堂に響く。

魔物に犯され快楽を得る背徳な行為に耽りながら、ふと祭壇の傍らに誰かの気配を感じるキャロン。

「はああ……ラモー様……？」

てつきりラモー・ルーがそこにいると思えば視線を向けたキャロンだったが、なんとそこには自分に瓜二つの姿をした少女が立っていた。

「えっ？」

少女は啞然とするキャロンを無言で見つめたまま、微笑んでいた。

……ズンッ！ 触手ペニスが余所見よそみをするなどばかりに子宮を乱暴に突き上げ、キャロンは一際大きな嬌声を上げる。

「ああっ！ あああああん！」

複数の触手がキャロンの唇に殺到し、彼女の舌に絡みつく。

「んんんっ、んぐっ、うんんん！」

先さきまでリズムカルに動いていたペニス状触手は傍若無人に腔内で暴れ始め、キャロンを淫欲の底無し沼へと引きずり込んでいく。ラモー・ルーによって躡しづけられた淫らな体は与えられる快楽を貪欲に求め、彼女の思考を奪い去ってしまう。

蠢うごめく触手の群の中にその体を埋め、キャロンは恍惚の表情を浮かべていた。

「はあっ、ああっ、んっ、あああっ、き、て……っ」

触手に觸なぶられ続け淫欲の沼を漂っていたキャロンの体が絶頂とくの刻を迎え震え始める。それに合わせたようにペニス状触手はキャロンの胎内へドブドブと精液を注ぎ込んでいく。

「ああああーっ！」

キャロンの腔内なに放たれた精液が肉襞にくひだに沁み込んでいくと同時にキャロンの体に暴力的な快感を与えた。

「いっ、やああああーっあああ……」

ラモー・ルーにも与えられたことのない快感の律動が嵐となって全身を駆け巡り、キャロンの体は激しく痙攣けいれんしていた。

「っあ……くあっ、あっ、っ、っ……」

やがて体が張り裂けそうなほど荒れ狂うオルガズムスに耐えきれず、キャロンは意識を失ってしまった……

神殿内をくまなく探すも、ついにキャロンを発見できず再び大聖堂に戻ったラモー・ルーはそこで魔王らしからぬ叫び声を上げてしまう。

「……キャロン！」

なんと祭壇の上にキャロンが横たわっているではないか。

脱兎の如く駆けよるラモー・ルー。気を失ってはいたが、キャロンの無事な姿に安堵したラモー・ルーは、彼女の体を抱き上げフライングマシンに跨またがると乱暴に機体を急上昇させた。

「危うく我が宝を失うところだった……」

ゴモロス神殿を見下ろしたラモー・ルーは愕然がくぜんとする。

「これはどういうことなのだ……？」

大峽谷を覆っていた霧がすっかり消えてなくなっていたのだ。

ラモー・ルー城――

「ラモー様、キャロン様が目を覚ましました。お体には異常はなく、気分も悪くないそうです。」

「うむ、そうか……今後、キャロン一人で城外を出歩かせてはならぬ。あのじゃじゃ馬娘のこと、ゴモロスの神殿に近づくやも知れぬからな。」

「御意」

「ゴモロスの神殿……あそこはまだ油断してはならぬ場所だ」  
ラモー・ルーは吐き捨てるように言った。

お伽噺ときばなし

ラモー・ルー居室――

ベッドに横たわるラモー・ルーと、その隣に腰掛けたサラをユラユラと揺れる燭台の灯りが照らしていた。

「ラモー様、ゴモロス神殿の霧について書かれた書物があつたのを思い出しました」

「なんと！　して、その手に持っているのがそうなのか？」

思わず身を乗り出すラモー・ルー。

「はい、信徒の子供達の為に書かれた古いお伽噺ときばなしです」

「お伽噺ときばなしだと？　フハハ！　サラ、お前も冗談を言えるようになったのか？」

茶化すラモー・ルーを無視し、サラは手にした本を開き、読み始める。

「……まあよい、寝物語に聞いてやろう」

――昔々、ゴモロス神殿が霧に包まれた。一人の神官がその霧の中に迷い込み、気付くと見知らぬ場所に立っていた。神官は誰かに助けを求めするため、歩き始める。

すぐに神官は、自分のいた世界とは違う所に来てしまった事に気付いた。なぜならそこは太陽が昇らず、ずっと夜が続いたからだ。

何日も旅を続けた神官だったが、只の一人も人間に会うことはなかった。しかし彼は諦めず、誰かいないか探し続けた。

長い旅の果て、神官はゴモロス神殿にそっくりな神殿に辿り着く。彼はそこで初めて人に出会う。彼女は「夜の女王」と名乗り、魔法で神官を元の世界に帰してくれた。――

「おしま〜……」

読み終えたサラが顔を上げる。

「フッ、たわいない話だ……しかし興味深い。サラ、もう一度、夜の女王が神官に授けた予言の行くだけりを読んでくれ」

サラがページをめくる。

「……四つの月が並ぶ時、ゴモロス神殿はミュウとシャドルが出会った場所。静かなる時リバースの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる……きゃっ！」

サラをベッドに乱暴に押し倒すラモー・ルー。

「四つの月が並ぶとき伝説の剣士がゴモロスの神殿に降り立ち悪を討つだろう……」

ではないのだな」

ラモー・ルーがサラの体を申し訳程度に覆った薄衣を剥ぎ取っていく。サラはうつとりとした瞳で魔王の手の動きを追っていた。

「このお伽ときばなし噺は高位の神官の手記を元にしたと伝えられています。故に予言と違っていても書き改める事は憚はばかられてきたのではないでしょうか」

「手記を元に……実際にあった話だというのか」

ラモー・ルーがサラの太ももに手をかけると、彼女の両脚はすっと開かれ、魔王の眼前に真一文字に合わさった秘貝が顔を出す。

「伝説の剣士の予言もそれが書かれていた碑文は遙か昔に失われたといえます。長い間、口伝くでんのみで伝えられたもの、正しく伝わっているかどうか……んっ、ああっ、」

ラモー・ルーの太い指がサラの花弁はなびらを左右に押し拡げ、ヴァギナ陰がパクパクと息づく様が丸見えにされていた。

「ああん……」

ラモー・ルーの舌が味見をするように一舐め。

「フフフフ、お前の蜜、以前にも増してより香り立つようになってきた」

サラの蜜壺にむしゃぶりつくラモー・ルー。

「っ、はああああっ！」

大浴場、ラモー・ルー城にも湯が張られた普通の浴場があった。それは魔王の慰み者なぐさとして掠さらわれてきた女たちの為に造られたものだったが、今はラモー・ルーの妃専用の浴場となっていた。

「ふう、ごくらくく」

大きな浴槽の中で大の字に伸びをするキャロン

「あら、先客がいたのね」

「！」

声のする方に顔を向けるとそこにはサラが立っていた。

「あっ、サラ様……」

サラにだらしなな格好を見られてはつが悪そうにうつむき畏かしこまるキャロン

「様、はやめてって言ったじゃない」

「……じゃあ、サラさんで」

改めてサラの方に視線を戻したキャロンは思わず彼女の体を見つめてしまう。

「うふふ……綺麗でしょ？」

サラは誇らしげにその肌に残された愛撫キスマークの痕を指でなぞって見せた。

一度に十人以上が入れる程の広さのある浴槽だったが、サラはキャロンの隣に座った。

「ゴモロス神殿では大変だったみたいね」

「それが……あたし、気を失っていて覚えていなくて」

「そうなのね……でも、神殿で気絶するような事って何してたの？」

表情からゴモロス神殿での経緯いきさつをサラは全て知っているのだろう。もちろん、そこでラ

モー・ルーとセックスしたことも。

「それはえつと……その……」

キャロンはポツと頬を赤らめる。

「うふふふ」

サラが悪戯いたづらっぽく微笑む。

「ううう……」

これ以上、この件に触れられたくないと思ったキャロンは慌てて話題を変える。

「……あの、サラさんも掠さらわれてここに？」

「えっ……」

サラのはっとした表情に「しまった」という顔をするキャロン。

掠さらわれてきてるのは解りきってる事で、それを聞かれて思い出したくない事も思い出すだろうし、なんて無思慮な質問をしてみましただと後悔したのだ。

「ああ、そうね、私さって掠さらわれてたのね……」

しかし、サラはまるで他人事のように答えた。

「でも……そうだけど、そうじゃないの」

「……？」

きよとんとするキャロン。

「私は生まれてから巫女でしかなかった。でもラモー様は女として扱ってくれた。だから私はここに……」

サラは遠くを見るような目で語り始める。

## サラの過去 I

ラモー・ルーの軍団がラルを襲った時、女神の力の秘密が隠されていると伝わるゴモロス神殿も襲撃された。数人の神官達は唯一人ゴモロスの血を引く巫女を連れ、辛くも落ち延びる事に成功した。

その後、ラモー・ルーは七人の衛士達によってブレイブに封印され、ラルには平和が訪れた。しかし、魔王の復活を怖れた神官達はゴモロス神殿を放棄し、当時一歳だった巫女と共に隠遁生活に入った。

それから十四年近くの時が流れ、朽ちていくゴモロス神殿と同様に、神官達の記憶も人々から忘れ去られていった。

窓もなく石積み壁の壁に囲まれた部屋、そこはまるで石牢のようであった。

二人の男達が少女に沐浴をさせていた。男達は無表情に少女の体を拭く。

ほどよく膨らんだ乳房、細く締まったウエスト、形の良いヒップ、クレバスには淡い茂み……少女の体はすでに性的魅力を漂わせていた。

しかし、男達はまるで物を洗っているかのようには少女の体を扱い、少女の方も恥じらうこともなく、彼等に体を触らせていた為、淫靡いんびさとは無縁の無機質な雰囲気ふんいきが漂っていた。

「巫女よ、明朝にここを立つ。準備をしておくように」

「はう」

ラルの国の国境近くに多く建てられた物見の砦とりではラモー・ルーの脅威が無くなったことにより、そのほとんどが使われなくなり廃墟はいことなっていた。

その捨てられた砦とりでの一つがある夜、突然崩壊した。近くの村の人々は老朽化の結果であろうと気にも留めなかった。ただ、崩れた砦とりでの前で茫然自失に立ち尽くす数人の男達がいたという……。

ラモー・ルー城、石牢の天井から垂らされた無数の鎖。その鎖に四肢を繋がれた少女。その着ている衣装か、それとも少女自身からだろうか、縛いましめられているとは言え、彼女からは神秘的な雰囲気ふんいきが漂っていた。

「この娘がゴモロスの巫女。十三年前のあの時、我が手にあれば結果も違ったものを

……」

忌々いまいまいしそうにラモー・ルーが呟つぶやく。

「苦勞しましたぜ、転々と隠れ家を変える上に、匿かくまっていた神官達は昼ヒの地チの住人とほとんど接触もせず、足取りを掴つかめたのも奇跡に近く。あげくに襲撃を事故に見せかける偽装、金がいくらあっても足りやしない……」

「放棄された砦の地下室に匿かくまわれていたとのことですよ」  
マリオが滔とうとう々と語る苦勞話を遮り、ドロスが手短かに説明した。

「どれ、巫女殿の姿をよく見せてもらおう」

ラモー・ルーが鎖に吊された少女の胸のあたりに手を翳かきした瞬間、彼女の服が溶け落ちていくように消えていった。少女の裸身が、それは病的なまでの白い肌が男達の前に晒される。

「……」

少女は辱はずかしめに騒ぐこともなく無言のままだった。

「おほっ、」

マリオの表情が好色なそれに変わる。

「どうした？ この娘、悲鳴も上げぬ、暴れもせぬ……」

少女の悲鳴を楽しみにしていたラモー・ルーは予想外の反応に不愉快そうに言った。

「なんでも十三年前の戦いの時に落ち延びて以降、ずっと幽閉同然に育てられていたよ

うですぞ。教えられた事と言えば巫女として必要なゴモロスに伝わる知識のみ、文字通りの箱入り娘でさあ。今から何をされるか分かっていないんでしょう、グヒヒヒ」

少女を視姦しながら嫌らしい笑いをするマリオ。

「フン……」

ラモー・ルーの手が少女の首、乳房、ウエスト、尻、太ももへと流れるようにまさぐつていく。それでも少女は無言のまま。むしろ興味深そうにラモー・ルーの行為を見つめていた。

「巫女殿の美しい声を聞けぬのはつまらぬが、この手触りは極上……大義であった。ドロスよ、マリオに褒美を取らせよ」

「はっ。マリオよ、我について参れ」

「……」

しかし、マリオはニヤニヤしながら少女の裸体を眺めるばかり。

「早くしろ、マリオ！」

「へへへ」

ドロスに急かされ、名残惜しそうに石牢を出て行くマリオ。鉄の扉が閉じ、石牢内には燭台の蝋燭ろうそくが燃える音だけ。

「名はなんというのだ」

「……サラ」

ラモー・ルーの指がサラの陰裂を撫なでる。

「はうっ、」

両脚を強く閉じ、少女は初めてラモー・ルーを拒絶する。

「サラよ、お前にはゴモロス神殿の事をいろいろ聞かねばならん。素直に答えれば悪い扱いはせぬ。牝めすとしての極上の悦びを与えてやろう、フッフ」

ジャラジャラという音と共に鎖が巻き上げられ、サラの両脚が大きく開かれた。

ニチャリ……

ラモー・ルーは舌なめずりをする、サラの花弁はなびらを押し広げ値踏みする。

「美しい色をしておる、フッフフ」

サラと名乗った少女はラモー・ルーの行為をじっと観察していた。

「……なにをしてるの？」

「ほんとうに何も分かっていないのか？ ……哀れな娘だ。今からおまえの体を女にし

てやるのだ、フッフ」

「……私を女に？」

そう言ったサラの声は少しうれしそうにも聞こえた。

「そうだ。何も知らぬおまえの……この体をな」

「んぐっ」

ラモー・ルーの太い舌がサラの唇を割って入り、彼女の舌に絡みつく。

「んんんっ、んん……っ！」

多量に流し込まれてくるラモー・ルーの唾液を窒息すまいと必死に飲み込んでいたサラだったが、口の中をヌメヌメしたものがたうち回る生まれて初めての感触に夢中になって舌を動かしていた。

「……んっぐはっ！ ……はあはあはあ……」

ラモー・ルーの舌から解放され、半ば窒息状態だったサラは新鮮な空気を吸おうと荒い息をしていた。

「巫女の唇の味、悪くなかったぞ……次にここはどんな具合だ？」

呼吸が乱れ、上下しているサラの乳房にラモー・ルーの鞭むちのように長い舌が絡からみつき、舐ねぶり始めた。

「グジュルジュル、ジュルツ、ジュルジュル、

「あっ、あっ、あっ、」

ラモー・ルーの右手がサラの左の乳房を揉みしだき、時折、乳首を親指と人差し指で潰すように摘まむ。

「ああっ！ ああ……ああっ！ ……あああんっ！」

「グジュルジュル……グフフ、やっとおまえの鳴く声が聞けたな。ジュルジュル……、良い声で鳴くではなか。もつと声を聞かせてくれ……ブジュジュル、」

ラモー・ルーの舌が搾乳するように動き、サラの乳房をきつく締め上げる。

「んああっ、ああああっ！」

サラの股間に添えられたラモー・ルーの左手がサワサワと羽根で触るように刺激する。胸に与えられる痛いほどの愛撫と股間を擦られるもどかしさ。

「ああっ！ あああっ！ はああああん！」

沐浴の時、神官に体を触れられていた時には何も感じなかったサラだったが、今は他人に体をいじられ、気持ち悪いの、痛いの、くすぐりたいの、いろいろな刺激が一気に押し寄せ、体がどうかしてしまいそうな感覚に陥っていた。

サラの体を舐め回す事に満足したラモー・ルーは次にサラの女陰へと手を伸ばす。太い指がサラのふっくらとした大陰唇をぐつと押し広げ、引っぱられるように小陰唇が開き、再びラモー・ルーの眼前に窮屈そうな膣の入り口が丸見えになっていた。

「誰かの手が付いているかと思ったが、マリオの話は本当だったようだ、フッフ」  
 ラモー・ルーはサラにむしゃぶりつくとき、その舌でサラを味わうようにラビア、尿道口、  
 膣口と舐め上げていく。

「ああっ……くっ、くすぐりたい、……ひっ、あああっ、」

「次はここだ。……さあ顔を出せ」

ラモー・ルーの舌が器用に、まだ包皮に包まれた陰核クリトリスを剥き出しにすると、無防備と  
 なった実さねに容赦なく絡みつく。

「あああっ、やだ……っ、あっ、ふっああああっ！」

生まれて初めて感じる体の芯を摘つまままれているような感覚に混乱し、悲鳴を上げるサラ。

「ククク、自分でここを触って気持ち良くなったことがないのか？」

「な……ない……わ……あああっ！ あああっ！」

ラモー・ルーは舌先で小さな陰核クリトリスを愛おしむように丹念ねんに舐なる。強烈な快感から逃れ  
 ようとサラは激しく手足を動かし、繋がれた鎖つながガチャガチャと騒々しく鳴る。

「はあ、あああああっ、はっああああああんっ！」

やがてサラの声に艶つやのある音色が混じり始める。

「いよいよお前の蜜壺みつやの中を確かめさせてもらうぞ、フッフ……」

処女膜を傷付けぬよう慎重に舌を挿入させていくラモー・ルー。

「いやっ、ダメっ……ああっ、ああああっ！」

胎内に異物が押し入ってくる恐怖に悲鳴をあげるサラ。

ジュルジュル、ジュッジュッジュッ。

肉襞を舐りつつ狭い膣内を押し広げ、やがて奥に達した舌先が子宮口舐め上げる。

「あああっ、あああああん！ はあああん！」

ジュブツ、ジュブツ、ジュブツ、ジュブツ。

この後の行為の予行演習かのように舌をピストン運動をさせ始めるラモー・ルー。

「ああっ！ ああっ！ ああっ！ ああっ！」

サラは膣内を蹂躪する侵入者に為すすもなく只叫び声をあげるしかなかった。

じつくりと蜜壺を味わったラモー・ルーの舌がサラを解放すると、彼女の膣ヴァギナからは魔

王の唾液と混ざった愛液が滴り落ちていた。

「まだまだ青い果実……しかし、これからが楽しみな味をしておる、フッフ」

「はあ……はあ……ああ……」

「さあ、いよいよおまえを女にしてやろう……」

ラモー・ルーが両の掌てのひらでサラの頬を包む。そしてそのまま、乳房、腹部、太ももへと

滑るように愛撫していき、最後にクレバスを押し開く。

「あうっ」

処女の口がサラの呼吸に合わせてヒクヒクと息づいていた。そこにラモー・ルーの熱<sup>い</sup>り立つペニスがあてがわれる。

「フッフ、破瓜の鳴き声は一度きり、楽しませてもらうぞ」

ペニスがサラの膣<sup>な</sup>内に侵入していく。メリメリと股を引き裂<sup>き</sup>かれるような痛みがサラを襲う。

「かはっ……ひっあ！ ……ああっ！ ああああ！」

膣を押し広げながら進む侵入者を拒むように下腹に力を入れるサラ。

「それ、力を抜くのだ。わしを迎え入れるのだ！ そおれ！ それ！  
グググッと力強く容赦ない動きでペニスがサラを貫いていく。

「いつああっ！ あああっ！ やああああああっ！ あああああっ！  
串刺しにされる痛みと恐怖に叫び続けるサラ。

「おお……もう蜜壺の極みに達したぞ、感じるか？」

ラモー・ルーが亀頭でサラの子宮をこつこつとノックする。

「ああっ！ あああっ！」

ラモー・ルーはサラの膣ヴァギナを馴染ませるようにゆっくりとピストン運動を始めるが、奥に達する瞬間にポルチオを力強く突き上げ、子宮を震わす事により処女だった体に交尾セックスというものを教え込んでいく。

「はあああああつ……あああつ！　あああああつ……いつあああつ！」

やがて、溢れ出していた愛液が——しかしまだそれはサラの体の防衛本能の結果なのだろうが——、潤滑油となり、ラモー・ルーのピストン運動はリズムカルにそして速度を増していく。

内臓を直接持ち上げられるような衝撃がサラの思考を破壊していく。

「あああああつ！　ひっあああああつ！　あああああつ！」

やがてサラの体からは力みが抜け、それを見計らっていたようにラモー・ルーは更に激しくサラの子宮にペニスを打ち付け始める。

「フッフッフ、良い具合に解ほどれてきたわ」

その波動は彼女の体を震わし、乳房をぷるぷると揺らす。

「あああああつはっ！　ああああああつ！　ひあああああつ！」

ジユクッ、ジユクッ、ジユクッ、ジユクッ

「あああっ！ あああっ！ あああっ！」

魔王と処女がまぐわう卑猥な音、サラの悲鳴、少女を繋ぐ鎖の擦れる音、それらが石牢の中の空気をどれほど震えさせただろう。股を裂かれるような痛みがいくらか和らぎ、サラは子宮で感じる鼓動に意識を向けていた。

(乱暴だけど……どこか心地よく感じる鼓動……)

サラはいつしかセックスに身を任せ体を揺らしていた……。

「さあ、いくぞ……わしの種を受け取るがよい！」

サラはラモー・ルーの言葉の意味が解らなかった。しかし、突然ドクドクと膣内で痙攣するペニスにサラは本能的に危険を察し、暴れ始める……が、その力は弱々しく、手足を繋ぐ鎖に鈴のような音を奏でさせただけだった。

「いや……だめっ……いやあああっ、」

「うほっ！ ほっ！」

サラの腰をぐっと掴むと、亀頭を子宮口にキスさせるように押しつけるラモー・ルー。

ビュッ、ビュッ！ ビュルルルッ！

サラの胎内で爆発的な射精が始まる。

「あああっ、あ、熱い！ いやっ！ 熱い！ いやーっ！」  
 子宮に浴びせられる多量の精液の熱にサラは体内から焼かれるような錯覚に陥り、長い  
 悲鳴をあげる。

「あああああああああっ！……」

最後の一滴までサラの膣内なかに射精するかのよう<sup>か</sup>に執拗にピストン運動を続けていたラモ  
 ー・ルーがペニスを引き抜くとサラの膣ヴァギナからトプトプと精液が溢あふれ出てくる。

「……ひ、…あ、…う、ああ、…ああ……」

処女を失ったサラが精液を滴したたらせている姿に、目を細めながら彼女の体を撫でるラモ  
 ー・ルー。

「美しい……しかし、これからおまえをもっと美しくしてやる、フフフフ」……

サラの隣に座ったキャロンは鼻の下辺りまで湯船に浸かり、顔を赤くしてポーツと  
 していた。

「うふふ、つい思い出話が長くなっちゃったわね、ごめんなさい……湯あたりしない  
 ちに上がりましょう」

サラが浴槽から上がる時に起こした波に呆ぼろけた顔を叩かれ、ハツとして立ち上がるキャ

ロン。

「……えっ、あっ……はら」

慌てて、サラの後に付いていく。

(ラモー様に初めてされたあの日を思い出しちゃった……)

## サラの過去 II

ラモー・ルー城の薄暗い回廊を形の良いヒップが二つ、並んで歩いて行く。キャロンとサラだった。湯上がりで髪を下ろしたキャロンの姿はサラによく似ており、二人はまるで双子のように見えた。

「サラさんの事、もっと聞かせてください」

「ウフフ、私の話なんてつまらないでしょう？」

「そんなことないです。あたしの部屋でもっとお話しましょう」

「……あなたも私に興味を持ってくれるの？ うれしいわ」

少しはにかむサラを見て可愛いなと思うキャロンだった。

「ところでサラさん、服は……？」

「うふふ、私もどちらかという到着ない事が多いのよ。服を着てるのは古文書を扱う時くらい。……私は裸を見られて恥ずかしいって感情がないけど、あなたは平気なの？」

「そ……それはラモー様がお喜びになるから……です」

視線を逸らしながら答えるキャロン。



「んん……」

質素なベッドの上で目を覚ますサラ。身を起こし、自分の体を見ると素裸のまま。サラの脳裏にラモー・ルーの姿が浮かぶ。

「あのラモー・ルーに捕らわれてしまったのね、私……」

周りを見回すと、そこは狭い石牢の中だった。出入り口の鉄扉の前には食べ物と、沐浴をしろという事だろう、水を張った桶とスポンジが置かれていた。

「ふふ……これじゃ今までと変わらないわね」

自嘲気味に呟くサラ。

先ずはさっぱりしようとしてサラは沐浴を始める。

スポンジで自分の体を拭く度にラモー・ルーに馴染られた記憶が蘇る。

(……でも、あの人は私を人として触れてくれた)

喉の奥まで差し込まれたラモー・ルーの長い舌、乳房から腰、尻へ吸い付くように弄ってきたラモー・ルーの大きな掌……陰部から下腹部にかけて残るラモー・ルーのペニスに貫かれた感触。

(そして物でしかなかった私を女にしてくれた……)

沐浴を終え、食事も取ってしまおうと何もする事が無くなったサラはベッドに座り、ただ

天井を見上げていた。

(何もせず、ぼうつとして過ごすなんて生まれて初めて……)

石牢の壁を通して微かに聞こえてくる低く唸るような音に耳を澄ましていると、ギギギ……

石牢の扉が重々しい音と共に開くとそこには黒いローブ、フードを目深に被った二人の従者が立っていた。

「出るんだ」

「……は？」

不意に現れた不気味な二人に、驚くことも騒ぐこともなく、サラは立ち上がると出口へと向かう。そんな彼女の従順さに従者二人は顔を見合わせていた。

一人目の従者が言う。

「素直に従ってくれるとこちらも手間が省けて助かるが……」

二人目の従者が言葉を継いだ。

「考え違いをしないよう言っておく。おまえの役目は巫女の知識を我々に教えることと、ラモー様にお前の体を捧げる事だ」

すかさず一人目の従者が脅すように付け加えた。

「ラモー様は女を淫欲に溺れさせるのが好きだからな。人間の男では与えられぬ快樂で今まで何人の女が壊れたことか。おまえはいつまで保つかな？」

(ああ、また私に触れてくれるのね……)

一瞬、微笑むような表情をしたサラを訝しがる従者達。

「……まあいい、この輿に乗れ」

石牢の外に「輿」と呼ばれた物体が音も無く空中に浮かんでいた。

「すごい、浮いている……これ、どうなってるの？」

それまでほとんど無反応だったサラの顔が好奇心に輝いた。

「それは魔力で動いているのだ」

「魔力……」

輿の周りをぐるぐると歩き観察するサラ。時折、輿の下に手を入れては支え棒などないか確認していた。

「もういいだろう、早く乗れ」

痺れを切らした従者が催促する。

サラが輿に登るとそこに設えられた椅子はM字に大きく足を開かないと座れない形をしており、無理矢理座らせる為の拘束具も備えていた。

「足が攣くわっちゃいそう……」

そんな淫具とも言える物に躊躇ためらうことなく脚を大きく開き、体を収めるサラ。陰裂が従者の前に丸見えとなっても気にも留めず、彼女は興味深そうに輿こしのあちこちを触っていた。

「さあ出発するぞ」

先導する二人の従者に付いて輿こしが動き始める。

「ふふっ、不思議な乗り心地……」

楽しそうに輿こしの上で体を揺らすサラに従者が眩つふやく。

「変わった娘だ」

「この娘、すでに心が壊れているのかも知れぬ」

どれくらい城内を移動しただろうか、到着したのはがらんとした部屋。その真ん中には古ぼけた大きな鏡が鎮座していた。

先客のラモー・ルーがサラ達を迎える。

「来たか」

ラモー・ルーが人差し指をチョイと動かすと、操られるようにサラを載せた輿こしが魔王の方へと移動する。

そして、ラモー・ルーの前に、捧げられた巫女の肉壺を捌るのに丁度良い高さで輿は停止した。

「フッフ、麗うるわしい姿での登場だな、巫女殿よ」

ラモー・ルーの指がサラの下の唇を左右に広げる。

「あっ……」

反射的にサラの内股にピクンと力が入り足を閉じようとするが、輿こしの突起がそれを阻む。

「また私に触れてくれるのですか？」

自分の股の間に見えるラモー・ルーの顔をじっと見つめるサラ。

「フッフ、初めてでもう性の悦びに目覚めたのか？」

ラモー・ルーはうれしそうに両の掌でサラの太股をマッサージするように撫で回す。

「見所のある娘だ。しかし、その前に……」

ラモー・ルーが手を振ると従者達が手際よくサラを輿こしから降ろした。

「お前には見てもらいたい物がある」

サラの背中に手を添え、大鏡の前へと誘導するラモー・ルー。

「ここのところだ」

ラモー・ルーが鏡の縁に彫刻された紋様を指し示す。

サラはしばらく眺めたあと、静かに口ずさむ

「ミュウを映すのはシャドル、シャドルを映すのはミュウ……」

「やはり文字であったか」

「これは古代ラル語です……」

「どういう意味なのだ」

「わかりません。ゴモロスの教義ではミュウとシャドルは表裏一体と考えています。それを鏡に擬なぞらえているのかも……」

「なるほど。今日はお前が古代ラル語が読めるのが分かっただけでよい」

サラは再び輿こしに載せられ、ラモー・ルーに処女を捧げたあの石牢に連れてこられていた。

「さあ、今度はわしがお前に牝めすの悦よろこびを教えてやる番だ」

ラモー・ルーがそう言うのと、従者が慣れた手つきでサラの手足を輿こしに備えられた枷かせに繋つないでいく。その作業を無表情に見守るサラ。

従者が作業を終えると、背もたれの後から左右二つの触手状の金具が伸びてくるとサラのクレバスを拡げ、膺ヴァギナを露あらわにした。

「あっ……」

不意に敏感な部分に触れられ、小さな悲鳴を漏らすサラ。

「ラビアクリップでよく見えるようになったぞ、フッフ……牡おすを誘うようにヒクヒクと息づいておる」

サラはラモー・ルーをじっと見つめていた。

ブジュルツジュルツ！

サラの花弁はなびらに魔王の舌がむしゃぶりつく。

ジュルジュルジュルジュル

「あああつ……つはああ……あああつ……」

胎内なぶを蹴られ悲鳴を上げつつもサラの視線はラモー・ルーを捉えたままだった。

「ブッフッフ、徐々にだが、蜜が溢れ出てきておるぞ」

ブチャブチャと下品な音を立てラモー・ルーがサラの蜜すずを啜る。

「あつ！はあああつ……あふう、ああああんっ！」

サラの苦しそうな喘ぎ声が徐々に甘い物に変わっていく。

ジュジュツ！ ジュジュツ！ ジュツ！

「んっああああああつ！」

ラモー・ルーの舌使いが激しくなっていく、甘い喘ぎ声は再び悲鳴に変わっていく。

しかし、それでもサラはラモー・ルーを見つめ続けていた。

「……」

不意にサラから顔を離すラモー・ルー。

「あふ……ああっ……ああ、やめないで……」

「……おまえのその目、まだ淫欲に溺れておらぬ正気の目……なのに何故犯されることを望む？」

「……私は生まれてからゴモロスの血を引く巫女として、物としか扱われてきませんでした。物でしかなかった私をあなたは人として、女として触ってくれました。誰かに触られる事がこんなにも苦しくて気持ち良くて、……だからもっと私を、この体を触って欲しいのです」

サラの頬を両手で挟み、彼女を見据えるラモー・ルー。彼女の瞳の奥、心の中を覗き込むかのようにラモー・ルーの紅い隻眼が鈍く光る。

「……」

サラも魔王の眼を真っ直ぐに見つめ返していた。

「……フフフ、今の言葉、後悔しても知らぬぞ」

ラモー・ルーが右手をサラの目の前にかざす。すると人差し指と中指がらせん状に絡み

合い、ペニスの形へと変形していく。

「望み通り、お前には極上の悦びを味わせてやろう。そおれ……」

ラモー・ルーは指をサラの唇に挿入すると出し入れする。

「んんっ……んんっ……」

「舌を絡めるのだ」

サラにフェラチオの作法を教え込むように指を動かすラモー・ルー。

「んん……っ、んぐっ……」

「そうだ、上手いぞ」

ひとしきりサラの唇を犯した後、引き抜かれた指はサラの唾液でてらてらとテカっていた。

「次はこっちだ」

ラモー・ルーは指を膣ヴァギナに挿入すると、一気に奥まで差し込み、深さを確かめる。

「あうっ！ ……あああ」

「わしの舌ですでに熟こなれているであろう、手加減はせぬぞ、フッフ」

ペニス状の指が肉襞えぐを抉えぐるように掻かき混ぜながら、指先でサラのポルチオを突き上げる。

同時に包皮から顔を出し始めたクリトリスを親指で無理矢理剥き出し、ぐりぐりと潰つぶすよ

うに刺激する。

「う、ああっ、あああ！ ……あああんっ！」

サラを載せた輿こしが揺り籠のように揺れ、子宮を震わす波動を増幅する。

「ああああっ！ あああああん！」

サラの叫び声に合わせて彼女の膺うでが侵入者をきゆうきゆうと締め付ける。

指の動きが緩やかになり、ラモー・ルーがサラの耳元で囁く。

「頭を空にするのだ……ここはどう感じている？」

ポルチオに触れた指先がブルブルと小刻みに震え、子宮を揺らすように愛撫し、サラに「ここ」を教える。

「はああっ……んああ……あああんっ……」

ラモー・ルーの問いにサラは甘い吐息で答え、力んでいた内股が弛緩しかんしてくる。

「そう……それでいい」

「はああ……あああん……気持ち……いい……」

「フフフ、もっと気持ち良くしてやる」

ラモー・ルーはサラの感じる場所を探るように指を動かす。

「だめっ、こんな……変な感じ、っ……ああっ、だめっあああああっ」

「我慢するな……快楽に体を委ねるのだ……」

サラが強く反応する場所を探り当てたラモー・ルーはそこを集中攻撃する。

トロトロと溢れ出すサラの愛液が潤滑油となり、ジュブジュブと卑猥な音をたてながらラモー・ルーの指が激しくピストン運動を続ける。

「ああっ！……いやっ、こんな……怖いっ！ ああああっ、ああああんっ！」

「そおれ、体を感じるままに……体が求めるままに……」  
探り当てられたサラのGスポットがグリグリと刺激される。

「ううっ、はっあああああああっ！」

サラの花弁がプシュプシュと飛沫を上げたかと思うと、次の瞬間、盛大に潮を吹き始めた。

「あああああああっ、うあああああ……っ！」

ガクガクとサラの体が震える。

「それ、出し切ってしまうのだ」

潮吹きを促すようにサラの膣を掻き回すラモー・ルー。

ビクンビクンとサラが体を弓形に反らす度、パタパタと雨のように石床に雫が降り注ぐ。

「……ああっ！ はあっ、ああ！ はっ、あああっ！」

輿こしの上でサラの胸が大きく上下していた。

「はあ……っ……、ああ……、はあ……」

苦しそうな息遣いとは裏腹にサラの表情は夢心地、体は弛緩しきっていた。

「どうだ気持ち良かったであろう、それがイクという感覚だ。これから何度でも味合わせようフッフ」

両の掌をサラの頬から首、首から乳房、乳房から下腹、そして内股へと滑らせていくラ  
モー・ルー。

「ああっ！……はああ……ああっ！ ……はあ……」

流れるような掌の動きに、サラの体はピクピクと反応していた。

## サラの過去 Ⅲ

回廊の壁、天井の隙間から覗く無数の眼、それは夜空に瞬く星のように見えていた。ラモー・ルー城に棲む魔物達の目の前を裸の少女達が歩いて行く。幾本もの鋭い視線がキャロンとサラを視姦していた。

「あの興こじってすごくエッチな乗り物ですよね」

「……そう？」

「そうですよ、大事な所が丸見えにされちゃうんですもの……」

「フワフワした乗り心地で私は好きよ、うふふ」

「あれのせいであたし、裸を見られて気持ちいいなんて思うようになってしまった……  
あん、もう！　こんなに見られてると我慢できない」

キャロンは立ち止まると、魔物達の目を意識するようにゆっくりと髪を搔き上げ、そして、その場で何回かくるとターン、その度たびに小振りな乳房がふるふると弾む。

「あつ、それラモー様に教えられた異国の舞……「ばれえ、よね」

上体を反らしたり、脚を高く上げたり、胸や女陰を強調するポーズを取る淫猥いんわうな舞、ば

れえ」。キャロンには観客達の視線が雨のように降り注いでいた。

「はあ……」

ダンスを終えたキャロンの顔は少し火照り、乳首が上向きにツンと尖っていた。

「あたし、こんなにエッチな娘なんです……」

「いいな……、私も裸を見られて気持ちいいって感じられたら、ここがキュンとするのかな……」

そう言うと掌てのひらで下腹部に触れるサラ。

サラの色気のある仕草にキャロンは胸がドキドキし、しばらく見とれてしまった。

「うん？ ……どうしたの？」

不意の沈黙にサラがキャロンを見つめ返してくる。

「あ……あつ、ごめんなさい。話の腰を折っちゃって……」  
「輿こしだけに、なんちゃって。

えへへへ」

「……？」

きよんとするサラ。

「……あつ、いいです。話の続きを聞かせてください」

魔王の城を守るように浮かぶ数多くの奇岩の中に白く巨大な構造物がある。それはラモー・ルーによって略奪されたゴモロス神殿の空中祭殿。

その空中祭殿の上を歩く二つの人影……ラモー・ルーとサラだった。

「ここは少々冷える、ローブを羽織ってきててもよかったのだぞ？」

ラモー・ルーの前を歩くサラが振り返る。

「体がまだ火照っちゃって。ふう……、今はこの空気が気持ちいいのです」

微笑みながらサラは、少し汗ばんだ肌に張り付いた髪を掻き上げながら頭を左右に振り、乱れた髪を整える。

丁度、雲から顔を出した月がサラを照らす。彼女の白桃色の肌には無数のキスマークが浮かび上がり、愛液と精液に濡れそぼったアンダーヘアは艶やかに煌めいていた。それは激しい情事セックスがあった事を物語っていた。

「それならよい。わしもおまえを眺めていられるからな、フッフ」

数日前までは巫女という物でしかなかった少女が、今は美しく淫靡いんびな姿でラモー・ルーを魅了していた。

「この空中祭殿には女神の力が秘められているという」

祭壇の中心で両腕を広げ、ストーンサークルをぐるりと見渡すラモー・ルー。

「はい。私もそのように教えられています」

「わしはその女神の力を解放する手がかりがこの碑文にあるのではと考えているのだ」  
ストーンサークルを形作る石塔の一つに歩み寄るラモー・ルー。

「ここだ」

ラモー・ルーが石塔の一部を指し示す。そこには碑文が刻まれていたのだろう、しかし今は長年の風雨で摩滅し消えかかっていた。

「……、」

なんとか読み取ろうと碑文の跡を指でなぞるサラだったが、諦めたように首を振ると、他の石塔へと駆けていく。そしてまた他の石塔へ……、それを何度か繰り返し、息を弾ませながらサラが帰ってくる。

「……だめです。ここまで痛んでいては古代ラル語で書かれていた、くらいにしか」

「そうか……」

サラの頬を撫でるラモー・ルー。

「……ゴモロス神殿には古こよりより伝つたわるる禁断しんたんの書物があると聞いています。そこに何か手がかりがあるかも知れません」

その言葉にサラの乳房を愛撫し始めたラモー・ルーの手が止まる。

「ゴモロス神殿は調べ尽くしたが、まだそんなものが……」

「巫女と高位の神官にしか見る事の出来ないもので、神殿の秘密の部屋に納められている、と聞いています」

「秘密の？ わしを閉じ込めたあの忌々しい鏡、ブレイブがあった部屋のことか？」

「ブレイブの……ですか？」

「祭壇の真下にある隠し部屋ではないのか？」

「違います、そこは宝物庫。書庫は神殿の枯れた井戸の底に入り口があると聞いています」

「ふん、ゴモロス神殿、侮れん場所だ」

数日後。

魔王の間には古文書が、中には朽ち果てかけた巻物と共に堆うずたかく積まれていた。

「これほどの大荷物、井戸の底から引き上げるのは骨が折れましたぜ。後腐れのない人夫を集めるのもなかなかの一苦勞……褒美ほうびは弾んでもらわないとねえ」

玉座の前で畏かしこまったマリオだったが、彼の口からは無遠慮な言葉が垂れ流され続けて

いた。

「マリオよ、使役した者達は始末したのであろうな？」  
ラモー・ルーの怒気を帯びた声にマリオは慌てて口を噤んだ。

「はっ、それは私めが抜かりなく。まだ人間共にラモー様の復活を知られる訳にはいきませんので」

玉座の横に控えたドロスが答える。

「うむ……」

満足そうにうなづく。

「サラ様をお連れしました」

二人の従者が一糸纏わぬ姿のサラを玉座の前に導く。頭を垂れたままのマリオがサラの方を盗み見る。

「うほ、これはこれは」

小さく呟くマリオ。

「……サラよ、おまえの言うとおりの場所に隠し部屋があった。これらはそこにあった書物だ」

サラは全裸であることを忘れさせるような気品ある所作で積み上げられた書物の一つを

取り上げ、開く。

「これは……古代ラル語で書かれていますね」

ラモー・ルーが玉座から降り、サラの背後から古文書を覗き込む。

「読めるか？」

「はい」

頷くサラ。

「ではこれらを解読するのがおまえの仕事だ」

「わかりました……ああっ、」

ラモー・ルーはサラの乳房を揉みしだく。

「このような格好で部下達の前で歩き回りおって、はしたないのではないか？ んん？」

「あああ、……私は……、ああんっ、……服を持っていませんから……はう」

「……そうであったな」

ラモー・ルーの掌てのひらがサラの下腹部へと滑り落ちるとサラは魔王の指に陰裂を擦りつけるように腰をくねらせ始めた。

「フフフフ、欲しいのか？」

「はい……子宮こころを触って欲しい」

サラの腰に手を回し、彼女を玉座へと誘うラモー・ルー。  
魔王が玉座にどっかりと座る。

「ここに座れ」

ラモー・ルーの示したそこにはそそり立つペニス。

サラはそうする事が当たり前のようにペニスへと腰を沈めた。

「はい……あふっ、はあああ、」

根元までペニスを呑み込んだサラを一突きし、亀頭が子宮口まで達している事を確認するラモー・ルー。

「っあああっ！」

次にラモー・ルーは膝の上のサラの両脚を肘掛けに載せ、彼女をM字開脚の姿勢にした。サラの脚は肘掛けに造られた凹みにすっぽり収まり、外れることはなく、それは玉座がそのような機能を持つように誂えられている事は明らかだった。

「ああ……、早く触れてください」

衆目の前でペニスを啜えた膣を開帳されても、サラは気にする事も無く、その瞳にはラモー・ルーしか映っていないかった。

「フフフ、そう焦るではない」

そう言うと、ラモー・ルーはサラのウエストを掴んで彼女の体を持ち上げ、膝の上に落とす。……持ち上げ、落とす。……持ち上げ、落とす。

ぺったん！ ……ぺったん！ ……ぺったん！

「うあつ、はあああん！ はああつ、…… ああああん！」

ラモー・ルーとサラの結合部が奏でるコミカルな音とは裏腹に強烈な衝撃がサラを襲う。

ぺったん！ ……ぺったん！ ……ぺったん！

重力に引かれ落ちてくるサラを強張ったペニスが貫き、その衝撃を一身に受け止めた子宮が生み出す快感がサラの脳天まで貫く。

「ああんっ！ ああんっ！ ああんっ！」

ぺったん！ ……ぺったん！ ……ぺったん！

「あああつ！ あああつ！ ああああつ！」

淫楽の波動が体全体を駆け巡り、サラは恍惚の表情を浮かべていた。しかしその目はラモー・ルーの顔を見つめ続ける。

「ああんっ！ ……もつと、私を触って……もつと！ ……私の愛しい人……ふあつ、あ

ああっ！」

ラモー・ルーとサラの性行為セックスを微動だにせず無言で見守る部下達。

「うう、たまんねえ……、あれが此の間まで未通女おほこだった女かよ……」  
そう呟つぶやきながらマリオは痛いほど硬くなった一物をズボンの上からしごいていた。

## サラの過去 IV

キャロンが自室へとサラを招き入れる。

「さあどうぞ」

「うふふ、広いお部屋ね」

「サラさんもお部屋を頂いてるんでしょう？」

「私は今も石牢よ」

「えっ？」

「私は生まれた時からずっと閉じ込められていたようなものだから、石牢の方が落ち着く。だからラモー様にお願ひしてずっとそこにいるの」

「そうなんですか……あっ、今飲み物出しますね。」

サラはキャロンを待つ間、ベッドに座って部屋を見回す。

(……やっぱり私はこういう部屋、落ち着かないわ)

部屋に置かれた調度品を眺めていると、それらとは不釣り合いな古ぼけた大鏡が置かれている事に気付くサラ。

「……？ あれは」

「お待たせしました」

鏡をよく見ようとサラが立ち上がろうとした時、キャロンがピッチャーとカップをトレイに載せ戻ってくる。

「これ、あたしがここに来た時初めて飲んだ物で、最初は変な味だなあって思ったんですけど、今はなんだか癖になっちゃって、毎日飲んでるんですよ、あはっ」

キャロンがトロトロとした白い液体をカップに注ぐ。

「これって……」

少し驚いた様子のサラ。

「どうぞ」

キャロンに差し出された飲み物を一口飲み、「やっぱり」という表情をするサラ。

「あれ？ ……もしかして、お嫌いでした？」

「あなた、これが何か知らないで飲んでるの？」

「いいえ」

自分もカップに白い液体を注ぎ、飲んでみるキャロン。

「すぐくксеがある飲み物ですけど……？」

「分からない？ 聖水よ、ウフフ」

「せいすい……あっ！」

禊の儀式で身を清めるために使った液体、ラモー・ルーの精液をどうのと言ってた液体。毎日愛飲していた物の正体が分かり、目を丸くするキャロン。

「やだ、あたしだったら。ラモー様の……せ、精液を……毎日飲んでるなんて言っちゃった……」

キャロンの顔が見る見るうちに赤くなっていく。

「これって従者に言えば出してもらえる物だったのね」

サラはこくこくと一気に飲み干す。

「……うふっ、美味しい。私も好きな味よ」

サラが微笑む。

「ですよね、えへへへ」

キャロンはカップを持つサラの手にはめられた銀の腕輪に気付く。

「……あれ？ その腕輪、あたしの似てますね」

キャロンは左腕をサラに見せる。彼女の朗ほがらかさを映しているかのようにキラキラと輝く金色の腕輪。

「そうね。でもあなたのと違って私のは……」

サラの表情が少し悲しそうなものに変わり、ラモー・ルーとの思い出話が始まる……。

「ラモー様、サラ様です」

従者の声と共にラモー・ルーの居室の扉が開かれる。

部屋に入ってきたサラは服を着ていた。それはゴモロスの巫女の衣装に似せて作られていたが、生地は絹のように滑らかで、透き通るほど薄かった。サラは下着は着けておらず、素裸に薄衣うすぎぬを巻き付けているだけとも言えた。

サラの背後で閉じられた扉の作り出した微風が彼女の栗色の髪を微かすかに揺らした。

「ラモー様、参りました」

しかし、サラの呼びかけに返事はなく、代わりに部屋の隅で物見の鏡に向かって座っていた鏡使いが彼女に顔を向ける。

いつも待ち構えている巨大な寝台の上にはもちろん、部屋を見回してみてもラモー・ルーの姿は見えない。

サラは先さつきから自分に視線を向け続けている鏡使いの方へと近づいていき、彼の目の前に立つ。

「ラモー様を知らない？」

「……」

鏡使いは無言のまま。

サラが肩口にある留め金を外すと彼女の体を覆<sup>おお</sup>っていた布がすりと滑り落ち、鏡使いの眼前に少女の透き通るような肌が披露された。

「これどう？」

サラはラモー・ルーから「鏡使いがお前の事をいつも視姦しているぞ」と聞かされた事を思いだし、試しに鏡使いに教えてもらおう駄賃代わりとして自分の体を見せつけてみたのだ。

鏡使いの視線が体の上を舐めるように這い回っているのを感じるサラ。しかし、裸どころか性行為を見られても恥ずかしいと感じない彼女にとっては何でもないことだった。

サラは同じ質問を繰り返す。

「ラモー様はどこ？」

「……」

沈黙が続ける鏡使いがカタカタと骨を鳴らしながら掌<sup>てのひら</sup>を回転させて見せた。

「まだ足りないって言うの？」

無言の要求を理解し、鏡使いから数歩離れて立つサラ。

「すう……」

サラはスツと姿勢を正し深呼吸をすると、鏡使いの前で異国の舞、ばれえ、を踊り始める。サラの栗色の髪が舞い、形の良い乳房が揺れ、高く上げられる脚、と同時に時折顔を覗かせる花弁はなびら。それはラモー・ルーに教え込まれた、女性の体を強調するように踊る淫猥なダンスだった。

鏡使いの顔をじっと見据えながらクルクルと、ばれえ、を踊るサラ。

フードから覗く髑髏どくろの顔の表情は読み取れなかったが、いつも眼窩がんかの奥で小さく灯っている赤い光が揺れているのが見えた。

やがて鏡使いは部屋の奥を指差す。

「バルコニーだ……」

「ありがとう」

ダンスのステップの勢いに乗ったままバルコニーに向かうサラ。フリフリと左右に揺れる彼女の白い尻を鏡使いは見送っていた。

ラモー・ルーの居室の奥、バルコニーに出ると、サラの目の前に大きなラルの月が浮か

んでいた。

「ああ、なんて綺麗……」

その美しさに思わず声を出すサラ。

ちよつとした広さを持ったバルコニーにはフライングマシンが駐められており、その傍らにラモー・ルーが立っていた。

「サラか……、与えた服はどうした？」

「ラモー様に触れてもらうのに邪魔ですから」

「……そうか」

ラモー・ルーは少し残念そうに呟きつぶやフライングマシンに乗るとサラに手を差し出す。

「空中散歩に連れて行ってやろう」

「はう」

サラが座席に上がるとラモー・ルーの股間にはペニスきつりつが屹立し待ち構えていた。サラは微笑むとラモー・ルーの膝の上に腰を下ろす。

「ふ、ああ、ん………ああ、入った……」

操縦桿を握るラモー・ルーの腕に手を回すサラ。

「さくぞ」

フライングマシンがふわりと浮き上がる。

と同時に「しっかりとつかまっておれ」とばかりにラモー・ルーがサラの子宮をペニスで突き上げる。

「ああっ、ん！……は、はい」

ラモー・ルーを掴んだ手と股にきゅっと力を入れるサラ。

二人を乗せたフライングマシンが夜の地シヤドルの空へと弾かれたように舞い上がっていく。

空全体に散らばるように四つのラルの月が浮かんでいた。その月と月を結ぶような軌跡を描き飛ぶフライングマシン。

ラモー・ルーは左手で機体を操り、右手ではサラのツンと尖った乳首をいじりつつ、ゆっくりと腰を動かしていた。

「……あ……、ああ……」

亀頭でポルチオを愛撫され、サラは陶醉した表情でラルの月を見つめていた。

「先さきからずっと月を眺めているが、そんなに珍しいか？」

「ああ……はい。ずっと閉じ込められて育ってきたので、私にとって外の景色は何もかもが新鮮なのです、ああ……。特にこれほど大きなラルの月を見るのは初めてです……は

ああ、

サラの温もりを掌とペニスで愉しんでいたラモー・ルーも月に視線を向ける。

「サラよ……、ここラルの星から宇宙の彼方に追放された一族がいた事を伝え聞いているか？」

「……はあ……いいえ……あ……、しかし古文書にあるかも知れません……ああっ」

「調べなくともよい。同じ血を分けた兄弟でありながら一方は魔力を操る力を持ったが故に忌むべき者としてこの星を追われたのだ、記録など残っておらぬだろう」

そう話す魔王の目はいつしか月の更に向こう、星の海を見ていた。

「……古文書の解読はどんな具合だ？」

「手掛かりになりそうな書物は……はあ、ん……古代ラル語でもかなり古い文体で難しく……あっふう」

「ふむ、そうか……」

「女神の力の封印を解く鍵は……、あ、……ラル王家の血を引く者が必要ということは解りましたが……」

「王家の血を引く者……ユリア王女か」

「そうなります……はああ……」

「たっぷり時間をかけ、正確に読み解くのだ……わしにも今しばらく刻ときが必要だからな」  
 ラモー・ルーはそう言うと、足下に見える己おのが城を見下ろす。  
 城主の魔力によって稼働しているラモー・ルー城は未だ往年の威容を取り戻しておらず、半ば廃墟のようであった。

静かにバルコニーに降り立つフライングマシン。先に降りたラモー・ルーがサラの左手を取り、降機を手助けする。サラの右腕にはめられた銀の腕輪が月光を反射し煌きらめく。

「今気付いたが、この腕輪の紋様は……」

サラの右手を自分の顔へとグイと引き寄せ、腕輪を観察するラモー・ルー。

「……古代ラル語が書かれています」

「ふむ、やはり……」

「代々、巫女に選ばれた者にはめられてきました」

「凝った造りだ……して、なんと書かれている？」

ラモー・ルーは腕輪の紋様を指先でなぞる。

「この者をシャドルに捧げる」と書かれています」

「シャドルに捧げる……？」

「巫女として一生を捧げるといふ意味なのでしょう」  
目を伏せるサラ。

「フン、気に入らんな、今やお前はわしのもの。外してやろう……ヌン！」  
腕輪を驚づかみにし、魔力をこめるラモー・ルー。

バシッ！

「ウッ！」

魔力が逆流し、ラモー・ルーの腕が弾かれる。

「この腕輪が外れるのは私が命を終える時なのです」  
寂しそうに微笑むサラ……

「きやつ……」

話し終えたサラがキャロンの方を向くと、彼女の昔話を熱心に聞くあまり、くつつきそうなほどの距離にキャロンの顔があった。

「それからどうなったんですか？」

「それから？」

「みそぎ禊の儀式とかあ……むすび契りの儀式とかあ……」

「ふふふ、それはあなたもよく知ってるでしょう？ 同じ事をしてると思うわよ」「それもそうですね、えへへ……」

キャロンは自分の儀式の時を思いだし、体が疼うずいてくるのを感じていた。

「うふふ、ラモー様、まだ起きてらっしゃると思うわよ」

「あはっ！ そうなんですか？」

腰掛けていたベッドからうれしそうに立ち上がるキャロン。

「……あっ、いえっその、エッチしたい訳じゃなく……」

キャロンは恥ずかしさで真っ赤になった顔を両手で顔を隠していた。

「うふふふ……」

キャロンを笑顔で見っていたサラの表情がだんだん真剣なものに変わっていく。

「……?」

サラの視線を追うと、それはキャロンの股間に注がれていた。

「……きゃっ、なんですか？ こんな所見て」

とっさに手で隠すキャロン。

「生えてないな、と思って。人によって生えてたり、そうでなかったりするの？」

「生えて? ……え? ……髪?」

キャロンは自分とサラを見比べ、やがてベッドに座った彼女の閉じられた脚からわずかに覗く陰毛に気付く。

「……あっ！ ……この毛……のことですか？」

股間を指差し、何故か小さな声になるキャロン。

「あたしも一応、少しは生えてたんですけどお……魔物のお風呂に入れられてから生えなくなっちゃって……」

「ああ、体の無駄毛や垢を食べて綺麗にしてくれる魔物がいるって従者が言ってたわね。それのことかしら」

今度はキャロンがサラの股間をじっと見返していると、サラの脚がガバッと拵げられる。

「よく見てみる？ うふふ」

サラの開けっぴろげな行動に思わず目を逸らしたキャロンだったが、すぐに彼女の綺麗に整えられたヘアに目を奪われていた。

「……サラさんの綺麗で大人っぽくていいなあ。あたしにもまた生えてこないかな……でも、お手入れ大変でしょう？」

「うふふ、お手入れは従者達がやってくれてるの」

「えっ！」

「万が一、大事な所を傷付ける事があってはならん、従者に任せておけ、とラモー様がね」

「そ、そうなんです……」

……その日、キャロンの部屋からは夜遅くまで明るい笑い声が聞こえていた。

## 微行

「えーっ！ どうして？」

フライングマシンの駐機場に甲高い声が響き渡る。

「お一人でのお出かけはお控え頂きます」

従者達がフライングマシンの前でキャロンを制止していた。

「今まで何も言わなかったじゃない！」

従者を押しつけ強引にフライングマシンに乗ろうとするキャロン。

「これはラモー・ルー様のご命令です」

「わかったわよ……」

ラモー・ルーの命と聞いておとなしく引き下がるキャロン。しかし、彼女が一瞬、悪戯いたずらっぽく舌を出した事に気付いた者はいなかった。

「ふう、気持ちいい……」

ローブの前を開けさせ、裸身を風の流れに晒すキャロン。

これまで何度もラモー・ルーの手下達の目を掻い潜って空の散歩を楽しんで来たキャロンにとって、ラモー・ルー城をこっそり抜け出すのはお手の物だった。

「この間、姿を消したから、ラモー様はあたしが逃げると思ったのかしら……」  
 気の向くまま、軽やかにフライングマシンを操るキャロン。

「誤解よ。あたしだって何が起こったか覚えてないんだもん」  
 拗ねたように機体を左右に揺さぶる。

「それに……あたしはもうラモー様のもの……どこにも行かないわ……あふっ」

ラモー・ルーを想うとあの逞しいペニスで貫かれる感覚が彼処に蘇り、キャロンの指は自然とクレバスに滑り落ち、花弁を愛撫していた。

「あと……ああっ……こんな、お空でオナニーするような娘にした責任……取ってもら  
 うんだから……ああんっ」

フライングマシンの上でオナニーに耽るキャロンの目を銀色の光が掠める。

「……？」

目を凝らすとそれは太陽の光を反射するゴモロス神殿だった。

「ゴモロス神殿……キラキラして綺麗だわ……」

キャロンは何故かその瞬きから目を逸らすことが出来ず、じっと神殿を見つめるうち、

彼女の瞳は精気を失い虚ろなものに変わっていった。

「あそこに行かなきゃ……」

そう呟き、フライングマシンをゴモロス神殿の方向に向けるキャロン。

ゴモロス神殿の大聖堂、キャロンが夢遊病者のようにフラフラと古ぼけた大鏡の前まで行くと、ローブを脱ぎ捨て両腕を拡げた。すると鏡の中から濃い霧が吹き出し、一気に彼女の体を覆った。

(あれっ！ ……あたし、どうして?)

パチパチとまばたきをするキャロン。それまで呆けた様子だった彼女の顔に正気が戻っていた。

そこは以前に迷い込んだもう一つの大聖堂。キャロンは引き寄せられるように祭壇に歩いて行く。

キャロンは立ち止まろうとするが、彼女の意に反し、体が勝手に祭壇の方に歩いて行く。

(えっ? 体が勝手に……止まらない!)

祭壇の傍らでキャロンを待っていたかのように、スッと人影が立ち上がった。

「いやっ、あれは何? 怖〜!」

キャロンは得体の知れぬ物に対する恐怖で逃げ出そうとするが、彼女の歩みは祭壇へと向けられたまま止まらない。

近付くと人影は全身真っ黒で輪郭ははっきりせず朧おぼろげ、文字通り影のようだった。

「ヒッ！」

影はキャロンを抱き寄せると、のっぺらぼうの顔に赤い裂け目が現れ、そこから長い舌が這はい出してきた。キャロンの唇をこじ開け、舌に絡からみ付きビチャビチャといやらしい音を立てる。

「んっんっんん……、」

(こんなのいやっ！……いやっ！)

心は拒否していてもキャロンの舌は影のデープキスを受け入れていた。

ひとしきり少女の唇の味を堪能した影は次にキャロンを祭壇に座らせると、彼女の脚を左右に開かせる。キャロンはうっとりとした表情でされるがままに……むしろ積極的に脚を開き、女陰を陵辱者に捧げていた。

影の指がキャロンの秘裂を押し拡げると、すでに蜜壺うるおは潤うるい、蜜を滴したたらせていた。

「あん……ダメえ……」

影の舌が滴したたる蜜を舐ねぶり取って行く。

「ああっ……、」

チュプ……チュプツ、ジュールツ、影はキャロンを味わうかのように花卉全体を舐め上げる。

「はあああ……いや……あ……」

キャロンは影の頭を掴み陰部へと擦りつける。

「もつと奥を舐めて……」

(だめ……ラモー様以外の人にそんなこと……)

キャロンのリクエストに応えるように影は舌を出し入れさせ始め、肉襦を愛撫する。影の頭を掴んだキャロンの指に力が入る。

「もつと激しく……奉仕するの……そんなんじゃ満足できないわ……」

(……やだ、あたし、なんていやらしい事を言ってるの?……)

与えられる快樂にキャロンの心が蕩けていく。

「あああっ！ イクうう！」

プシュ、プシュツ、シュツシュツ

キャロンが吹いた潮が煌めく。

「はあ、……はあ……あ……はああ、……もつと……もつと、ちようだい……」

影はペニスを濡れそぼったキャロンにあてがうと亀頭で陰唇を押しつぶすように擦りつける。

「はああ……あああ……」

黒く強張ったペニスがキャロンの肉壁を分け入ってくる。

「はああああんっ……」

ジュンッ！

「はああああっ！」

ジュツ、ジュツ、ジュツ

影はペニスでキャロンの子宮を穿つかのように腰を振り、その度にふるふるとキャロンの乳房が揺れる。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！ あんっ！」

ぱんっ ぱんっ ぱんっ ぱんっ

キャロンの嬌声と彼女の蜜壺が発する淫らな音の旋律がキャロンの淫欲を昂ぶらせていく。

ビュッ ビュルッ！

「あああっ、ひあああああっ！」

熱いほとばし 逆さかりが膣な内に放たれ、キャロンを絶頂へと導く。

キャロンがオルガスムスの余韻に浸る間もなく、影は彼女を祭壇から降ろし床にひざまず跪ひざまずか  
せると、未だ熱いり立つペニスを眼前に差し出した。

「あふ……んん……んっ」

フェラチオで応えるキャロン。

キャロンが竿の中に残っている精液を吸い出し飲み干した事を確認すると影は雄々しく  
屹立きつりつするペニスを誇示するように大股で祭壇に座った。キャロンは吸い寄せられるように  
影の膝の上に腰を落とす。

「あ……、はあああんっ！」

影はキャロンの腰を掴つかみ、乱暴に彼女の体を上下させ始めた。

ジユクツッ！ ジユツッ！ ジユクツッ！

「いやっ！ あああっ！ うああああ、んっ、ああっ！」

キャロンの黄金色のポニーテールがキラキラと宙に舞い、陰茎つらぬに貫つらぬかれた花弁はなびらからは  
愛液なと、膣なに残っていた精液が飛び散っていた。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！」

ピストン運動が激しくなっていく。

「んっ、あああっ！ お腹に、ああんっ！ お腹にいっぱい、ちょうだい！」  
 ペニスがビクビクと脈動をし始めると根元からは何本もの触手がシュルシュルと生えだしてきた。触手の先端は吸盤状になっており、何本もの触手がキャロンの下腹部に吸い付いていく。

グジュルルルッ！ ジュルジュルルッジュルッ！

射精と同時に触手はきつく吸い付き、キャロンが逃れないようにしていた。

「ん、ぐあっ、……ああっ！ だめえっ！ ひっ、あああああああっ！」

子宮を突き破らんばかりにポルチオに押しつけられた亀頭から噴水のように精液が噴き出し膣内を満たしていく。

影は二度目の絶頂にくったりとなったキャロンを床に転がした。

「はあ……はあ……まだしてくれるの……？」

うつ伏せになったキャロンは腰を上げ股を大きく拡げ、後背位の姿勢をとる。

「……さあ、……きてえ……」

後から影のペニスに刺し貫かれるキャロン。

「あああっ、んああああっ！ あああっ！」……

「……あれ？」

はっとするキャロン。全身を撫でていく風に着ていたローブが無くなっている事に気付く。

(いつの間にか飛ばされちゃったのかしら?)

「くしゅ! ……お城へ帰りましょ」

キャロンが機体を旋回させると、前方から猛スピードでフライングマシンが接近してきていた。

「外を出歩くな、と命じていたはずだ」

フライングマシンの上で仁王立ちになったラモー・ルーがキャロンを睨み付けていた。

キャロンは初めて見るラモー・ルーの険しい表情に、夜の散歩で体が冷えたのとは別の冷たさを背中に感じていた。

「……あたし、逃げたりしません」

キャロンの泣きそうな声。

「何を言ってるのだ？」

「この間、姿を消したから……あたしが逃げるんじゃないかって、空の散歩を禁止したんでしょ? でもあたし、あの時の事は本当に覚えてなくて」

「お前が逃げない事など分かっておる。今も昼の地ではなく、我が城へと帰ってきていたのだからな」

「じゃあ、どうして？」

「おまえも見たであろう、ゴモロス神殿の不穏な動きを。そして、神殿と因縁浅からぬおまえが一瞬でも姿を消した。女神の力の鍵であるお前を失う訳にはいかぬ……」

「そう……ですよね」

ラモー・ルーの言葉にキャロンの表情が見る見ると消えていく。

フライングマシンを城へと向けながらラモー・ルーが独り言のように呟く。

「……同時に大事な妃を失う訳にもいかぬ」

「あはっ」

先までの沈んだ顔が一転、はにかむキャロンを残し、ラモー・ルーはフライングマシンのスロットルを開ける。

「ああっ、ラモー様、待って」

慌てて跡を追うキャロンだった。

## 鏡の中へ

あれ以来、キャロンは空中散歩に出かける事はなくなった。しかし、活発なキャロンのこと、じっとしてられる訳がなく、代わりに広大なラモー・ルー城をあちこち歩き回っていた。さらに城内探検の道すがら魔物達に視姦される事が、露出癖を開花させられたキャロンにとって新たな楽しみとなっていた。

回廊の十字路、その真ん中に垂直に立てられた鉄棒に掴つかまったキャロン。鉄棒を両脚で挟むと官能的な動きで腰を振ると、次に鉄棒を中心にクルクルと回り始める。徐々に回転の勢いが増してくると、脚を絡からめ、両手を放して体を反らしていく……が鉄棒に絡ませた脚がズルズルと滑り、その場にぺちゅと尻餅をつく。

「あん、もう！ 上手くいかないなあ」

それはラモー・ルーに教わった異国の舞マ、ぼおるだんすマ。

鉄棒に体を擦りつけたり、絡ませたり、掴つかまって開脚したり、時には逆さまになったり、まるで鉄棒をペニスに見立てたように踊るそれは、ばれえマよりも更に淫いんわい猥な舞だった。

鉄棒は上階から素早く降りてくるために造られた「滑り棒」だったが、キャロンはそれを、ぼおるだんすの練習に使っていた。

熱心に練習を続けるキャロン。ふと視線を感じ周りを見ると、多くの魔物達に囲まれ、彼等の鋭い目に視姦されていた。

「やだもう、まだ上手く踊れないから見ないで！」

そう言いながらも、キャロンは大事な所を見せつけるように動作をさらに大胆にしていた。魔物達のキラキラとした視線、興奮する息遣いを感じながら踊るキャロン、その表情は徐々に恍惚なものに変わっていく。

どれほど経っただろう、キャロンの足下に汗で水たまりが出来る頃、彼女は舞の練習を終えた。

「ふうう……」

鉄棒から離れ、大きく深呼吸すると、掌てのひらでパタパタと体を扇あおぎ始めるキャロン。

「はあ、一杯汗かいちゃった……」

汗でぐっしよりと濡れたキャロンの体は淫猥さを増し、彼女を包む魔物達の熱狂を更に燃え上がらせていた。

「うふっ、今日はこれでおしま〜」

鉄棒に掴まると脚をVの字に開き一回転してみせ、観客のカーテンコールに応えると、スキップして帰って行く。

「はあ、お風呂気持ち良かった……」

大鏡の前でとかした髪をポニーテールに纏めるキャロン。

「女は見られている方が綺麗になる、かあ、……」

昔、村のお姉さんが言っていた言葉をキャロンは反芻していた。その時は意味が分からなかったが、今は分かった気がしていた……ただし、状況的に意味合いがかなり違っているが。

鏡に映った自分の体を眺め、両腕を頭の後ろに回し、ツンと上を向いた乳房の形をチェック、ウエストに手を置き、体を左右に捻り、体のラインをチェック。

「少しはカッコ良くなってきた……かな？」

ボディラインを両の掌でなぞっていくうち、ラモー・ルーに犯される自分を想像し始めるキャロン。

(ああ、ラモー様……)

キャロンの唇から自然と甘い吐息が溢れ出す。

「キャラン」

「きゃ！」

背中から不意に声をかけられ、びっくりして振り返るとそこにサラがいた。

「あつ……サラさん、遊びに来てくれたんですね」

サラは時々キャランの部屋にやってくるようになっていた。

「……何です？」

サラがまじまじとキャランの体を見つめていた。

「何か気持ちいいことでもした？」

「えっ！ ……な、な、何にもしてませんよ？」

焦<sup>あせ</sup>るキャラン。

「今のあなた、なんだかエッチな雰囲気だから」

「やだサラさん……そ、そんなことないですよ」

キャランはサラの鋭い観察眼に舌を巻いていた。

「でも、すごく綺麗」

「そ、そ、そうですかあ？ 照れるなあ……」

サラに褒<sup>ほ</sup>められ、照れ笑いをするキャラン。

「……ラモー様、最近ご無沙汰なんですよね」

「仕方ないわ。今は泊まり掛けで行くいくほど、ゴモロス神殿の調査に没頭してるもの」

「はあ……」

「ふう……」

溜め息のハーモニーと同時に少し暗くなるふたり。

「あつ、サラさん、またあれ飲みます……」

雰囲気を変えようとキャロンがそう言いかけたその時、背後の大鏡から黒い腕が現れ、キャロンを鏡の中へと引きずり込む。

「きやあああつ！」

「キャロン！」

キャロンの腕を咄嗟に掴まえ助けようとするサラ。

しかし、非力なサラでは抗いようもなく、そのままキャロンと共に鏡の中へ呑み込まれてしまった。

「きやあああああつ！」

「きやあああああつ！」

「きゃっ！」

引っぱられた勢いで床に倒れ込むサラ。

「キャロン……」

立ち上がりながら、一緒に引きずり込まれたキャロンの姿を探し、辺りを見回すが、彼女はいない。

しん……と静まりかえった薄暗い部屋。

「ここは……神殿なのかしら」

サラは幼い頃、ゴモロス神殿縁ゆかりの小神殿に一時的に滞在した事があり、部屋はその造りに似ていた。

「どこにいるの？ キャロン！」

キャロンを探していくつもの部屋を回っているうち、書庫を見つけるサラ。

入ってみると書棚にはぎっしりと書物が収められていた。

「すごい……しかもどの本も古代ラル語で書かれているわ。どんな事が書かれているのかしら」

いくつかの本を手に取り読んでみるが、どれも多少文体が違うだけで、彼女の知っているゴモロスの教義や歴史が書かれているだけだった。

幾列もの本の背表紙を追って歩くうち、部屋の真ん中に据えられた重厚な造りの書見台の上に置かれた本に目が止まるサラ。

「なんて立派な本なの……」

分厚く凝った装丁の本のページを何気なくめくった彼女だったが、そこに書かれている文字を追うにつれ、真剣な表情になっていく。

サラはキャロンを探す事も忘れ、その本に夢中になっていた。

「……やっと見つけたフッフッ」

小さな声が入り口から聞こえ、はっと顔を上げるサラ。

「……誰？」

走り去っていく人影が一瞬見え、慌ててその後を追っていく。

サラは人影を必死に追うが、ついには見失ってしまった。諦めず数多くある部屋をひとつ／＼覗きながら歩いていると、やがて大きなホールに辿り着く。

「すご……」

サラは眼前に広がる佇まいに、話しにだけ聞いているゴモロス神殿の大聖堂とはこのようなものだったのだろうか、と思いだしていた。

ホールの雰囲気は圧倒されつつ、中の様子を窺っていたサラは祭壇がある事に気付く。

「……あっ、あれは」

祭壇に駆けよるサラ。その上には気を失ったキャロンが横たわっていた。

「キャロン！ キャロン！ 起きて！」

キャロンの体を揺すり、起こそうとするが、一向に目覚めない。

「……やっと見つけた」

「ひっ！……」

突然背後から声が聞こえ、飛び退こうとするサラだったが、体が金縛りにあったように動かない。

そこには全裸の少女が、……自分に似た姿の少女が立っていた。

「あ、あなた……誰？」

近づいてくる自分に瓜二つの少女に動揺するサラ。

「フッフ」

少女はサラの右手を取ると、彼女にはめられた腕輪を眺め、

「この者をシャドルに捧げる……」

そこに書かれた文字をゆっくりと読み上げる。

「これが読めるの？」

「今度はあなた一人で来るの……フフフツ」

少女はサラの瞳を覗き込むように見つめながら微笑む。

「待って、あなたは……」

祭壇の周りに白い霧が立ちこめ始め、やがてサラの視界は白く塗りつぶされていった。

「……！」

白い霧が晴れると、そこは元いた部屋、そして彼女の足下にはキャロンが倒れていた。

「キャロン……キャロン……」

サラがキャロンの体を揺する。

「う……うらん………サラさん？」

「良かった、気がついたのね」

そして、サラの傍らにはあの立派な本も転がっていた。人影を追うとき、サラは咄嗟に書庫から持ち出していたのだった。

「シヤドル……」

サラが本を拾い上げ呟いた、その時、

ガシャン！

「！」  
激しい音がした方へ振り向くと、二人を吸い込んだ大鏡が砕け散っていた。

主あるじのいない城

サラはあの出来事からずっと部屋に閉じこもり、鏡の中から持ち帰った本を寝る間を惜しんで読んでいた。そんな彼女の熱心な姿にキャロンは声をかけられず、ラモー・ルーのいない城で一人暇を持て余していた。

魔物達の視線の中心で鉄棒に掴つかまったキャロンがクルクルと回転し、彼女の後を追うポニーテールが篝火で照らされ、金色の螺旋らせんを描いていた。

瑞々みずみずしい裸身を惜しげも無く披露するキャロン。

(ああ、早くラモー様、帰ってこないかしら……)

鉄棒に股間を擦りつけるように腰を上下させる度たび、ボディチェーンが軽やかなリズムを奏でる。

(ああ、ラモー様にエッチな事をしてもらいたい……)

右足を高く上げ鉄棒に絡めると、体を大きく反らせ上下逆さまになる。そして右足を支点にゆっくりと回り始める。

(ああ、こんなにウズウズしてるのに……)

観衆達に花弁はなびらを見せつけるように左足を大きく拡げるキャロン。そこは愛液が溢あふれ始めていた。

フーッ！ ブフツ、フーッ！

鼻息を荒くし、今にも獲物キャロンに襲いかかってもおかしくない状態の魔物達だったが、彼女がラモー・ルーの所有物である事を彼等は弁わきまえていて、一定の距離を空け、彼女を丸く囲んでいた。

「ええい、どけ！ 道を空けよ！」

魔物達によって作られた城壁をこじ開けた従者達が、鉄棒に絡からまりクルクルと回っているキャロンの前に跪ひざまずく。

「キャロン様……」

「……」

恍惚こうこつの表情を浮かべながらクルクルと回り続けるキャロン。

「キャロン様！」

「えっ？ ……きゃっ！」

バランスを崩し、床に倒れ込むキャロン。

「痛たた、なによもう……」

「ラモー様からの伝言です」

「えっ、ラモー様から？ やっとお帰りになるの？」

キャロンのしかめっ面が笑顔に変わる。

「調査の為、もうしばらく神殿に留とどまるとの事です。」

「えーっ、そんなあ……」

ふくれっ面になって不満をぶつけてくるキャロンを無視するかのよう  
に言葉を続ける従者。

「それともうひとつ……」

「この中へ入るの？ なんだか気味悪いわ……」

従者が案内した部屋の内部は新鮮な生肉のような色をしてヌメッとしたテカリがあり、まるで生物の胎内のようなであった。よく見ると床、壁、天井には至る所に小さな裂け目があった。

「キャロン様を退屈させる事がないよう、とのラモー様のご命令があり用意いたしました、快樂の部屋です」

「快樂の……部屋……？」

従者の言葉にキャロンの瞳が好色に煌めいた。

「ふうん……ちよつとだけなら」

キャロンが一步足を踏み入れた瞬間、裂け目が一斉に開き、ギョロツ、ギョロ、ギョロツ……

眼、眼、部屋一面に無数の眼。

ギョロリ、ギョロ、ギョツギョロリ……

「やだ……」

あまりの不気味さに後退りするキャロン。しかし部屋の中から伸びてきた二本の触手がキャロンの両腕に素早く絡み付き、部屋の中へと引っ張り込んだ。

「ああっ！」

「ごゆるりとお楽しみ下さい」

従者がそう言う入り口が巾着の口のように閉じ、跡形もなく消えてしまった。

「ちよつ！ もう！ 出してったら！ どうしてあんた達の作る物ってこんな気味悪いものばっかなのよ」

入り口があった付近の壁を叩くキャロンだったが、

「……気持ち良くさせてくれるんだけどさ」  
ぼそりと呟くとすぐに抵抗をやめた。

ギョロ……

背中にとざわつとしたものを感じるキャロン。

「っ！」

後を振り返ると無数の眼がキャロンを見つめていた。

ギョロ、ギョロリ……

束になった視線がキャロンの体を舐めるように這っていく。

「やんエッチ、そんなに見ないで！」

キャロンは視線を躲すように体を動かしたり、部屋の中を走り回ったりするが、眼の群はさすがのように彼女を追いかけていく。眼の群れとの鬼ごっこを続けていくうち、キャロンの中に棲みついた露出狂が彼女に「ばれえ」を演じさせていた。

「あはっ、あたしの動きについてこれるかしら？」

ステップを踏む度、プルプルと弾む小振りな乳房。大きく脚を拡げジャンプする度、ぷっくりとした陰唇が顔を見せる。

「うふっ、こっちこっち！」

しかし、お世辞にも上手いとは言えない動きとブヨブヨとした床とが相まってキャラコンの脚は絡からまってしまい……

「きゃあっ！」

スライディングするように派手に転倒しまった。

「うう……、サラさんみたいにはいかないなあ。やっぱり、あたしは、ぽおるだんす、の方が好きだな」

体を起こしながら独ひとり言ごちるキャラコンを、天井からシユルシユルと降りてきた何本もの触手が宙に持ち上げる。続いて流れるように両ふとももの太股ふとももにらせん状に絡み付いた触手が彼女をM字開脚の体勢にした。

「ああん……」

視線の群れが少女の陰部に集中する。

「……ここが見たいの？」

キャラコンの指がクレバスを押し広げると勃起したクリトリスが姿を現し、ヴァギナ陰ヴァギナが誘うようにヒクついていた。

シユルルルッ！

触手達がキャラコンへと殺到する。

「いやあん、いきなりはだめええ」

触手達が彼女の膺なごを激しく愛撫し始める。

「うっあああっ……、ああっあああんっ！」

視姦されたキャロンの蜜壺はすでに潤うるおっており、愛液と一緒に淫みだらな音が滲にじみ出してきた。

チュプ、クチュ、クチュチュ……

「ああああ、……はああんっ……」

クチュツ、クチュツ、クチュクチュツ……

より強い快感を得ようと触手の動きに合わせてキャロンが腰をくねらせると、触手と少女の結合部からは愛液が床にばたばたと滴したたり落ちる。

やがてそれを養分にしたかのように床からニヨキニヨキと何本ものペニス状の触手が生えてきた。

「ああん……そんなにいっぱい……いやあ……」

ペニス状触手の林が見る見るうちに生長せいちようし、キャロンを犯すには十分な太さになると、そのうちの一本がキャロンに迫る。

「ああ、最初はあなたなのね……」

キャロンはうっとりとした表情で陰唇を触手ペニスの亀頭に擦りつける。  
 ジュルルッ！

一本目の触手ペニスが子宮もろともキャロンの体を持ち上げるように一気に突き上げる。  
 る。

「ああんっ！ そんないきなりっ……激しいのは、うああっ！ だめえっ！ あああ  
 っ！」

ジュッブ！ ジュッブ！ ジュッブ！

「ああっ！ いやあああっ！……、むぐう、んんっっ！」

悲鳴を上げるキャロンの口を別の触手ペニスが塞ぎ、彼女の喉を犯し始める。

「んんっ！ んぐんんっ！ ふぐっ、んんっ！」

ジュッブ！ ジュッブ！ ジュッブ！

「んぐっ！ んんっ！ んんんっ！」

ビュルッ！ ビュルッ！ ビュッ！

触手ペニスの逆りがキャロンを一度目のオルガスムスに導き、触手にきつく縛り付けられた彼女の両太股がピクピクと痙攣する。

最初の触手ペニスが射精を終えると、すぐさま別の触手がキャロンを貫き、違うリズム

のピストン運動で彼女の胎内を震わす。

順番を待つ触手ペニス達は亀頭をキャロンの乳房や体に擦りつける。中には待ちきれず精液をキャロンの肌放つモノもあった。

「ああ……あはあん、次はあなたね……うつく、はああああんっ！」

触手ペニス達はそれぞれに形と動きに個性があり、キャロンはそれを楽しむように次々と膣へと招き入れ、精液が子宮に放たれる度、オルガスムスに身を委ねる。

「ああっ！あああんっ！……そんなにしたら……壊れちゃう……ああああんっ！」

「快樂の部屋」の入り口が開き、精液の紗を身に纏ったキャロンが出てくる。

「ふうう……」

右手でポニーテールを掻き上げ、ふるふると頭を左右に振り乱れた髪を整えるキャロン。

「お部屋までお連れしましょう」

回廊の松明の光が届いていない影から従者達が現れ、その後には輿が音も無く浮かんでいた。

従者が輿の上に収まったキャロンを見つめる。

「……あん、もう……そんなにじろじろ見ないで」

ふいっと横を向くキャロンだったが、性戯せいぎの余熱が残った体を隠すことはしなかった。

「ご満足頂けたようで、お手伝いをした魔物達も喜んでいましょう」

「……魔物達って？」

顔を背けていたキャロンが従者の方を見る。

「この部屋は魔物達の意識と繋がつなっており、彼等により操作されているのです」

「やだ……あたし魔物達とエッチしちゃったの？」

「いえ、あくまでキャロン様のお相手をしていたのはこの「快楽の部屋」です。ラモー様の妃であるキャロン様に魔物達が触れることはできません……」

従者のいつもの小難しい説明はキャロンの耳に入っておらず、彼女の脳裏には「ぽおるだんす」を見物していた魔物達の顔が浮かぶと同時に、幾本もの違うタイプのペニスの感触が彼処あそこに蘇よみがえっていた。

「やだ……あたししたら……あんなにたくさんの魔物達と……やだあ……」  
キャロンの乳首は再び硬くなりツンと上を向いていた。

数日後——、

今日も「快楽の部屋」での性戯せいぎを終えたキャロンが従者を従え回廊を歩いて行く。今ま

では獲物を見るような視線を向けていた魔物達は、キャロンが近づくと恭うやうやしく跪ひざまずくようになつていた。

キャロンの後からサラが駆けよってくる。

「ああキャロン、ここにいたのね。あなたにお願いが……」  
振り返つたキャロンに、サラは言いかけた言葉を飲み込んだ。

「あつ、サラさん………な、なんですか？」

「快樂の部屋」でのお楽しみ後の姿をサラに見られてしまったキャロンは、オナニーを見られてしまったような気持ちになり、モジモジとぼつが悪そうにしていた。

「……」

サラがキャロンをじっと見つめる。

「サラさん？……」

まだ少女の面影の残るプロポーション。しかし、乱れたポニーテール、精液がこびりついていたままで、まだ火照りの残った体……、淫欲を解放したばかりのキャロンの姿は同性のサラでさえ目を奪われるほどの色香を漂わせていた。

「……綺麗」

サラは思わず眩くらいた……それは聞こえないほどに小さな声であつたが。

「……そんなに見ないで下さい、恥ずかしい……」

消え入りそうな声のキャロンが堪<sup>たま</sup>らず両手で顔を隠す。

「だからシャドルに喚<sup>よ</sup>ばれたのね……」

「……？」

## シャドル

デイメルンの森の木々を掠めるように低空飛行する一騎のフライングマシン。機上には二つのローブがはためていた。

「ごめんなさい、私が操縦できないばかりに……」

サラの前に座りフライングマシンを操縦するキャロンが振り返る。

「ゴモロスの神殿に行きたいだなんて、ラモー様に見つかったら大目玉ですね、あはっ」  
いつもの悪戯っ子のようなキャロンの笑顔にサラの緊張した顔が少し解れる。

「あそこには女神の封印を解く鍵がある事が分かったの」

「ラモー様にお知らせすれば済むんじゃないんですか？」

「私が行かないとダメなの……あっキャロン、前をよく見て！」

サラが前方を指差す。

「えっ……おっとと！」

キャロンは目の前に迫ってきた一際背の高い木を間一髪で躲す。

機体が大きく揺れ、月の光がサラの腕輪に刻まれた文字をなぞるように反射した。

「『シャドルに捧げる』そういう意味だったのね」  
 サラの**呟**きは風切り音と共に後方に飛び去っていった。

フライングマシンを神殿から離れた場所に駐め、警備の黒騎兵に見つからないように神殿内へと忍び込むと、二人は大聖堂内へと入った。

「これがゴモロス神殿の大聖堂、何もかもそっくり……」

サラは鏡の中の世界で訪れた大聖堂を思い出していた。

「鍵ってどこにあるんですかあ？」

聖堂内をキョロキョロと見回しているキャロンを置いて、サラは祭壇の方へと歩いて行く。慌てて後に続くキャロン。

「何者だ？　そこで何をしている！」

大聖堂を震わすような怒声。

「あっ、見つかった……」

舌をペロツと出すキャロン。

フードを上げ、ラモー・ルーに顔を見せるキャロン。そしてサラ。

「なっ？　……お前達！　いったい」

思いもよらぬ侵入者にラモー・ルーが混乱している間に、サラは素早く祭壇の上に登った。すると祭壇からは濃い霧が吹き出し、彼女を呑み込む。更に側にいたキャロンも白く包んでいった。

薄暗いトンネルを足早に歩いて行くサラ。その後うしろに付いていくキャロンだったが、足が思うように前に進まず、サラとの距離がどんどん離れていく。

「サラさん待って！ ……なんで？ どうして？ 足が重くて、進めないい！」

大声で叫んでいるキャロンの声はサラに届いていないのだろうか、振り向きもせず先に進んでいく。

やがて薄闇の中にサラの姿が消えてしまうと、

「……………きゃあ！」

突然、床がウネウネと波打ち、足を取られたキャロンは尻餅をついてしまった。

「痛たた……なによもう！」

キャロンが顔を上げると、目の前には表面が黒くヌルヌルとした壁が立ち塞がっていた。「えっ、どうして行き止まりに？」

慌てて周りを見回すと前後左右を壁に囲まれ、彼女は狭い部屋に閉じ込められていた。

「一体どうなってるの？」

(あなたはここから先に進んじやだめ)

何処からともなく……否、それはキャロンの頭の中に直接響いてくるように声が聞こえてきた。

「誰なの？　ここから出して！」

壁に取りすがり、ドンドンと叩き始めるキャロン。

(そんなにエッチな体なのにゴモロスへの捧げ物じゃなかったなんて。すっかり騙だまされてしまったわ)

「何を言ってる……あっ！」

頭の中に広がる声の波紋が、今まで思い出せずにいたこの世界での経験セツクスの記憶をキャロンに蘇よみがえらせていた。

「やだ……こんなの……あたし変態よ……」

悍おぞましさを感じるほどの淫行にキャロンは思わず目をつぶったが、まぶたの裏に更に鮮明な場ヴァイジョン面が映し出されてしまう。

「……でも……でも……とつても気持ちよかった」

肌に刻まれていたゾワゾワとした快感が呼び起こされ、キャロンは体が堪たまらなく熱くな

っていく。

(ウフフツ、さようなら。儀式が終わるまで大人しくしてなさい)

「あつ、待って、ここから出して」

(そうそう、そのエッチな体のおもてなしはちゃんとしてあげるから、ウフフツ)

声が消えると同時に、部屋の四方八方から枯れ枝のような突起が飛び出し、キャロンのローブを一気に切り裂いた。

「きゃあつ！」

突起はキャロンを丸裸にすると、今度は触手の群へと形を変え、彼女の体に殺到していった。

「いやあん！ なにこれえ！」

体に絡みついてくる無数の触手を振り解ほどこうとするキャロンだったが、手が滑って逃れることが出来ない。

小指ほどの太さの触手はよく見ると先端が亀頭のような形をしており、そこから透明の粘液をトロトロと分泌していた。分泌液を塗り広げながら、幾本もの触手がキャロンの体を這いずり回る。

「いやあつ！ ……だめえつ、こんな…ああんっ、はあああ…っ」

徐々にキャロンの体からは強張りこわばが消えていき、彼女がその身を触手に委ねるまでさほど時間はかからなかった。手足に絡み付いた触手が四方にピンと張り、キャロンをX字にはりつけにす。

キャロンの目の前で何本かの触手がシユルシユルと伸びてくると、それらは螺旋状らせんに絡み合い一本の太いペニス状触手へと形作られていく。

「ああ……だめ……そんなの……」

甘い吐息と共に漏れ出した言葉とは裏腹にキャロンの瞳は期待に満ちていた。

ジユルッ！

部屋の中心ではりつけにされたキャロンをペニス状触手が串刺しくしぎ刑の如く貫いた。

「あんっ！ ……あああっ、ああああっ！」

行く手に光らしきものが見えると、サラの足は自然と小走りになり、やがて出口に辿り着く。

「ここにシャドルが……」

鏡の中の大聖堂が再び彼女を迎え入れていた。

「ようこそ巫女……シャドルの器よ」

「！」

サラが声のした方に振り向くと、そこには鏡の中で出会った少女が立っていた。

「一人でって言ったのに……」

その少女の不機嫌そうな言葉に、キャロンがついて来ていた事にサラは初めて気付く。

「……あの子に何かしたの？」

少し険しい表情に変わるサラ。

「うふふ、まさか。彼女はミュウですもの、丁重におもてなしをして帰ってもらったわ」

「そう、よかった」

ほっとするサラ。

そして、一呼吸置くと少女の前でローブを脱ぎ、薄衣も脱ぎ捨て全裸になるサラ。

「うふふ、自分の役割が分かっているようね」

「……」

無言でうなず頷くサラ。

「ここに身を捧げなさい」

少女はサラを祭壇上へと促し、サラもそれに従う。

「儀式を始める前にあなたの体には違う力が宿っている。まずはそれを清めない……」

シユルシユル……

祭壇の側面から生えてきた何本もの触手がサラの体を縛り付けると、そのまま流れるようにM字開脚をさせ、サラの女陰を露わにした。そして、触手の群の中から一本のペニス状触手が現れ、巫女の蜜壺の中にヌルリと収まると我が物顔で暴れ出す。

「あうっ！」

ジュプツ、ジュプツ、

「あああっ……はあああん……」

サラもラモー・ルーによって性の手ほどきを受けた身、程無く彼女の体は快楽を受け入れていた。

「ああんっ！ あっ、はあああんっ！」

ジュルツ、ジュルツ、ジュルツ、

触手ペニスはサラの弱点を探し当てると、執拗にそこばかりを刺す。

「んっああっ！あああっ！いっ、やああっ、ああああっ！」

やがて、サラの昂揚と同期するように彼女の下部にラモー・ルーの淫紋が浮かび上がってくる。それを待っていたかのように触手ペニスは射精を始める。

ビュツ、ビュルツ！ ビュツビュツ！

「ああっだめっ……あっ、あああああああっ！」  
 子宮に熱い精液を浴び、絶頂に達するサラ。と同時に彼女に刻まれていたラモー・ルーの淫紋しるしが消えていく……。

祭壇の上のサラを見下ろす少女……と、その横にはどこから現れたのか、黒く大きな人影があった。

「さあ、あなたにシャドルを授けましょう」

黒く大きな人影がサラの上に覆い被さり彼女を犯し始めた。

のっぺらぼうの黒い顔から紅い舌が現れ、サラの体を舐ねぶりながら、前戯もそこそこに長く長いペニスを挿入した。

「ああっ！ ……はああんっ、ああっ！ ああっ！」

触手ペニスで解ほぐされたサラの秘所は黒い影の巨根を易々やすやすと呑み込む。

グジュツ！ グジュツ！ グジュツ！

「はんっ！ ああんっ、はああっ！ ああああっ！」

ピストン運動で胎内を揺らされ、昂ぶったサラはさらに強い淫欲の波動を求め、両脚を黒い影の胴に絡める。

グジュツ！ グジュツ！ グジュツ！

「ああっ！ ああっ！ あっあっ！ あああっ、あっ！」

黒い影はサラを騎乗位の体勢にすると下から激しく突き上げ始め、サラの体はまるで乗馬をしているかのよう<sup>せわ</sup>に上下に忙しく跳ねる。

「あっあああっ！ ああんっ！ ああんっ！ ああんっ！ ああんっ！」

ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、

大聖堂に目合まぐわいの淫猥な音が拍手のように鳴り渡る。

「あっあああっ！ きて…… 私に、ちようだい……っ、ああああっ！」

サラに応えるように、黒い影のペニスの根元から何本もの触手が生えだしてくると、彼女の陰唇に張り付いた。墜ツァギナからペニスが抜けないように固定されると、黒い影は亀頭でポルチオをこじ開けんばかりに激しく叩きながら射精を始める。

ドピュツ、ピュツ、ピュツ、ピュツ！

子宮を破られるかのような暴力的な射精がサラをオルガスムスへと導く。

「うああっ！ ああああー！ーっ！」

ビクンビクンと体を痙攣させるサラ。

ピュツ、ピュ、ピュ……

射精を終えると黒い人影の姿が徐々に薄くなっていき、やがて消えてしまった。

(今からあなたがシャドルの女王よ……)

あの少女の声がサラの頭の中に木霊する。

大聖堂には祭壇の上に体を横たえたサラだけが残されていた。

「はあ……ああ……」

乱れた呼吸を整えながらサラはふと右腕にはめた腕輪に目を落す。

「あっ……」

腕輪にそれまで刻まれていた文字は消え、新たに違う文字が浮かび上がっていた。

「ここに我が力の鍵を収める」

……古代ラル語を理解出来る者ならそう読めただろう。

ゴモロス神殿の大聖堂に満ちていた霧が消え去ると、壁に掛けられた大鏡の前で気を失っているキャロンを発見するラモー・ルー。

「キャロン！」

まるで要らない物を投げ捨てたかのように床に転がされていたキャロンを抱き起こすラモー・ルー。

「うううん……」

すぐに意識を取り戻したキャロンに魔王は安堵の表情を浮かべる。

「気がついたか……サラはどこだ？」

「サラさん？ サラさんは……あたし見失っちゃって」

「見失った？ どこでだ？」

「あたし、鏡の中で……」

シ  
ユ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ

突然、祭壇から噴水のように濃い霧が吹き上げた。

「ぬうっ、また霧か！ 忌々しんしい！」

己がマントを掴むと霧からキャロンを庇うように拡げるラモー・ルー。

霧の噴水が徐々に弱まっていくと、祭壇の上にユラユラと人影が浮かび上がってきた。

「……おお、サラ」

「サラさん……」

そこには穏やかなサラの微笑みがあった。

ラルの眞話<sup>しんわ</sup>

遙<sup>はる</sup>かな昔、女神が偉大なる力で無からこの宇宙を創造した。余り有る創造の力はこの宇宙に残留してしまい、再び世界を無に帰すほどのものであった。女神は宇宙の中心にあつたラルの星にその力を封印すると、管理をリバースの女王とゴモロス王に、彼等が没すると以降はその血筋の者達へと委<sup>ゆた</sup>ねた。

管理者には創造の力の一部を使う事を許されており、ラルの人々は豊かで平和な時代を何世代にも渡って享受していた。

しかし、一部の慢心した人々が創造の力を独占、そればかりか更に強力な力を得ようとリバースとゴモロス、二つの陣営に分かれて争いを起こしてしまつた。

争いは何十年と続いたが、ゴモロス王に連なる血筋のひとつ、ルウの氏族によって終止符が打たれた。

創造の力はリバースとゴモロス両方の血筋に代々伝わる因子——リバースの因子はミウ、ゴモロスの因子はシャドルと呼ばれていた——が揃うことにより使えていた。

ルウの氏族は魔力を用い、ゴモロス王の血筋の者からシャドルを抜きとり、これを異次

元に封じる事により、争いの元凶である創造の力を使えなくした。

創造の力を失った人々は戦いを止めた……否、生活基盤を支えていた創造の力の喪失で戦いの継続は不可能になったのだ。栄華を極めた生活を失ったラルの人々の恨みが力を奪ったルウの氏族に向けられた。魔力——それは「てくのろじい」とも呼ばれていた——を使う彼等を「魔族」と罵り、ついにはラルの星から追放してしまった……

ラモー・ルーの居室、ベッドの端に腰掛けたサラが鏡の中の世界から持ち帰った本を広げ朗読していた。

ベッドの上では胡座したラモー・ルーがサラの物語に耳を傾けていた。そして魔王の膝に跨ぐように座るキャロンの体がペニスに貫かれ上下していた。

「ウウム……それが遙か昔に失われた真実」

唸るように呟くラモー・ルー。

「万を数える年月を経て、真の意味は失われ、伝説に変わっていったのでしよう」

頷くサラ。

「んっ、はあ……、ああん……あはあ……」

キャロンはペニスの動きに合わせて腰をくねらせ、彼女の唇からは甘い吐息が漏れていた。

(ルウの氏族かあ……、ラモー様の名前に似てるな……)  
 キャロンには物語が難解過ぎた事もあり、ペニスの緩やかな上下運動で子宮を揺らされる心地よさに意識を集中していた。

ふとキャロンは鏡使いがこちらを見ている事に気付く。

(やだあ……うふ、そんなにここが見たいの？ 仕方ないなあ……)

鏡使いにラモー・ルーとの結合部がよく見えるように足をM字に開くキャロン。ぶくつと勃起したクリトリス、愛液を滴したらせペニスを頬張ほおばった睦ヴァギナが惜しげも無く丸見えにされた。

(うふっ……どう?)

しかし、鏡使いには何の反応もない——もとより髑髏されこうぶの顔に表情などなかったが——。よく観察してみると、鏡使いの視線はずっとサラに向けられていた。

(もう、失礼しちゃう！ サラさんばかり見て)

サラがページを捲めくる……。

「ルウの氏族はラルの人々が嘗かつての平和を取り戻した暁には再び創造の力が使えるよう、封印を解く仕掛けを残しました」

「ラルの四つの月が並ぶ刻

リバースとゴモロス、許し合った二つの血がゴモロス神殿に相見あいまみえた時

ゴモロス王の子に力を返そう

リバースとゴモロス、二つの血が鍵となり祭壇に立つ刻

女神の力は蘇る、

「リバースとはキャロン、ゴモロスとはサラ」

ラモー・ルーは二人の腕輪に交互に視線を向ける。

「そうです。四つの月が並んでいる今この時、リバースの血を受け継ぐキャロンがゴモロスの神殿に降り立ったことで、封印を解く仕掛けが動き始めたのです」

ラモー・ルーがキャロンの乳房を愛撫する。

「キャロンよ、何故あの時、ゴモロスの神殿にいたのだ？」

「はっああ……黒騎兵に追われて……、ゴモロスの神殿の上を飛んでいて……気付いたら大聖堂の中に……んっあん……」

腰を動かす事に夢中なキャロン。

「偶然か。あの場を通りかからなければ、おまえは今も村娘のまま……」

ラモー・ルーはキャロンの腰をむんずと掴むと、ペニスで彼女の子宮を激しく撲つ。

「ああっ！つあああっんっ！」

「次にゴモロスの神殿はシャドルを納める器を求めました」

「そのシグナルがあ霧か……」

ラモー・ルーの静かな口調とは裏腹に、彼の魔茎がキャロンの胎内なで暴れる。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！」

「シャドルが封印された異次元への通路が開いた証しるしなのでしょう」

「しかし、ミュウを持つキャロンを誘い込んだのは何故だ」

「キャロンの強い性欲を誤認したのかも。シャドルの因子は性欲を司るものと書かれて

います」

「フフフ、それはわしの羨しつげのせいでもあるか」

ラモー・ルーは亀頭でキャロンの胎内えんを抉えぐるように腰を動かし、精液をキャロンの子宮に浴びせる。

ビュツ、ビュツ、ビュルルツ！

「あっはああんっ、ああああんっ！」

「これほど淫欲に素直な娘とは思っていなかったからな、フフフ」

恍惚の表情を浮かべたキャロンがラモー・ルーの膝の上で体を揺らしていた。

「そして今、私の胎内からだにはシャドルが宿り……最後の儀式の刻ときが巡めぐってきます」  
 そう言って本を静かに閉じたサラの表情は少し寂しげに見えた。

ゴモロスの空中祭殿——

今まさにひとつに重なるうとしていたラルの四つの月が、夜の地の空に浮かぶゴモロスの空中祭殿を一層白く浮かび上がらせていた。

空中祭殿上に配置されたストーンサークル。その中央に立つキャロン、サラ、そしてラモー・ルー。三人はラルの月を見上げ、その刻をじっと待っていた。

静寂の中、やがてその瞬間が訪れる。ラルの月が一つになると、ストーンサークルが目映まばゆい光を放ち始めた。

「久しぶりですね、リバースの女王とゴモロス王の子らよ」

周りの至る所から声が響く。

「この声……誰だ？」

「女神様……」

サラが眩く。

「これが女神……」

ラモー・ルーが呻く。

「……」

キャロンは目の前で起っている事にぼかんと口を開けたまま。

「再び我が力を求めるなら、祭壇にその身を捧げなさい」

「はい……さあキャロン」

「えっ……あっ、はい」

サラが呆然としているキャロンの手を引き、祭壇へと促す。

「二人とも待つのだ……女神よ、捧げるとはどういう意味だ？」

ラモー・ルーが二人を制止する。

「……簡単に言えば生け贄です。これでラモー様は念願の女神の力を得ることが出来るのです」

代わりに答えたサラが祭壇へと歩き始める。

「でも、女神様の力を手に入れてもラルの人達に酷いことはしない、って約束してくださいね」

事前に事情を聞いていたのか、キャロンも寂しそうに微笑むとサラの後に続いた。

二人を見送るラモー・ルーが両腕を天に掲げ叫ぶ。

「フハハハ！ 女神の力を求め、この宇宙を彷徨い幾星霜、幾万里。ついにその力が我が手に……」

ストーンサークルが作り出した光の環が天高く伸びていき、夜空を刺し貫く光の柱となった。それは夜の地を真昼のように照らした。

静かなる時、リバーズの女王とゴモロスの王の子らによりよみがえる

ラルの星の大気圏を離れ、漆黒の宇宙に出るラモー・ルー城。

バルコニーから青く輝くラルの星を眺めるラモー・ルー……その隣にはサラ、そしてキヤロン。

「すごい！ラルの星ってこんなに綺麗だったのね……」

言葉は明るかったが、ラルの星を離れる寂しさにキヤロンの瞳は少し潤んでいた。

「良かったのですか？封印を解かないで……」

サラが見つめるその先にはラモー・ルー城が引き連れている巨岩の群の中に浮かぶゴモロスの空中祭殿があった。

「小娘二人と引き換えに手に入るような力、わたしには必要ないのだ」

「小娘なんて、ひどい！……こんな素敵なレディに向かって」

ふくれっ面になったキヤロンがラモー・ルーの前で「ばれえ」を舞って見せる。腕を、脚を高く上げ、より体を淫猥に魅せるように踊る……が、やはり彼女の「ばれえ」はお世辞にも上手いとは言えない動きで、バランスを崩したキヤロンはラモー・ルーの腕に倒れ

込んだ。

「きゃっ！」

「ふん、お前はまだまだ練習が足りぬ」

「うう……」

こんなはずでは、と無念の表情のキャロン。

「うふふ」

微笑むサラ。

「ラモー様、進路のご指示を」

三人の傍らに控えていた従者がうなが促すと、ラモー・ルーはサラの方に顔を向けた。

「サラよ、わしはルウの氏族が持っていた魔力マてくのろじいトとやらに興味がある」

「……はい」

サラはシャドルで手に入れた本を開くと、そこに書かれている文字を指でなぞる。

「この本の最後の章、そこに書き残されているルウの氏族の行き先は……」

ラルの国――

ユリア王女の帰還から半年ほど経った頃、突然、夜シヤドルの地で光の柱が空に伸びていく怪現象が見られ、ラルの人々を驚かせた。

ラモー・ルー軍団の新たな侵略の予兆よちようかと怖れたラルの人々は夜シヤドルの地へと偵察隊を派遣した。

偵察隊が先まず発見したのは夜シヤドルの地にあれほど徘徊していた魔物がまったくいなくなっていた事だった。その為、偵察隊は難なく夜シヤドルの地奥深くへと進む事ができた。

そして、長い行軍の果て、ユリア王女より知らされていたラモー・ルー城があるという地へと到達する。

しかし、そこには何も存在せず、ただ荒野が広がっているだけだった。偵察隊はしばらくその場所に留まり情報収集に努めたが、得られたのは魔王の城が忽然こっぜんと姿を消したという事実だけだった。

その後もラモー・ルー軍団が消えた理由はついに分からず、ラルの人々の間では「女神が光の柱でラモー・ルーを焼き尽くしたのだ」とか、「伝説の剣士がリバーズの剣でラモー・ルーを倒したのだ」などと噂が流れていた。

ともあれ、ラモー・ルーという恐怖が消え去り、ラルの国は嘗ての活気を取り戻してい

た。

ラル城のバルコニーから城下街を見下ろすライケ。

「ご覧よ、ユリア。ラモー・ルーが居なくなっておかげで街があんなに賑わって」

「そうね、あなた」

ライケの傍らには膨らみ始めたお腹をなでるユリア王女。

「しかし、僕はあのラモ・ルーが滅んだとは思えないんだ。奴め、いったいどこへ行っ  
たんだろう？」

「平和が戻り、民が笑顔で暮らしているのですから、良いではないですか」

「うん、まあ……そうだな」

ライケは再び城下に視線を戻し、幸せそうな笑顔を浮かべていた。

「ウフフ、そうですよ」

遙か遠く空の彼方を見つめるユリア。彼女の瞳が一瞬朱く怪しく輝いた……。